

343



始



343-1 :

天
覽

忠勇顯彰會編纂

寄贈本



忠勇列傳

假刷

8 1 6
寄贈

明治三十七八年戰役

大阪府殊勲生存者之部第二卷

社
細
稷
倚



勤

忠

正毅題



忠 勇 列 傳 [府縣別假刷]

明治三十七八年戰役

大阪府殊勳生存者之部

凡 例

一明治三十七八年戰役ニ於ケル忠勇義烈ノ士ハ其數幾十萬ノ多キニ達シ、實ニ日本國民忠愛ノ精華ヲ發揮シテ遺憾ナシト云フベシ。尙益々之ガ精神ヲ涵養スルノ活資料トシ、將又國民教育ノ好龜鑑トシテ之ヲ全國各學校、教育家、軍人、軍屬、竝ニ戰死病歿者ノ遺族及關係者ハ勿論、其他一般ノ家庭ニ普及セシムルハ本會ノ素志ナルヲ以テ、傳記編纂成ルニ隨ヒテ逐次分冊假刷トシテ出版スルコト、シ、茲ニ明治三十七八年戰役大阪府殊勳生存者之部第二卷ヲ刊行ス。

一忠勇列傳ノ書ハ極メテ大部冊トナルベキヲ以テ、其叙記努メテ簡明ヲ期シ、例ヘバ叙授賞典ノ文書ノ如キハ、非常ニ拔群超卓ノモノ、外、通常一定ノ例ニ依レルモノハ、之ヲ省キタルモノト勘カラズ。能フ限リ繁雜ナル文飾ヲ避ケテ、事實ヲ直筆センコトヲ期セリ。

一列傳ノ體裁ハ、成ルベク統一センコトヲ欲スルモ、資料ノ蒐集甚ダ困難ニシテ、各方面ヨリ蒐集シ

得タル資料モ、各人精粗一定ヲ得ズ。從テ本會所定ノ記載項目ニ對シ、不備ノ點尠カラズシテ、繁簡自ラ一致シ難ク、加之資料ノ事實ニ關シテハ、可成調査ヲ加ヘ、精確ヲ期シタレドモ、他日誤謬ヲ發見セバ之ヲ訂正センコトヲ期スル次第ナレバ、是等ノ點ニ關シテ讀者ノ心付カレタル事アラバ、報道ノ勞ヲ吝マザランコトヲ希望ス。

一 編纂當時ノ官職、階級順ニ依リ、同級者ハ姓名イロハ順ニ依リテ排列セリ。戰役後改姓シタル者ハ現在ノ姓ヲ掲ゲ、舊姓ハ索引中ニ納メテ搜索ニ便セリ。

一 殊勳者ノ肖像ハ、悉ク之ヲ掲載スル等ニテ、其寫眞ヲ蒐集セント努メタルモ、居所不明等ニテ得ル能ハザル者アリ、是等ハ他日ニ至リテ得ルコトアラバ便宜追補スル所アラント欲ス。

一 本書列傳ノ資料ハ本會委員部ニテ其地方ノ官公衙ヲ經テ蒐集シ、特ニ戰歴ノ如キハ其ノ正確ヲ期セシメシ、是等ハ得ルニ隨ツテ増補センコトヲ期ス。

一 陸軍省教育總監部編纂ノ忠勇美譚及ビ海軍省教育本部編纂ノ明治三十七八年戰役海戰誠忠錄ニ登載セラレタル事實中特ニ壯烈萬世ニ傳フベキモノハ參照シテ其事蹟ノ洩レザランコトヲ期セリ。

一 清國奉天省、即盛京省ニ就テハ、左記故那珂文學博士ノ意見ニ據リテ、本書ハ總テ奉天省ノ名稱ヲ用キタリ。

〔元來東三省には省の名無く、只盛京等處云々、吉林等處云々と云ひたりしが、それにては甚不便なる故に、盛京の名を取りて盛京省とも云ひ、奉天府の名を取りて奉天省とも云へり。これはいづれも俗稱にて、遂には公稱の如くなる也。三名とも并べ用ひらるれども、馬關條約の時に、條約文中盛京省の文字ありしに、清朝より其文字を奉天省と訂正し來りし事あれば、清朝にては奉天省の名を用ふることにして見らるべし。〕（下略）

一 清國青泥窪ハ、當時ノ遼東守備軍司令官西陸軍大將ノ發シタル報告ニ依テ、明治三十八年二月十一日以後、大連ト改稱セラレタルヲ以テ、本書ハ同日以後、大連ト書シ、其下ニ（青泥窪）ト記シテ、對照ニ便ニス。

一 大平溝東南方標高二〇三米突高地、寺兒溝西北方標高一〇一米突高地等ノ如ク、高地ノ高サヲ標示スル米突ノ二字ハ、總テ之ヲ略シ、特ニ標高二〇三高地ノ如キ、著名ニシテ人口ニ藉々タルモノハ、其方向ヲモ略シタリ。

大正七年十月

忠勇顯彰會

忠勇列傳

明治卅七年戰役 大阪府殊勳生存者之部 第二卷

目次

第五編	大阪市東區 (三).....	一
第六編	大阪市西區 (三).....	八七
第七編	大阪市南區 (三).....	二六三
第八編	大阪市北區 (三).....	四〇六

忠勇列傳

明治三十七八年戰役

大阪府殊勳生存者之部 第二卷

索引

本索引ハ、姓氏の發音ニ從ヒテ、いろは順ニ排列シ、搜索ノ便ヲ圖リテ假名遣ヲ正サズ。あ、を、をハ、い、え、おノ部ニ收メ、あふ、あうハおウニ、かう、かふハこうノ部ニ收メタリ。

泉石	今井	井上	井上	岩野	岩田	一柳	い	原	原	土井	ぬ	沼津	わ	和	和	加藤	河合	河原	川口	と	堀尾	堀	泉	は	服部	服部	播磨	服部		
本	井	上	上	野	田	柳		田	田	井	津	津	田	田	田	藤	合	原	口	と	尾	尾	石	泉	部	部	磨	部		
源	寅	重	勲	巳	鹿	信		繁	繁	德	米	米	文	文	昇	常	國	福	と	長	武	本	源	源	末	源	新			
之	之	之	之	之	之	太		藏	藏	太	太	治	治	治	太	太	太	藏	藏	吉	吉	之	之	之	之	之	之	次		
助	助	助	助	助	助	郎		郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	
(南)	(西)	(東)	(西)	(西)	(東)	(西)		(北)	(北)	(南)	(北)	(北)	(西)	(西)	(北)	(西)	(西)	(西)	(西)	(北)	(北)	(南)	(南)	(南)	(北)	(南)	(南)	(西)	(西)	
三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九		三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九	三九

忠勇列傳索引

川崎和吉(西)
川下清市(西)
川木友十郎(北)
龜島善三郎(南)
柏木福松(東)

よ

横山愛之助(西)
吉田力藏(西)
吉村清吉(北)

た

大東安太郎(北)
谷川三次郎(西)
橋久保雄策(東)
高木信松(東)
多賀谷信一(北)
多田龜次郎(南)
田中鶴松(西)
竹山繁次郎(西)

山口千賀藏(南)
山下長之助(西)
山元軍吉(北)

ま

松井伊之助(西)
松村隆太郎(北)
松村傳吉(南)
松下梅太郎(西)
松本平四郎(西)
前田數易(南)
横納美代太(南)

ふ

古小路重次郎(西)
藤井淺平(西)
藤原知市(北)
藤繩政造(北)

乙

小西與三郎(南)
小西國三郎(東)
五島米藏(西)

辻阪宗次郎(北)
中出次太郎(西)
中尾新三郎(北)
中川米平七郎(西)
中田傳之助(北)
中田久吉(南)
中田宗次郎(北)
中村重次郎(北)
中島善八郎(西)
中本喜三郎(北)

な

梅田直次郎(北)
上田直次郎(北)
梅田豐吉(南)
梅田豐吉(南)

お

尾西信次郎(北)
岡茂三郎(西)
岡田篤次郎(西)
小田政一(南)
織田文治(西)
大磯文一(南)
太田與三郎(南)
太田元治郎(南)
大谷利三郎(東)
大谷信吉(南)
大河内信(南)
奥野喜之助(南)
奥野伊之助(西)
奥野甚三郎(西)
奥田清三郎(東)
桑名菊松(西)
熊野平七(西)
八十田元治郎(南)
山内藤次郎(南)

や

く

兒玉幸吉(西)
小間井次作(西)
小松義次郎(南)
小寺千代丸(北)
小島鐵次郎(東)

え

江村金次郎(西)

て

寺脇菊松(西)
寺田音次郎(東)

あ

愛原彦藏(南)
有馬太郎(東)
青木鹿藏(東)
淡野辰藏(西)
赤井關次(東)

さ

西見岩吉(西)

佐藤昇太郎(南)
澤田新次郎(南)
坂口滿多三(東)
佐野又之丞(東)
佐野政次郎(北)
佐治眞六郎(西)
木原五郎(南)
木田留吉(西)
木谷勉次郎(西)
木村實次郎(東)
岸田繁平(北)
毛受辰藏(南)
光畑淺平(西)
満留政吉(北)
南留政吉(北)
宮井愛之助(西)

み

め

き

し

柴崎喜三郎(西)
白井藤右衛門(北)
篠塚藤助(東)
篠塚秀太郎(東)
重原辰之助(西)
下桑田政一(南)

二六
二五
二四
二三
二二
二一
二〇

鈴木徳三郎(南)
鈴木謙助(南)
鈴木三(南)

す

二七
二八
二九

ひ

平尾國三郎(東)
平田政次郎(北)
平田信太郎(西)
平松秀吉(西)
樋口光太郎(西)

一三
一二
一一
一〇
〇九

も

森下市平(北)
森本榮作(北)

〇八
〇七
〇六

せ

勢川又吉(西)

〇五
〇四
〇三
〇二
〇一

忠勇列傳 [府縣別假刷]

明治三十七八年戰役

大阪府殊勳生存者之部 第二卷

忠勇顯彰會編纂



第五編 大阪市東區殊勳生存者 (三)

陸軍之部

陸軍二等軍醫正正六位勳四等功三級有馬太郎

有馬太郎ハ、大阪ノ人 有馬脩治ノ男ニシテ、安政四年正月生ル。母ヲ由良子ト云ヘリ。明治二年六月同姓貞三ノ養子トナレリ、養母ハ操ト曰フ。十年五

第五編 大阪市東區

月貞三ノ女瀧江ト結婚シ、二男ヲ擧グ。幼時大阪ニ於テ藤澤南岳ヲ師トシ、又



京都ニ於テ贄ヲ神山五郎ニ入レ專ラ漢學ヲ修メ、明治四年二月ヨリ六年五月マデ京都府立中學校ニ入リ、佛人レーマン及ビ米人ボルレンノ二師ニ從ヒ佛蘭西語及ビ英吉利西語ヲ學ビ、又英國領事ガワルニ就キ英語ヲ研修セリ。又同年中大阪ニ出デ文部省教授松村矩明ニ

從ヒ醫學諸科ヲ修業シ、八年兵庫縣外務課ニ出仕シ、英醫ヒールノ通譯ヲ爲シ、驅黴院創立ニ從事ス。後養父病死セルヲ以テ、專ラ醫學ヲ研修セント欲シ、外務課出仕ヲ辭シテ再ビ松村矩明ノ塾ニ入り、醫學ヲ勉強シ、旁ラ生徒ヲ教授セリ。又大阪府立病院ニ在テ教師ノ蘭醫エルメンズニ就キ内外科ノ實地研究ヲ爲シ

タリ。十年西南ノ役ニ際シ陸軍々醫試補ニ任セラレ、十一年九月陸軍々醫補ニ進ミ、十六年二月陸軍々醫副トナリ、十九年二月陸軍一等軍醫ニ任セラレ、二十五年三月陸軍三等軍醫正職務心得トナリ、十一月陸軍三等軍醫正ニ任セラレ、二十六年十月豫備役トナリシガ、十年公務ニ從ヒシ以來其ノ餘暇ヲ以テ獨逸語ヲ修メ又當時醫學ノ泰斗ト稱セラレタル橋本綱常(後醫學博士)及ビ佐藤進(同上)ニ師事シテ外科ヲ專修シ、又陸軍々醫學校ニ就イテ專ラ細菌學ヲ修メタリ。

二十七年七月二十六日、日清戰役ニ召集セラレ、次イデ出征シ、各地ノ戰闘ニ於テ傷者ノ救護ニ從事シ、患者ノ治療ニ努力シ、常ニ熱誠ヲ披瀝シテ懇篤至ラザル所ナク、殊ニ戰役中韓國ニ於テ赤痢病猖獗ヲ極メ、慘憺タル狀況ノ中ニ在ツテ自カラ患者ノ糞便ヲ始末スルニ至レリ。此他傷者患者ニ對スル熱誠懇篤ナル態度ハ各隊ニ互リテ激賞セラレタルガ、石黒野戰衛生長官ヨリ附與セラレタル賞狀左ノ如シ。

賞 狀

後送患者ノ語ルヲ聞キ又在戰地患者ノ來信ニ據ルニ其地定立病院ノ懇篤周到ヲ稱スル者多ク又兵站軍醫部長ノ報告中ニモ相見エ貴下首ノ職員勉勵ノ致ス所ト感心致シ本日香川皇后宮大夫ヲ經テ其ノ概況ヲ 皇后陛下ノ御聞ニ達シ度旨申出候職員益々勉勵可被致此段申達候也

明治二十八年二月二十日

於大本營 石黒野戰衛生長官

同年十月十八日、明治二十七八年戰役ノ功ニ依リ功四級金鷄勳章、年金五百圓、及ビ勳六等單光旭日章ヲ授ケ賜ハリタリ。十一月二十七日召集解除トナリ、爾後大阪市東區南本町二丁目ニ住居シ、醫師ヲ開業セリ。

三十七年八月二十一日、召集ニ應ジ、第三軍兵站監部附ヲ命ゼラレ、二十五日宇品港ヨリ乗船シテ、二十九日清國青泥窪ニ上陸シ、青泥窪兵站病院第二分院長ニ補セラレ、十月十四日、青泥窪兵站病院長兼勤トナリ、二十二日青泥窪

兵站病院第二分院長ヲ免ジ、青泥窪兵站病院長專務ヲ命ゼラレ、三十日陸軍二等軍醫正ニ任ゼラレ、十二月六日正六位ニ叙セラレ。

青泥窪兵站病院長ニ專任セラレタルハ兼テ精神家敏腕家トノ定評アリタルニ因リ特ニ拔擢セラレタルモノニシテ、就任以來從來ノ面目ヲ刷新シ、入院者ニ對スル注意周到ヲ極メ、懇篤至ラザルナカリシカバ、傷病者ハ深ク之ヲ德トシテ、内地ニ後送セラル、ヲ好マズ、却ツテ病院ニ留マランコトヲ希望スルモノ在ルニ至レリ。其ノ熱誠ヨリ出ヅル美德ハ枚舉ニ遑アラズト雖、特ニ大書スベキハ死者ニ對スル取扱ヒノ鄭重ナルコトナリ。屍室ノ入口ニ「死者ニ對スルハ生者ニ對スルヨリモ鄭重ナレ」トノ箴言ヲ掲ゲ、死者ノ前ニハ白幕ヲ張り、祭壇ヲ設ケ、香華ヲ供シテ厚ク之ヲ祀リ、毫モ遺憾ナキヲ期セリ。故ニ之ヲ一見セシ者ハ皆感涙ヲ催サザルハ莫ク、入院中患者ノ慰安ヲ得ルハ勿論、故郷ニ在ル家族ヲシテ安神セシムルニ足ル其ノ功蹟ハ實ニ顯著ナルモノアリタリ。又同院ヲ訪問シタル日韓美以教會監督神學博士エム、シー、ハリスノ書信ハ左

ノ如シ。

拜啓野生儀本日貴官監督下ノ病院ヲ御訪問申上候際ハ御懇切ニ御案内被下御厚志難有奉深謝候是迄諸所ノ病院ヲ訪問致シ親切ナル醫官諸氏ニ面接致候ヘドモ貴院ノ如キ傷病者ニ對スル注意ノ懇篤周到ナル將タ又死者ニ對スル取扱法等ノ如キハ全ク他所ニ類例ヲ見ザル所ニシテ深ク小生ノ腦裡ニ印シテ將來決シテ忘ルベカラザル一事ニ御座候小生ハ貴官ガ慈愛ト扶助トノ大事業ニ對シ上帝モ感受アラセラレンコトヲ日々懇ニ祈願可致又上帝モ貴官ニ永久ノ生命幸福ヲ授ケ賜フベシト確信仕候生ハ貴官監下ノ各病院ノ傷病者ニ何カノ一助ニセラレンコトヲ希望シ些細ノ寄贈ヲ仕度候其使用分配等ハ貴官ノ最モ好シト信ゼラレタル方法ニ一任可仕候(生儀モ出來得ベクンバ光輝アル日本勇士ニ對シ壹萬金ヲ送り度候ヘ共不肖未ダ其機ニ接セズ)貴官ノ熱誠博愛ニ對シテハミルラー氏ノ著書中ニアル親切ナル言葉ノ寫シヲ見出サレタシ其一節ハ余ガ十分ニ寫シ取りタルモノニ御座候貴官ヨリ御

贈與被下候水菓子一籠ハ幾重ニモ難有受納仕候

西曆一千九百五年五月廿日

「ダールニー」ニテ エム、シー、ハリス

親愛ナル 有馬太郎殿

左ニ英國人ミルラー博士著滿洲實見錄ノ一節ヲ錄ス

青泥窪病院全體ヲ監理セル陸軍軍醫正有馬太郎氏ト共ニ同病院ノ一部ヲ訪問シ、又露國俘虜ノ傷病者ヲモ見舞ヒタリ。同院長有馬氏ハ思慮周密ノ精神家ニシテ、其職務タル自己ノ事業ニ對シ身心ヲ捧ゲツ、アルコトヲ余ガ腦裡ニ銘記セシメタリ。氏ハ獨リ日本ノ傷病者ノミナラズ露國ノ俘虜傷病者ニ對シテモ頗ル懇切ヲ極メタリ。之ガ爲ニ氏ノ好評ハ其部下及ビ出征各部隊内ニ藉甚タリ。其凡ベテノ各室ヲ通ジテノ懇切ニ傷病者及ビ不具者取扱方ヲ指示セル訓示ヲ貼付セリ。此著明ナル軍醫正ノ名譽ナル讚辭及ビ其意見ニ就テハ彼ノ部下ト雖決シテ吾等如キニハ話シ能ハザルナリ。

傷病者ガ旅順又ハ北方ヨリ汽車ニ依リテ到着スル時ニ、彼等ハ長途ノ旅行ニヨリテ疲勞困憊病苦ニ呻吟シテ、此地ニ著スルヤ氏ハ寄附ニヨレル一杯ノ酒其他興奮飲料ヲ給與セラル。氏ハ又最大ノ考慮ヲ以テ死者ヲ取扱ヘリ。余ガ旅行中見聞セシモノ、中最モ余ガ視覺ヲ感ゼシメタルモノハ、當地海岸ノ一面ヲ眼下ニ見下ス好風景ノ斷崖山ニ建設セラレタル屍室及ビ其附近一帶ノ招魂記念場ナリキ。此所ニハ彼ノ傷痕ニヨリテ死亡セル者ノ死體ハ最ト莊嚴ナル靈屋中ニ安置セラレ、頗ル名譽ト尊敬トノ意ヲ以テ取扱ハレ居レリ。此靈屋ノ壁間ニハ氏ガ訓示ヲ掲ゲラル。余ハ其意ヲ左ニ記スベシ「死者ノ靈魂ハ尙吾等ト共ニ在リ爾等ハ彼等ヲ生ケルガ如ク鄭重ニ取扱ハレヨ」。

此ニ於テ余ハ此善良ナル軍醫正ガ實施セラレ、事業ニ二大要義アルコトヲ發見セリ。是レゾ氏ガ實行ノ基礎トナリテ、軍隊内ニ斯ノ如キ大名譽ヲ荷フ所以ナリ。其要義トハ何ゾヤ。一ハ熱誠ノ同情ヲ以テ傷病者ヲ懇切叮嚀ニ取

扱フコト、一ハ死者ヲ生キツ、アルガ如ク待遇スルコト是レナリ。氏ハ出征將士ガ假令ヒ不幸ニシテ傷疾ノ爲ニ死亡スルモ、多大ノ尊敬ト名譽トヲ以テ取扱フトキハ世人ニ對シテハ少カラザル満足ヲ與ヘ、延イテ社會全般ニ至大ノ影響ヲ有スルコトヲ信ズルモノナリ。露國俘虜傷病者ハ四五十名一ツノ大ナル病室ニ收容サレ居レリ。有馬軍醫正ノ通譯官ヲ介シテ彼等ハ親切ニ待遇サレ居ルヤ、給養ノ點ハ如何ニ、又暖カニ安眠シ得ルヤ否ヤヲ質問セシニ、彼等ハ異口同音ニ感謝ノ辭ヲ叫ビ出シ、十分ニ満足シ居レルコトノ確證ヲ與ヘタリ。余ハ之レヲ以テ當然ノ事ト思惟ス。何トナレバ彼等俘虜傷病者ハ毫モ日本人ト其取扱ノ異ナルコトヲケレバナリ。

又負傷俘虜ノ感謝セル實況談ヲ聞クニ彼ノ「アレキサンドル」名譽聯隊附陸軍中佐クリンケンベルヒ以下俘虜負傷將校十名ハ、青泥窪兵站病院將校病室ニ入院セシカバ、太郎ハ巡診ノ後、英語ヲ以テ彼等將校ニ向ヒ「卿等ハ祖國ノ爲身ヲ挺シテ皇軍ト戦ヒ、武運拙クモ敗戦負傷終ニ俘虜ノ身トナル、勞苦困難悲

歎ノ情察シ入ル。今卿等傷疾ノ狀況ヲ見ルニ致命傷症ノモノ一モ無シ、クリンケンベルヒ氏ノ如キハ上膊ノ破碎骨傷銃創ニシテ筋肉ノ潰爛甚シケレバ切斷ヲ行フ場合ナキニアラザルモ、今ハ其期ニアラズ、宜シク適應ノ治術ヲ爲サン。諸士靜養セラレヨ。院内ニ入浴場アリ、理髮師モ雇入レアレバ卿等ノ望ミニ任ゼン、後刻余ガ持チ合ハセル洋酒ト鮮魚トヲ贈與セン」ト語りタルニ、一同敬拜シテ感謝ノ意ヲ表セリ。斯クテ病院ニ在ルコト九日、職員ノ慈心厚キニ感ジ、入浴理髮セシ者ノ如キハ切りニ頭部ヲ指シテ多謝ノ聲ヲ放チ喜色滿面ニ溢レタリ。其中ノ一人ニ砲兵大尉タルノウスキート云ヘル者アリ、英佛獨ノ三語ヲ巧ミニ繰リ、常ニ院長ノ通譯タリシガ、或ル日一葉ノ寫眞ヲ出シテ曰ク「コハ不肖ノ妻ナリ、當時篤志看護婦トナリ戰地ニ在リテ我負傷者ヲ救護シツツアリ、今ヤ夫タル不肖ハ貴病院ニ在リテ厚キ看護ヲ受ク實ニ奇遇ナラズヤ」ト。又背部ノ舊創痕ヲ現ハシ時計ニ附著セル彈丸ヲ出シ「此傷痕彈丸ハ露土戰爭ノ記念ナレバ妻ノ寫眞ト共ニ須臾モ肌身ヲ離サズ大切ニ携帯シ居ル」ト物

語りシニハ一同感興ヲ催シタリト云フ。又同大尉ガ故國ニ送リタル書信中ニ左ノ如キ一節アリキ。

日本ハ我等ノ考ヘ居リシヨリ遙カニ文明進步ノ國ニシテ、特ニ醫術ノ進歩ニ至ツテハ實ニ舌ヲ捲クベシ。我等ノ收容サレ居ル病院長ハ有馬太郎ト稱シ、戰功ニ依リ得ラレタル名譽アル金鷄勳章ハ常ニ氏ノ胸間ニ燦トシ、氏ノ博愛慈善ナル行爲ト其ノ手術ノ巧妙迅速ナルハ我故國ニ於テ見ル能ハザル位トス。今我等ハ此病院長ノ下ニ治療ヲ受ケ居ルモ不日日本ニ後送トナラ

ン。

同年十二月十四日、第三軍兵站監部附ヲ免ジ、遼東守備軍司令部附ヲ命ゼラレ、爾來幾多ノ困難ヲ排シテ其ノ職務ニ盡瘁シ、功績多大ナリキ。

三十八年五月二十四日、遼東守備軍司令部附ヲ免ジ、大阪豫備病院附ヲ命ゼラレ、二十六日大連灣ヲ出帆シテ歸朝ノ途ニ就キシニ、時會々對馬附近海戰ニ際シ、韓國八日浦ニ停船シ、二十九日八日浦ヲ解纜シテ、三十日宇品港ニ上陸

シ、六月一日大阪ニ歸著シ、十四日大阪豫備病院阿部野分院長ニ就職セリ。十一月十日、大阪豫備病院附ヲ免ゼラレ、十七日召集解除トナレリ。三十日勳五等ニ陞叙シ瑞寶章ヲ授ケラル。

戰役ノ功ニ依リ功三級金鵄勳章、年金七百圓、並ビニ勳四等旭日小綬章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵大尉正六位勳五等功五級小島一

小島一ハ、大阪市東區玉造八尾町ノ士族、政元ノ長男ニシテ、明治八年十二月生ル。母ヲ君枝ト曰フ。後、同區森之宮東ノ町ニ移轉シ、現時住所ハ大阪府北河内郡庭窪村大字八雲ナリ。妻セフトノ間ニ二男一女アリ。十三年二月玉造小學校ニ入りテ全科ヲ卒業シ、二十三年五月東京共立中學校ニ入學シ、二十五年七月退學シ、二十六年一月東京成城學校ニ入り、三十年五月卒業セリ。

三十三年六月陸軍砲兵少尉ニ任ゼラレ、野戰砲兵第四聯隊附ニ補セラレ、七月正八位ニ叙セラル。三十五年十一月砲兵中尉ニ進ミ、三十六年二月從七位ニ叙セラル。

三十七年三月六日動員令下リ、野戰砲兵第四聯隊段列小隊長ニ補セラレ、待命ノ間、複雑ナル事務及ビ徵發馬匹ノ調教ニ任ゼシガ、其ノ結果良好ナリキ。四月三十日大阪ヲ發シ、五月十八日宇品港ヨリ乗船シテ、二十二日清國遼東半島張家屯ニ上陸シ、困難ナル長途ノ行軍ニ就キシガ、奮勵努力シテ、其ノ任務ヲ完ウセリ。二十五日ヨリ二十六日ニ亙リ金州城及ビ南山ノ攻撃ニ參加シ、殊ニ金州城ノ夜襲ニ際シテハ、夜半雷雨激シク、行動困難ナリシモ、敵彈ノ下ニ在ツテ能ク其任務ヲ盡シ、續イテ南山ノ攻撃ニ加ハルヤ戰鬪激烈ニシテ戰線ニ於ケル其ノ彈藥ノ消費夥多ナリシモ、銳意之レガ補給ヲ爲シテ我が砲火ヲ盛ナラシメ、且段列ノ人馬非常ニ疲勞セシモ、能ク部下ヲ激勵シテ其ノ任務遂行ニ支障ナカラシメタリ。七月九日、蓋平ノ攻撃ニ參加スルヤ夜間ノ行軍ナルニ

且道路泥濘ニシテ車輛ノ運動容易ナラザリシモ、部下ヲ督勵シテ迅速ニ彈藥ヲ運搬シ、毫モ澁滞ナク戰線ヘ補給セリ。次イデ二十三日ヨリ二十五日ニ亙リ大石橋附近ニ、八月一日ヨリ四日マデ海城附近ニ轉戰シ、二十六日ヨリ九月四日ニ亙リ遼陽附近各所ノ戰鬪ニ參加セシガ連日降雨ノ爲、道路泥濘ニシテ車輛ノ運動困難ヲ極メ、且人馬ノ給養不充分ナリシヲ以テ斃馬續出シ、非常ノ困難ヲ重ネ、彈藥縱列モ亦行進澁滞セシニ由リ、其ノ間甚ダ隔離シ、加フルニ戰線ニ於ケル彈藥ノ費消夥多ニシテ、然カモ一方ニハ補充殆ド不可能ノ狀況ナリシカバ、一ハ奮然トシテ部下ヲ勵マシツ、彈藥ノ補充ニ努メ、其ノ任務ヲ完ウセリ。越エテ十月十日ヨリ十六日マデ沙河ノ會戰ニ參與シ、其ノ十二日油虫堡附近ノ戰鬪ニ於テハ、戰ヒ激烈ヲ極メ、戰線ノ費消セル彈藥ハ夥多ニシテ、之レガ補充ノ急ヲ告グルニ拘ラズ、彈藥縱列ノ遠ク隔タリシ爲、補充意ノ如クナラズ、然カモ戰線ノ需要ハ刻一刻急ヲ告ゲ、寸時モ猶豫ヲ許サザル情況ナリシカバ、奮然身ヲ挺シテ部下ヲ激勵シ、彈藥補充ノ任ニ當リシガ、此ノ際遮蔽路

ヲ取ルコト到底不可能ナルヲ以テ、敵彈雨注ノ下ニ暴露シテ東奔西走シ、其ノ任務ヲ遂行シテ戰線ノ火力ヲ發揚スルコトヲ得セシメタリ。次イデ十四日張良堡附近ノ戰鬪ニ於テ我砲兵隊ハ非常ナル苦戰ニ陥リ、彈藥ノ補充急ヲ告ゲシガ、之レガ補充路ハ敵彈ノ猛射ヲ受ケテ人馬ノ負傷續出セシモ、一ハ毫モ屈セズシテ巧ミニ部下ヲ指揮誘導シテ補充ノ任務ヲ完ウセリ。此ノ戰鬪ニ於テ所屬野戰砲兵第四聯隊ハ拔群ノ功ニ由リ軍司令官ヨリ感狀ヲ授與セラレタリ。同月下旬ヨリ沙河對陣トナリ、十二月十日、野戰砲兵第四聯隊第五中隊小隊長ヲ命ゼラレ、武器ノ擔任及ビ補充兵ノ教育ニ任ジ、奮勵克ク好成績ヲ擧ゲシガ、越エテ三十八年一月二十五日ヨリ二十九日ニ亙ル黑溝臺附近ノ會戰ニ參加シ殊ニ二十八日ハ大武鎮營ニ向ツテ敵ヲ牽制スル爲小隊射撃ヲ掌リ、敵ニ多大ノ損害ヲ與ヘ、所屬隊ヲシテ其ノ目的ヲ達セシメタリ。二月十五日、第四師團彈藥大隊縱列長ヲ命ゼラレ、二十日砲兵大尉ニ任ゼラル。二十七日ヨリ三月十日ニ亙ル奉天附近ノ會戰ニ參加シ、第二砲兵彈藥縱列長トシテ彈藥補充ノ任

ニ當ルヤ其ノ業務最モ困難ニシテ、殊ニ人馬ノ疲勞甚シカリシモ、銳意部下ヲ指導シテ晝夜兼行克ク其ノ任務ヲ完ウセリ。斯クテ駐軍中及ビ行軍ノ間ニ於テモ馬匹ノ保育ニ注意シ、或ハ兵器彈藥ヲ整理シ、又補充兵ノ教育ニ努メシ等其ノ功績尠カラザリキ。四月五日正七位ニ叙セラレ。十二月二十一日、柳樹屯ヨリ乗船シテ、二十四日和田岬ニ上陸シ、次イデ大阪ニ凱旋セリ。

戰役ノ功ニ依リ、功五級金鷄勳章、年金三百圓、並ビニ勳五等双光旭日章ヲ授ケ賜ハリタリ。四十四年五月從六位ニ叙シ、十一月豫備役ヲ命ゼラレ、四十五年二月正六位ニ叙セラレ。

陸軍歩兵中尉從七位勳六等功五級原彌太郎

原彌太郎ハ、大阪市東區備後町ノ人、彌藏ノ長男ニシテ、明治十四年五月生ル。母ヲかねト曰フ。後同區南本町二丁目ニ移轉ス。二十八年四月市立商業學

校(今ノ市立大阪高等商業學校)ニ入學シ、三十二年三月卒業セシガ、在學中

同校所定第二外國語中清語學ヲ二年間修業セリ。後、妻安惠ヲ娶ル。



三十二年十二月一年志願兵トシテ歩兵第三十七聯隊ニ入隊シ三十二年十一月一年志願兵終末試験ニ及第シ、陸軍歩兵軍曹ニ任ゼラレ、退營ト同時ニ引續キ

九十日間豫備見習士官トシテ同隊ニ在ツテ勤務演習ニ服務セリ。三十五年三月陸軍歩兵少尉ニ任ゼラレ、六月正八位ニ叙セラレ。

三十七年三月八日、充員召集ニ應ジ、第四師團衛生隊第二中隊附ヲ命ゼラレ、待命間ハ部下ノ教育ニ任ジ熱心勵精良好ナル成績ヲ舉ゲシガ、又教育ノ餘暇

ヲ以テ兵器委員トナリ、繁多ナル業務ニ從事シ、敏活ニ動作シテ能ク諸務ヲ整理セリ。其ノ功績甚ダ顯著ナリキ。四月三十日、擔架小隊長トシテ征途ニ就キ、五月十四日宇品港ヲ解纜シテ、十九日清國遼東半島張家屯ニ上陸シ、爾來金州南山ノ戰鬪ヨリ沙河ノ會戰ニ至ルマデ常ニ躬行率先克ク部下ヲ督勵シ、彈雨ノ下、傷者ノ收容ニ任ジ、勇敢敏活ニ動作シテ其ノ任務ヲ完ウセリ。同月二十六日金州南山ノ攻撃ニ於テ、午前五時五十五分繃帶所ヲ西山侯家屯西方高地ノ南麓其他二ヶ所ニ轉進開設シ、傷者ノ收容ニ當ルヤ、此ノ地一帶平坦開豁ナル地形ニシテ一ノ遮蔽物ナク、加フルニ敵ハ南山ノ險ヲ扼シ、銃砲彈及ビ機關砲火ヲ集中セシカバ死傷者續出シ、前進頗ル困難ヲ極ムルニ拘ラズ、部下ヲ指導シテ第一線ニ進出シ、厲聲叱咤シテ傷者ノ收容ニ力ムルヤ、敵彈ノ亂射益々激烈ヲ加ヘシモ、巧ミニ部下ヲ掌握シ、小數ノ擔架ヲ以テ數百ノ傷者ヲ迅速ニ收容シ、衛生隊ノ作業上ニ莫大ノ利益ヲ與ヘ、先進隊ノ行動ヲ容易ナラシメタルガ、其功績實ニ偉大ナリキ。六月十六日午後四時ヨリ急行シ、東龍口附近ニ

在ル右側枝隊第十九旅團ノ傷者收容ニ從事スルニ當リ、道路險惡加フルニ炎熱熾クガ如クナリシモ行程約九里ヲ前進シテ、深夜東龍口ニ著シ、翌十七日午前七時三十分ヨリ部下小隊ヲ以テ同地東北方三十米突ニ在ル高地即チ鐵道線路ノ地區附近ニ到リテ傷者ヲ收容セントスルヤ、驟雨殺到シ來リテ山谿一時ニ氾濫シ、擔送頗ル困難ヲ極メタルモ、能ク部下ヲ指揮督勵シテ山野谿路ヲ跋涉シ、辛ウジテ襲家溝ニ在ル假繃帶所ニ至リ、懇切ニ傷者ヲ介抱シ、更ニ雨ヲ衝イテ、距離約六千五百米突ナル仙茶屯第三野戰病院ニ搬送シ、其ノ任務ヲ完ウシテ、十八日本隊ニ合セリ。七月二十四日午後五時三十分、太平庄ニ繃帶所ヲ開設シ、砲兵旅團並ビニ砲兵第四聯隊ノ傷者ヲ收容スルノ任ニ當リシガ、此日彼我ノ砲火頗ル激烈ニシテ殊ニ多數ノ傷者ヲ生ジ、且繃帶所附近ニハ曳火彈頗リニ落下シ、我ガ擔架卒ニ多數ノ傷者ヲ生ジ、行動最モ困難ヲ重ネタルモ、毫モ屈セズ、自若トシテ部下ヲ掌握シ、挺身戰線ニ進入シ、懇ニ傷者ヲ介抱シ、之ヲ後方ニ搬送スルニ當リテハ擔架卒ノ疲勞セルヲ見、或ハ慰メ或ハ諭シツ

ツ一里半乃至二里餘ノ遠距離ニ在ル第四野戰病院ニ後送セシメ、翌十五日午後二時迄ニ全ク搬送ヲ終リタリ。九月二日、遼陽停車場附近ノ攻撃ニ際シ、歩兵第三十七聯隊ハ前石橋子ニ於テ優勢ナル敵ニ遭遇シ、大ニ苦戦シテ傷者ヲ多ク出セシヲ以テ、午後五時二十分「ロンバオシヤン」東方無名部落ニ繃帶所ヲ開設シ、前石橋子附近ニ於ケル負傷者ヲ當方面ニ收容スル事トナルヤ、距離遠隔ニシテ殊ニ道路ノ泥濘前日ニ數倍シテ脛以上ニ達シ、進退自由ナラズ、加フルニ敵ハ猛烈ナル銃砲火ヲ集中シ、危険甚シカリシモ、豪膽不屈沈著ニ動作シテ部下ヲ提ゲ、戰線ニ進出シテ傷者ノ收容ニ從事シ、夜ニ入りテ我第一線ハ戰況上若干退却ノ命ニ接セシモ、少數ノ擔架卒ヲ以テ一時ニ多數ノ傷者ヲ搬送スルコト能ハザルヲ以テ、第一線ハ元位置ヲ固守セザルベカラザリシガ、此ノ時擔架卒ハ疲勞殆ド其ノ極ニ達セリ。然レドモ斯カル危急ノ際、徒ラニ逡巡スルヲ許サズ、彌太郎奮然トシテ部下ヲ叱咤激勵シツ、殆ド寢食ヲ廢シテ其ノ任ニ當リ、後方楊家林子ニ一時傷者ヲ收容シ、以テ第一線ノ運動ヲ容易ナラ

シメ、然ル後逐次繃帶所ニ收容シ、翌三日未明ニ迄ビ全ク之ガ收容ヲ終ヘ、更ニ之ヲ後送シ、午後七時迄ニ遺憾ナク搬送ヲ果シタリ。十月十一日午後六時三十分ヨリ青堆子、小油虫堡ニ逐次繃帶所ヲ開設スルヤ、歩兵第八聯隊ノ傷者ヲ收容スベキ命ヲ受ケ、猛烈ナル敵ノ銃砲火ヲ冒シ、巧ニ部下ヲ掌握シテ戰線ニ進入セシガ、部下擔架卒ノ負傷スル者相踵ギシモ敢テ屈セズ、收容ノ任務ヲ完ウシ、翌十二日午後七時ヨリ部下小隊ヲ以テ大臺ニアル下江大隊ノ傷者收容ヲ命ゼラル、ヤ、道路泥濘加フルニ暗夜ニシテ地理ニ熟セズ、前進最モ困難ヲ重ネシモ、沈著ニ地理ヲ案ジテ其ノ方向ヲ誤ラザランコトニ注意シ、能ク部下ヲ指導シテ遂ニ目的地ニ達シ、完全ニ該方面ノ傷者ヲ收容シ、翌日午前零時其ノ搬送ヲ終了シ、引續キ是等ノ傷者ヲ野戰病院ニ後送セリ。所屬中隊長ハ「前記ノ沈勇剛毅ナル所爲ハ我が攻撃軍ニ多大ナル效益ヲ與ヘ其ノ功績頗ル偉大ナリトス」ト稱セリ。

越エテ十一月二十日遼陽縣南部紅綾堡ニ於テ第二中隊長馬場績ノ部下ニ屬

シ、二十四日南部紅綾堡救護班長ヲ命ゼラレ能ク部下ヲ激勵シテ熱心ニ其ノ職務ヲ執行セリ。

三十八年一月二十五日ヨリ二十九日ニ亙ル黒溝臺附近ノ會戰ニ參與シ、二十九日ヨリ二月一日ニ亙リ第八師團衛生隊應援ノ爲、蘇麻堡及ビ河埵子ニ派遣セラレ、傷者收容ノ監督ヲ命ゼラレ、部下ヲ督勵シテ幾回トナク傷者ヲ後送セシガ、擔架卒ニ十分ノ注意ヲ與ヘ、傷者ノ致死ヲ免レシメタル功績甚ダ顯著ナリキ。同月十二日、陸軍歩兵中尉ニ進級シ、二十日擔架第一中隊附トナリ、同中隊長奥野中尉ノ指揮ニ屬シ、平和克復ニ至ルマデ終始一貫勤務ニ奮勵シテ、衛生隊ノ成績ヲ擧ゲタルガ其ノ功績實ニ多大ナリキ。

越エテ三月一日午後四時前高大人屯ニ在ル繃帶所ヲ發シ、部下小隊ヲ率キ、敵ノ銃砲火ヲ冒シテ沈旦堡ニ進入シ、小樹子附近ノ傷者收容ニ從事シ、翌二日午前九時ヨリ沈旦堡北端ニ在ル歩兵第九聯隊假繃帶所ノ傷者收容ニ從事シ、午後三時其ノ任務ヲ終了シテ、午後九時韓山臺繃帶所ニ歸著セリ。次イデ四日

午後一時ヨリ猛烈ナル銃砲火ヲ冒シ、部下小隊ヲ率キ、八雲庄、玄家、八家子ヲ經テ北部燒鍋ニ前進シ、小林子、來神堡方向ノ傷者ヲ瓜加臺ノ繃帶所ニ收容スルノ任ニ當リ、徹宵シテ翌日午前十一時ニ至リ完全ニ收容シ終リタリ。六日午前十一時ヨリ下士以下三名ヲ率キ、萬水圈子、大蘇堡ニ至リ戰況ヲ視察シ、翌七日歩兵第十九旅團ノ全滅ヲ期シテ小貴興堡ノ敵ヲ強襲スルニ方リ、午後二時邊城子ノ繃帶所ヲ發シ、翌八日午後三時マデ寸時モ眠ラズ、寸時モ休息セズ、引續キ猛烈ナル敵ノ砲火ヲ冒シテ部下ヲ督勵シツ、達子營、小貴興堡ニ在ル數百ノ傷者ヲ收容シタリ。同月二十二日從七位ニ叙セラル。四月一日ヨリ後家窩棚檢疫委員ヲ命ゼラレシガ、夏期ニ及ンデ各地ニ傳染病患者續出シ、攝生ノ注意最モ緊要ナリシカバ、周到ナル監督ノ下ニ衛生ノ道ヲ勵行シ、其ノ結果最モ良好ナリキ。又各戰鬪ニ參加シテ諸勤務ニ服セシ外、衛生隊編成上、副官ノ制ナキヲ以テ常ニ隊長ノ命ニ由リ師團命令其他ノ受領及ビ傳達ノ任務ニ當リ、忠實ニ其ノ職責ヲ盡セリ。

戰役ノ功ニ依リ、功五級金鷄勳章、年金三百圓、並ビニ勳六等單光旭日章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵特務曹長勳七等功七級大谷利三郎

大谷利三郎ハ、大阪市東區南久寶寺町ノ平民、庄兵衛ノ次男ニシテ、明治十一年三月生ル。二十六年三月高等小學校ヲ卒業シ、次イデ私立共成黌ニ入學シ普通學ヲ修メ、三十年一月退學ス。

三十一年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十二年十二月歩兵一等卒ヲ歴テ上等兵ニ進ミ、三十三年十二月歩兵伍長ニ任ゼラル。三十四年六月臺灣守備歩兵第四聯隊附ヲ命ゼラレ、十月三十日歩兵軍曹ニ任ゼラル。三十五年九月臺灣守備交代シ、大阪ニ歸隊セリ。三十六年三月下士特別教育檢定試験ニ合格シ、四月ヨリ十二月マデ普通學講習會開設ニ就キ普通學ヲ修メタリ。後、妻さくヲ

娶リ、二女ヲ舉ゲ、現時大阪市北區役所ノ吏員トナレリ。

三十七年三月六日動員令下リ、歩兵第八聯隊第二中隊附ヲ命ゼラレ、四月二十三日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、同日大阪港ヨリ乗船シテ、五月十一日、清國奉天省孫家咀子ニ上陸シ、十五日歩兵曹長ニ任ゼラレ、二十六日金州南山ノ攻撃ニ參加シ、傳令使トシテ猛烈ナル敵火ヲ冒シ、屢々散兵線上ヲ縱橫奔馳シテ重要ナル命令ヲ傳達シ、迅速確實ニ其ノ任務ヲ達成シ、中隊ノ戰鬪ヲシテ中隊長ノ意圖ノ如クニ進捗セシムルコトヲ得タリ。又常ニ勇敢ニ行動シテ他兵ニ好模範ヲ示シ中隊ノ士氣ヲ鼓舞セシガ、偶々敵彈ノ爲ニ負傷シ、野戰病院ニ收容セラレ、次イデ各地病院ヲ經テ内地ニ後送セラレ、廣島豫備病院ニ入り大阪豫備病院ニ轉送セラレ、八月十八日全治退院シ、歩兵第八聯隊補充大隊第一中隊附ヲ命ゼラレ、爾來孜々トシテ勉勵シ、中隊長ヲ補佐シテ繁劇ナル中隊事務ヲ敏活ニ處理シ、毫モ遺憾ナカラシメタリ。三十八年二月十五日歩兵特務曹長ニ任ゼラレ、同年七月十二日以來下士教育ノ教官トシテ熱心忠實其ノ職

責ヲ盡シ、同月三十日ヨリ兼務トシテ留守第四師團參謀部ノ助手ヲ勤メ、十月七日ヨリ十五日ニ至ル間、第三十九回ノ戰地補充員引率官トシテ字品ニ出張ヲ命ゼラレ、皆能ク其ノ任務ヲ完ウセリ。十二月復員下令後歩兵第八聯隊附トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵曹長勳七等功六級柏木福松

柏木福松(舊姓森江)ハ、大阪府泉北郡三寶村字南島ノ人、森江由松ノ五男ニシテ、明治十四年四月生ル。母ヲとくと曰フ。後柏木福平ノ養子トナリ、大阪市東區上本町九丁目ニ住居シ、米穀商ヲ營ミ、妻あいなチ娶リテ一女ヲ舉グ。二十二年四月堺市錦尋常小學校ニ入學シ、二十六年三月卒業シ、四月堺市櫛

屋町東二丁目高等小學校ニ入學シ、同年九月退校セリ。尋常小學校在學中ハ每學期成績優等ニシテ其都度賞ヲ受ケタリ。

三十四年十二月大阪歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十五年十二月歩兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十六年十二月歩兵伍長ニ任ゼラル。

三十七年三月六日動員令下リ、歩兵第八聯隊第六中隊附ヲ命ゼラレ、四月二十三日、出征ノ爲、大阪衛戍地ヲ發シ、同日大阪港ヨリ乗船シテ、五月十日、清國遼東半島ニ上陸シ、二十六日金州南山ノ戰鬪ニ參加シ、彈丸雨注ノ下ニ在ツテ泰然自若部下ヲ督勵シテ戰ヒ、次イデ突撃ニ當リテハ克ク部下ヲ掌握シテ敵陣ニ突進セリ。六月十日歩兵軍曹ニ任ゼラル。同月十五日得利寺ノ戰鬪ニ於テハ砲兵ヲ掩護シ、急行龍口後ヨリ逸出スル敵ヲ追撃スルニ當リ、分隊長トシテ率先部下ヲ激勵シ、克ク其ノ職責ヲ竭シ、同月下旬軍ノ先進支隊ニ屬シ熊岳城附近ニ駐屯セシ際、屢々斥候長トシテ深く敵地ニ侵入シ、又下士哨長トシテ克ク其ノ任務ヲ完ウセシノミナラズ、二十七日優勢ナル敵騎ノ熊岳城ニ來襲

スルヤ、分遣小隊ニ屬シテ其ノ西方吳家屯附近ニ前進シ、之ト對戰シテ其ノ三中隊ヲ擊退セリ。次イデ七月九日蓋平ノ攻撃ニ際シテハ分遣小隊ニ屬シテ、砲兵第一聯隊誘導掩護ノ任ニ當リ、徹霄其ノ任務ヲ遂行シ、拂曉歸來シテ散兵線ニ加ハリ、更ニ新開嶺ノ敵ヲ攻撃シ、砲火ヲ冒シテ之ヲ北方平原ニ追撃セリ。次イデ二十三日ヨリ二十五日ニ亙ル大石橋附近ノ戰鬥中、苦熱ヲ意トセズ、連日激烈ナル砲彈下ニ在ツテ勇敢ニ戰ヒ、殊ニ二十五日白虎山上ニ在ツテ終日敵ノ警戒監視ニ任ゼリ。越エテ八月下旬ヨリ九月四日ニ亙ル鞍山站及ヒ遼陽ノ諸戰鬥ニ參加シ、最モ勇敢ニ闘ヒシガ、就中九月三日遼陽ノ總攻撃ニ際シ、敵ノ有效彈ハ猛威ヲ逞シクセルモ、福松毫モ屈セズ部下ヲ激勵シテ奮然躍進シ、敵ニ猛射ヲ注イデ戰鬥ノ進捗ニ努力セリ。斯クテ日暮ニ至リ、戰鬥益々激烈ニシテ且敵狀將ニ變ゼントスルノ兆アリ、乃チ選バレテ重要任務ヲ帶ビ、隣接部隊ノ第一線ニ往復シ、雨下スル彈丸ヲ物ノ數トモセズ從容トシテ其ノ任務ヲ遂行シ、我が戰鬥ヲ有利ナラシムルニ與リテ大ニ功アリキ。越エテ十月十日ヨリ沙

河ノ會戰ニ參加シ、其ノ日青堆子ノ敵ヲ夜襲スルニ當リ、小隊長ヲ輔佐シテ只管方位ヲ失ハザルコトニ力メ、自カラ進ンデ斥候長トナリ、黑暗中ノ中ニ不知案内ノ地ヲ搜索シ、非常ノ苦心ヲ以テ漸ク目的地點タル青堆子ヲ發見シ、小隊ヲ誘導シテ之ニ接近スルヤ、忽チ敵哨ノ知ル所ト爲リ、三面ヨリ猛烈ナル射撃ヲ受ケ、全隊平伏シテ殆ド絶望ノ狀況ヲ呈セシモ、福松毫モ屈セズ奮然部下ノ分隊ヲ以テ豪膽ニモ處々ヲ徘徊シツ、虛撃ヲ行ヒ、敵ノ動搖セルヲ看破シテ直チニ復命シ、引續キ部下五名ヲ選抜シテ村落ノ要路ヲ偵察シ、小隊ヲ誘導シツ、前面ノ村落ヲ突撃シテ拔群ノ功ヲ奏シ軍司令官ヨリ左ノ感狀ヲ授與セラレタリ。

感 狀

歩兵第八聯隊第六中隊

陸軍歩兵軍曹 森 江 福松

右者明治三十七年十月沙河ノ會戰中十一月青堆子夜襲ノ際斥候長トナリ細

心進路ニ注意シ所屬小隊將ニ該村ニ進入セントスルヤ敵歩哨ノ覺知スル所ト爲リ三面ヨリ猛射ヲ受ケ頗ル難境ニ陥リシ時軍曹ハ諸所ニ虛撃ヲ行ヒ敵ノ動搖ヲ看破シテ小隊長ニ報告シ決然部下五名ヲ選抜シテ村落内ニ進入シ突撃路ヲ偵察シ小隊ヲシテ遂ニ之ヲ占領スルヲ得セシメ爾後ニ於ケル戰鬥進捗上ニ大ナル裨益ヲ與ヘタリ仍テ其武功ヲ賞シ感狀ヲ授與ス

明治三十七年十月三十日

第二軍司令官男爵奧保章

又十一日小油虫堡ニ於テ俄然優勢ナル敵ト衝突スルヤ、夜來ノ勞苦ヲ意トセズ、咄嗟ノ間激烈ナル敵ノ集中火ヲ冒シテ部下ヲ誘導シ、隨時變化シ來ル敵狀ニ注意シテ確實ナル射撃ヲ繼續シ、有利ノ戰鬥ヲ爲スヲ得セシメ、翌十二日北畑臺ノ攻撃ニ於テハ敵火ノ掃射ノ下ニ在テ毅然トシテ屈セズ、巧ミニ部下ヲ掌握シテ長時間ノ砲撃ニ堪ヘ、次イデ攻撃前進ニ移ルヤ、蹶起躍進勇ヲ鼓シツ、部下ヲ激勵シテ猛進シ、爲ニ全隊ノ士氣ヲ旺盛ナラシムルニ力アリタ

リ。十四日張良堡西方無名部落ニ於テ優勢ナル敵ノ歩砲兵ヨリ攻撃ヲ受ルヤ、猛烈ナル銃砲火ヲ冒シテ部下ヲ督勵シツ、該部落ニ進入シ、陣地ノ構築及ビ防禦ノ一部ヲ擔任シ、沛然タル豪雨ヲ衝キ猛烈ナル集中火ヲ冒シテ長時間苦戰奮闘シ、心力ヲ竭シテ防禦戰ニ從事シ、遂ニ敵彈ノ爲ニ負傷セルモ屈セズシテ創痕ヲ裹ミ、斥候長トナリ深ク大武鎮營方向ニ進ミ詳カニ敵狀ヲ搜索シ警戒上ニ多大ノ利益ヲ與ヘタルガ、其ノ行動頗ル豪膽ナリキ。同月十七日ヨリ三十八年二月二十日ニ至ル沙河對陣中、嚴寒ヲ意トセズ多大ノ困苦ニ堪ヘ、近距離ニ於テ敵ト相對峙シ、或ハ所屬大隊ノ選抜兵ヨリ成ル斥候ニ長トシテ連夜凍地ヲ匍匐シ、敵ノ步哨線ニ接近シ、確實ニ狀況ヲ搜索スル等重要ナル任務ヲ遂行セシユト幾回ナルヲ知ラザリキ。

三十八年三月一日ヨリ十日ニ亙ル奉天附近ノ會戰中、終始特殊斥候長トシテ大隊傳令及ビ敵狀偵察等ノ重要ナル勤務ニ服シ、沈著豪膽常ニ彈雨ヲ冒シテ其ノ任務ヲ遂行シ、殊ニ三日八雲庄ノ敵情搜索ニ從事スルヤ、敵ノ銃砲火ハ

其ノ進路ニ集中シ、然カモ地形開濶ニシテ前進頗ル困難ナリシニ拘ラズ、百難ヲ排シテ該村ニ進入セシガ、此ノ時敵ノ銃砲火ハ一層激烈ヲ極メ、屋壁悉ク粉碎シテ身ヲ掩フベキモノナク、加フルニ所在火災ヲ起シ、光景悽慘ヲ極メタルモ泰然自若トシテ偵察ニ努力シ、精細緻密ナル報告ヲ呈シ、所屬聯隊ノ作戰上ニ大ナル利益ヲ與ヘ聯隊長ヨリ左ノ賞詞ヲ附與セラレタリ。

第六中隊

陸軍歩兵軍曹 森江 福松

右明治三十八年三月三日小房申附近ノ戰鬪ノ際八雲庄ノ敵狀偵察ニ任ジ剛膽敏捷巧ミニ敵ノ猛射ヲ避ケ遂ニ村内ニ進入シ機敏ニ其任務ヲ遂行シ有利ノ報告ヲ爲ス茲ニ其沈勇ナル動作ヲ賞ス

明治三十八年四月一日

歩兵第八聯隊長 能美 成一

同月四日小芽林子ノ攻撃ニ於テハ激烈ナル敵彈ノ下ニ在ツテ勇敢ニ活動シ

重要ナル命令報告ノ傳達ニ任ジ、最後ノ時機ニ至ルヤ率先身ヲ挺シテ敵ノ陣地ニ突撃シ有力ナル追撃射撃ヲ爲セリ。越エテ九月二十三日歩兵曹長ニ任ゼラレ第二中隊附トナリ、爾來命令報告ノ傳達ニ任ジ、又文書ノ往復ヲ司リ其他一切ノ中隊業務ニ鞅掌シ、整然且迅速ニ處理シテ些ノ過誤ナカリキ。十二月八日凱旋ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十一日和田岬ニ上陸シ、十三日大阪ニ凱旋セリ。
戰役ノ功ニ依リ功六級金鷄勳章、年金貳百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵曹長勳七等功七級高木信松

高木信松ハ、大阪府東成郡東平野町一丁目ノ人、木村平助ノ次男ニシテ、明治九年四月生ル。母ヲしまト曰フ。十六年三月大阪市東區内久寶寺町一丁目

高木文次郎ノ養子トナレリ。養母ハはるト云フ。十九年三月西高津尋常小學校ヲ卒業シ、次イデ玉造高等小學校ニ入り、二十一年三月第三學年ヲ修業シテ退校シ、六月ヨリ私塾ニ就キ漢學及ビ數學ヲ修メタリ。後、文次郎ノ女みよト結婚ス。

二十九年十二月大阪歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十年十一月歩兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十一年十二月歩兵二等軍曹ニ任ゼラレ、三十二年十二月下士制度改正ノ結果、歩兵軍曹ニ任ゼラル。三十三年十一月善行證書ヲ附與セラレテ滿期除隊トナレリ。

三十七年六月八日、補充召集ニ應ジ、歩兵第八聯隊第三中隊附トナリ、補充兵教育係トシテ熱心勉勵シ、懇篤ニ部下ヲ教育シ指導宜シキヲ得タリ。越エテ九月八日出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、大阪港ヨリ乗船シテ、十二日清國柳樹屯ニ上陸シ、十四日鳳凰山東北麓露營地後備歩兵第八聯隊第八中隊附トナリ、十月四日ヨリ九日マデ團山子南方遮蔽通路開鑿作業中、分隊長トシテ善ク部下

ヲ獎勵シ其ノ任務ヲ完ウセリ。次イデ二十七日曹家屯露營地ヲ撤シ、大孤山前南方高地ニ轉ジ、白銀山北砲臺ノ敵ニ對シ、守備戰並ビニ攻撃ニ從事シ、勇敢ニ部下ヲ督勵シテ戰ヒ、又連夜散兵壕ノ修築ニ從事シ、能ク小隊長ヲ輔佐シ、率先督勵シテ陣地ヲ鞏固ナラシメタリ。

三十八年一月一日、白銀山北砲臺ノ攻撃ニ參加シ、分隊長トシテ中隊ノ第一線ニ立ち、部下ヲ指揮シテ奮戰セリ。同月十一日所屬大隊ノ北進スルニ當リ、大行李護衛トシテ能ク其ノ任務ヲ盡シ、十四日本隊ニ歸隊シ、爾後大石橋附近鐵道電線守備ノ任ニ當リ、克ク部下ヲ督勵シテ其ノ任務ヲ完ウセリ。二月下旬ヨリ三月十日ニ亙リ奉天附近ノ會戰ニ參加セシガ、後方ノ運輸交通機關タル鐵道電線ノ守備ハ其ノ任實ニ重大ナルヲ以テ、第一線勤務中ト同一姿勢ニ在リテ警戒スベシトノ命ヲ受ケ、下士哨長又ハ斥候長トシテ克ク其ノ任務ヲ盡シ、其ノ間防禦工事ニ參加シテ殆ド晝夜ノ別ナク奮勵シ、又能ク警戒ノ任ヲ完ウセリ。殊ニ二月二十四日所屬大隊長ノ命ニ由リ敵情搜索ノ爲、一個分隊ノ斥候

長トシテ約五里餘ノ大高刊附近ヘ派遣セラレ、危險ヲ冒シテ敵地ニ進入シ、敵情ヲ審ラカニシテ有利ナル報告ヲ齎ラセシカバ、隊長ハ遺憾ナク其ノ任務ヲ遂行スルヲ得タリ。越エテ五月三十一日北進ノ途ニ上リ、菓子園、黃古洞、三臺子ニ宿營シテ其ノ附近ノ警戒ニ任ジ、又軍道開設ニ從事シ、旁ラ給養係トシテ中隊ノ被服裝具等ヲ整理セリ。十一月一日三臺子ヲ發シ、木廠ヲ經テ遼海屯ニ著シ、五日鐵嶺ヲ發シ、七日汽車輸送ニテ金州ニ著シ、柳樹屯ニ宿營シ、十一日同地ヲ出帆シテ、十五日和田岬ニ上陸シ、十七日大阪ニ凱旋シ、二十五日召集解除ノ處殘務整理ノ爲殘留シ、十二月二十五日步兵曹長ニ任ゼラレ、同日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍一等看護長勳七等功七級篠塚藤助

篠塚藤助(舊名秀太郎)ハ、大阪市東區南久太郎町ノ人、藤助ノ男ニシテ、明治十四年十月生ル。母ヲ慕みト曰フ。二十一年四月同區百濟尋常小學校ニ入學シ、二十五年三月卒業シ、四月同區高等小學校ニ入り、二十八年五月第三學年ノ中途ニシテ退學シ、小裁商ニ從事セリ。後、父病ヲ以テ死スルヤ其ノ名跡ヲ襲ギ、藤助ト改名シ妻たみヲ娶レリ。

三十四年十二月步兵第八聯隊ニ入隊シ、三十五年十二月步兵一等卒ニ進ミ、陸軍看護手ヲ命ゼラレ、三十六年十二月步兵第九聯隊附看護長勤務看護手トナレリ。

三十七年三月六日、動員令下リ八日三等看護長トナリ、爾後複雑ナル動員事務ニ執掌シ、軍醫ヲ輔佐シテ忠實ニ勉勵セリ。四月十四日、出征ノ爲、大津屯營ヲ發シ、二十二日大阪港ヨリ乗船シテ、五月十日、清國孫家咀子ニ上陸シ、

二十五日ヨリ二十六日ニ亙ル金州及南山ノ戦闘ニ參與シ、砲煙彈雨ノ間ヲ馳セテ多數ノ傷者ヲ救護シ、其ノ治療上ニ毫モ遺憾ナカラシメタリ。越エテ六月十五日得利寺附近ノ戦闘ニ於テ亦戰線勤務ニ服シ、多數ノ傷者ヲ救護シ、其ノ日ノ戦闘ヲ終ルヤ引續キ十七日ニ至ル迄、東龍口ニ開設中ノ假繙帶所ニ服務セリ。此ノ時衛生隊未ダ來著セズ、殊ニ同村ハ當時交戰地域内ニ屬シ、住民離散シ、患者保護ノ材料甚ダ缺乏シテ用意頗ル困難ナリシニ拘ラズ、病室ノ設備、患者ノ看護及ビ給養等ノ業務ニ從事シ、殆ド眠食ヲ忘レテ熱心ニ其ノ職務ニ努力セリ。七月九日、蓋平附近ノ戦闘ニ參與シ、其ノ後、三塊石ニ假休養室ヲ設クルヤ、懇篤ニ部員ヲ指導シ看護ノ任務ヲ完ウセリ。二十三日ヨリ二十五日ニ亙リ大石橋附近ニ、八月一日ヨリ四日ニ亙リ海城附近ニ轉戦シ、常ニ傷者ノ救護ニ從事シ、二十六日ヨリ九月四日マデ遼陽附近ニ轉戦シテ專ラ假繙帶所ノ勤務ニ服シ、危險區域内ニ在ツテ然カモ平然トシテ其任務ヲ遂行シ、殊ニ九月二日ヨリ四日ニ至ル三晝夜ハ殆ド寢食ノ違ナク傷者ノ救護ニ任ゼシガ、其

ノ動作懇切周到ナリシカバ傷者ニ多大ノ満足ヲ與ヘタリ。同月二十日二等看護長ニ任ゼラル。十月九日脚氣病ニ由リテ第三野戰病院ニ入り、次イデ内地ニ後送セラレ、十一月一日廣島豫備病院ニ入り、七日大阪豫備病院ニ移リ、二十一日全治退院シ、同日大阪豫備病院附テ命ゼラレ、二十五日迄天王寺分院病室ノ勤務ニ服シ、二十六日恩給調査係補助勤務ヲ命ゼラル。當初諸般ノ設備完全ナラザリシ時ヨリ刻苦勵精シテ看護ノ任ニ當リ、専ラ主任軍醫ノ意旨ヲ服膺シテ奮勵事ニ從ヒ、多數ノ傷項策定、患者ノ恩給診斷書類調製並ビニ整頓ノ事務ヲ掌理シ、常ニ周到ナル注意ヲ拂ヒ、業務ノ進捗上ニ多大ノ裨益ヲ與ヘタリ。三十八年八月二日、一等看護長ニ任ゼラレ、三十九年三月善行證書ヲ附與セラレテ滿期退營セリ。戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級小西國三郎



小西(舊姓平尾)國三郎ハ、大阪市東區伏見町五丁目ノ人、平尾伊兵衛ノ二男ニシテ、明治九年七月生ル。母ヲぬひト曰フ。後小西又助ノ養子トナリ、妻シゲトノ間ニ三男ヲ舉グ。家ハ毛織物商ニシテ引取商ヲ營メリ。十六年一月私立小野小學校ニ入學シ、十七年一月同區百濟小學校ニ入り、中等科三級修業中、二十年十一月退校シ、毛織物商小西又助ノ家ニ雇ハレ、其ノ業務ヲ見習ヒシガ、餘暇ヲ以テ長上ニ就キ普通學業ヲ修メタリ。

二十九年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十年十二月歩兵一等卒ヲ歷テ上

等兵ニ進ム。三十一年五月韓國守備交代トシテ渡韓シ、京城ノ守備ニ服シ、三十二年十一月善行證書及ビ下士適任證書ヲ附與セラレ、滿期除隊トナレリ。三十四年十一月豫備歩兵二等軍曹ニ任ゼラル。

三十七年三月八日、充員召集ニ應ジ、歩兵第八聯隊第十中隊附ヲ命ゼラレ、四月二十三日、出征ノ爲衛戍地ヲ發シ、大阪港ヨリ乗船シテ、五月十一日、清國孫家咀子ニ上陸シ、二十六日南山ノ攻撃ニ參加シ、終始第一線ニ在リシガ、敵彈ノ爲ニ斃ル、者頻々トシテ出デ、光景慘憺タリシモ敢テ意トセズ、部下ヲ指揮激勵シテ奮戰シ、次イデ突撃ニ當リテハ勇猛果敢ニ前進シテ敵壘ニ突入セリ。越エテ六月十四日及ビ十五日得利寺附近ノ戰鬥ニ參加シ、七月九日、蓋平ノ攻撃ニ於テ所屬中隊ハ第一線ニ在ッテ敵ヲ追撃シ、先登第一ニ沒溝山ヲ占領スルヤ、三方ヨリ優勢ナル敵ノ銃砲火ヲ受ケ、死傷續出シタルモ、沈著ニ部下ヲ指揮シテ應戰大ニ力メタリ。次イデ二十三日ヨリ二十五日ニ亙ル大石橋附近ノ戰鬥ニ參與セシガ、就中二十四日望馬臺ノ攻撃ニ當リ、所屬中隊ガ左

翼前哨中、夜二時優勢ナル敵ノ來襲ニ會フヤ、部下ヲ督シテ率先防戦セリ。八月一日ヨリ四日ニ亙リ海城附近ノ戦鬪ヲ歴テ、二十六日ヨリ九月四日ニ亙リ鞍山站、首山堡及ビ遼陽ニ轉戦シ、常ニ分隊長トシテ其ノ職責ヲ全ウセシガ、就中八月二十六日及ビ二十七日ニ於ケル鞍山站ノ戦鬪ニハ奮戦最モ努メ、續イテ三十日ヨリ三十一日ニ亙リ首山堡ノ激戦ニ參加シ、九月三日、遼陽停車場ノ攻撃ニ際シテハ、敵ノ射撃猛烈ニシテ死傷者續出シ、士氣沮喪セントスル色アリシカバ部下ヲ叱咤激勵シテ奮進シ、各兵ノ勇氣ヲ鼓舞シ、同夜十二時突撃ヲ實行スルニ當リ、猛然邁進シテ先登第一ニ敵壘ニ突入セリ。同月二十五日歩兵軍曹ニ任ゼラル。越エテ十月二日、所屬中隊ガ偵察隊トシテ包相屯ニアル敵騎ヲ攻撃スルニ際シ、選バレテ斥候長トナリテ敵情ヲ搜索シ、有利ナル報告ヲ爲シ、中隊ハ之ニ依リテ敵ノ陣地ヲ攻撃シ、容易ニ之ヲ占領スルヲ得シガ、國三郎ガ功與リテ大ニ力アリタリ。斯クテ其ノ占領後該地附近ノ敵情偵察中、優勢ナル敵ノ騎兵及ビ乘馬歩兵ノ攻撃ヲ受ルヤ、敵彈雨飛ノ下ニ在ツテ勇敢機敏

ニ行動シ、部下ヲ激勵シテ奮闘大ニ努メ、敵ニ多大ノ損害ヲ與ヘタリ。同月十日ヨリ沙河ノ會戦ニ參加シ、十二日所屬大隊ガ旅團ノ左翼掩護トシテ小臺ヲ占領スルヤ、敵ノ大部隊ハ大臺ヨリ我ニ向ツテ攻撃シ來リシカバ、即チ部下ヲ督シテ之ヲ邀撃シ、猛射ヲ浴ビセシカバ敵ハ多大ノ損害ヲ被リテ退却セリ。同月中旬ヨリ三十八年二月下旬ニ至ル沙河對陣中、歩兵第八聯隊機關砲隊ニ編入セラレ、三月一日ヨリ十日ニ亙ル奉天附近ノ會戦ニ參加シ、砲車長トシテ終始勇敢ニ動作シ其ノ任務ヲ完ウセリ。殊ニ五日富岡支隊ニ屬シ、漢城堡ノ攻撃ニ參加スルヤ、敵ノ銃砲彈ノ雨下スル間ニ在ツテ頻リニ部下ヲ激勵シ、機關砲火ノ威力ヲ發揚シ、攻撃隊ノ前進ヲ容易ナラシメタルガ、其ノ動作甚ダ勇猛ナリキ。又七日同支隊ハ一刻モ早ク漢城堡ヲ奪取スルノ必要ヲ生ジタルヲ以テ、同地ニ向ヒ肉薄前進ヲ爲スヤ、敵ハ頑強ニ抵抗シテ止マズ、尙且鐵道線路ニ據リテ其ノ陣地ヲ固守セル敵ハ其ノ砲兵ト共ニ急霰ノ如キ銃砲彈ヲ集中シ、我が死傷者ヲ出スコト頗ル多ク、支隊ハ苦戦ニ陥リタルガ、敵ハ勢ニ乘ジテ逆襲

ニ轉ゼントス。此ノ時一番砲手敵彈ノ爲ニ負傷スルヤ、自ラ砲手ニ代リテ熾ンニ猛火ヲ送り、多大ノ損害ヲ與ヘ、其ノ逆襲ノ企圖ヲ挫折セシメ、支隊ハ之ニ由リテ其ノ目的ヲ達シ、遂ニ漢城堡ヲ占領シ得タリ。六月四日、第四師團機關砲隊ニ轉屬シ、爾來十月十六日平和克復ニ至ルマデ昌圖ニ對陣シ、其ノ間第一線小隊ニ屬シ、熱心ニ職務ニ盡瘁セリ。十一月二十七日大阪ニ凱旋ス。出征中其ノ職務ニ勉強シ功績多カリシヲ以テ第二軍糧廠部長ヨリ賞詞ヲ附與セラレタリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級赤井關次

赤井關次ハ、廣島縣豊田郡小泉村ノ人、高畦徳四郎ノ五男ニシテ、明治十三年

一月生ル。母ヲこうト曰フ。二十八年三月忠海町豊田高等小學校ヲ卒業シ、四十年一月赤井忠七ノ養子トナリ、大阪市東區北濱三丁目ニ移轉シ、妻つるトノ間ニ一男一女ヲ擧グ。家業ハ洋反物卸商ナリ。

三十二年十二月歩兵第十一聯隊ニ入隊シ、三十三年七月北清事變ニ際シ、從軍ノ爲宇品港ヨリ乗船シテ清國ニ渡リ、十月廣島ニ歸營ス。十二月歩兵一等卒ヲ歴テ上等兵ニ進ミ、三十四年十一月清國事變ノ戰功ニ依リ勳八等ニ叙シ、白色桐葉章及金百二十圓ヲ賜ハリタリ。十二月歩兵伍長ニ任ゼラレ、三十五年十一月善行證書ヲ附與セラレテ滿期除隊トナレリ。

三十七年四月二十三日、充員召集ニ應ジ、歩兵第十一聯隊第八中隊附ヲ命ゼラレ、五月十五日宇品港ヨリ乗船シテ、二十日清國張家屯ニ上陸シ、二十五日及ビ二十六日金州城及ビ南山ノ攻撃ニ參與シ、六月四日ヨリ十四日マデ第二軍總豫備隊トナリ、十五日我ガ軍ノ得利寺總攻撃ヲ決行スルニ當リ、所屬中隊ガ第一線中隊トナリテ同地西南方高地ノ敵ヲ攻撃スルヤ、部下ヲ督勵シテ

前進シ、遂ニ敵ヲシテ退却セシメタリ。七月五日歩兵軍曹ニ任ゼラル。九日蓋平ノ戰鬪ヲ歴テ、二十三日ヨリ二十五日ニ亙ル大石橋附近ノ戰鬪ニ參加シ、殊ニ二十四日所屬聯隊ノ太平嶺西南方高地ニ在ル敵ノ堅壘ヲ攻撃スルニ當リ、其ノ猛烈ナル側面火ヲ受ケ、死傷者續出シ、苦戰ノ狀況ニアリシモ、毫モ屈セズシテ前進シ、該堡壘ニ肉薄シテ遂ニ突入シ、次イデ第二第三堡壘ニ向ツテ突撃ヲ決行スルニ當リ、部下ヲ督シテ勇猛果敢ニ奮進シ、所屬聯隊ハ遂ニ敵壘ヲ占領セシガ、關次ガ功與リテ甚大ナリキ。同月三十日ヨリ八月一日マデ橋木城附近ノ戰鬪ニ參與シ、二十六日ヨリ九月四日ニ亙リ鞍山站、首山堡及ビ遼陽等ニ轉戰シ、終始勇敢ニ動作セシガ、就中八月二十八日所屬聯隊ノ大石頭東北方高地ニ在ル敵ヲ攻撃スルニ當リ、部下ヲ督勵シテ彈雨ノ下ニ奮戰シ、三十一日新立屯西方高地ノ敵壘ヲ攻撃スルニ當リテハ部下ヲ指揮シテ率先堡壘ニ突入シ、其ノ占領ヲ確實ナラシメ、九月三日遼陽南方角面堡ノ攻撃ニ際シ、敵彈猛烈ニシテ死傷者多カリシモ毫モ屈スル色ナク部下ヲ激勵シテ奮戰セリ。越エ

テ十月十日ヨリ沙河ノ會戰ニ參加シ、十一日拂曉所屬聯隊ノ五里臺子東方高地ニ在ル敵ヲ強襲スルニ當リ、所屬中隊ハ大隊ノ第一線トナルヤ、毅然トシテ中隊ノ先頭ニ立チ、部下ヲ督勵シテ敵ノ猛火ヲ冒シツ、突進シ、敵ノ逆襲シ來ルヤ勇敢ニ奮戰シテ之ヲ退却セシメタリ。同月中旬ヨリ三十八年二月下旬マデ沙河對陣中、一月二十五日ヨリ二十九日ニ亙ル黑溝臺附近ノ會戰ニ參加セリ。二月二日ヨリ九日マデ柳條口附近ノ守備ニ任ジ、二十三日ヨリ二十八日マデ馬狼阻附近ニ在ツテ守備ノ任ニ當レリ。三月一日ヨリ十日ニ亙ル奉天附近ノ會戰中、一日所屬聯隊ノ王家窩棚附近ノ敵ヲ攻撃スルニ當リ、正面ヨリスル敵ノ小銃及ビ側面ヨリスル機關砲火ノ爲、死傷者相踵ギ、戰況悲慘ナリシモ敢テ屈撓セズ、敵前約百五十米突ノ地點ニ於テ部下分隊ヲ指揮シテ奮進シ、敵陣地ノ狀況ヲ偵察シ、速カニ之ヲ所屬中隊ニ報告シ、爲ニ中隊ノ前進ニ便利ヲ與ヘタリ。次イデ五日所屬聯隊ノ沙坨子西北方舊鐵道堤附近ノ敵ヲ攻撃スルヤ、所屬中隊ガ大隊ノ右翼中隊トシテ戰ヲ交ユルニ當リ、部下ヲ督勵シテ勇敢ニ奮

闘セリ。同月十四日ヨリ所屬第二大隊ノ炊事係トナリ、爾來小四家子附近及ビ八家子附近ノ守備地ニ在ツテ、常ニ炊具ノ保全、諸帳簿ノ整理ニ任ジ、且主計ヲ補佐シテ諸物資ノ蒐集ニ努力シ、給養ノ豊富ヲ謀レリ。十二月下旬柳樹屯ヲ出帆シ、三十九年一月一日廣島ニ凱旋セリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級坂口滿多三

坂口滿多三ハ、大阪府北河内郡友呂岐村大字太間ノ人、伊三郎ノ長男ニシテ明治十二年七月生ル。母ヲりくト曰フ。後大阪市東區生玉町ニ移轉ス。りく病死ノ後、繼母しも入籍セリ。

三十二年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十三年十二月歩兵一等卒ニ、三十

四年十二月上等兵ニ進ミ、三十五年十一月滿期除隊トナレリ。

三十七年三月八日、充員召集ニ應ジ、歩兵第八聯隊第五中隊ニ編入セラレ、四月十三日屯營ヲ發シ、大阪港ヨリ乗船シテ、五月十一日清國遼東半島ニ上陸シ、十四日ヨリ二十四日マデ金州城攻撃ノ爲、十三里臺及ビ韓山臺附近ニ在テ警戒勤務ニ服シ、或ハ夜陰ニ乗ジテ敵壘ニ接近セル地域ニ進出シ、掩堡ノ構築ニ從事シ、諸種ノ困苦缺乏ニ耐ヘテ勇敢敏活ニ動作セリ。二十五日ヨリ二十六日ニ亙リ金州城及ビ南山ノ攻撃ニ參加シ、殊ニ南山ノ戰鬪ニ於テハ猛烈ナル敵火ノ下而カモ三千米突ノ開濶地ヲ前進スルニ當リ、毫モ躊躇セズ勇往邁進シテ他兵ノ模範トナリ、最後ノ突撃ニ移リテハ中隊ノ先頭ニ立チテ猛然敵壘ニ突入セリ。越エテ六月十五日得利寺附近ノ戰鬪ニ參加シ、所屬中隊ノ紅家屯東方高地ニ於テ砲兵ノ掩護ニ任ズルヤ、炎暑ヲ意トセズ勇敢ニ動作セリ。次イデ二十一日ヨリ先進支隊ニ屬シ、熊岳城附近ニ前進シ、二十七日優勢ナル敵騎ノ熊岳城ヲ襲撃スル時、該城北方ニ於テ勇敢ニ奮戰シ、七月九日、蓋平ノ戰鬪

ニ於テハ猛烈ナル敵砲火ノ集中スルヲ意トセズ第一線ニ進ンデ沈著豪膽ニ動作シ、衆兵ノ模範トナレリ。次イデ二十三日ヨリ二十五日マデ大石橋附近ニ轉戦シ、八月二十六日ヨリ九月四日ニ互リ鞍山站、首山堡、遼陽附近ノ戰鬪ニ參與シ、連日勇敢ニ動作セシガ、殊ニ九月三日遼陽停車場ノ攻撃ニ際シテハ、急霰ノ如キ敵彈ノ中ニ在テ毫モ危険ヲ顧ミズ、散兵線上ヲ猛進シ、他兵ノ勇氣ヲ加ヘシメ、所屬中隊ノ前進ヲ容易ナラシメタリ。越エテ十月十日ヨリ十六日ニ互リ沙河ノ會戰ニ參加シ、殊ニ十日尤家甸子ニ占據セル敵騎ヲ攻撃スルニ當リ、散兵線ニ於テ最モ勇敢ニ戰ヒ、十一日小油虫堡附近ノ戰鬪ニ於テ、優勢ナル敵ノ逆襲ヲ受ケ、所屬中隊ハ一時全ク左側ヲ敵ニ暴露シ、死傷相踵イデ生ジ忽チ苦境ニ陥リシモ、滿多三ハ屈セズシテ奮闘シ、分隊長ノ負傷スルヤ直チニ代リテ之レガ指揮ヲ執リ、分隊ヲ督勵シテ大ニ士氣ヲ振起セシメタリ。翌十二日北畑臺ノ攻撃ニ當リ分隊ヲ率キテ敵彈ノ掃射激甚ナル地區ニ進ミ、部下ヲ集結シテ奮闘大ニ力メ、次イデ中隊ノ最先頭ニ在テ部下ヲ誘導シテ敵陣ニ突

入シ、之レガ占領ヲ確實ニセリ。十四日小張良堡ニ於テ、敵ノ銃砲彈ノ集注セル中ニ在テ、部下ヲ指導シツ、迅速ニ防禦工事ヲ完成シ、又詳カニ敵情ヲ視察シテ、中隊ノ戰鬪準備ニ相當ノ時間アルヲ知ラシメタリ。既ニシテ敵ノ歩砲兵攻勢ヲ取リテ前進シ來ルヤ、勇敢ニ其ノ分隊ヲ指揮シテ防戦ニ力メ、中隊ハ遂ニ此ノ勁敵ヲ擊退スルヲ得シガ、滿多三ガ功與リテ力アリタリ。同月十七日ヨリ十一月九日ニ至ル間、中隊ハ張良堡ニ於テ近ク敵ト相對峙シ、專ラ警戒ノ任ニ當リシガ、滿多三ハ寒威ニ屈セズ部下ヲ督シテ防禦工事ニ服シ、又屢々斥候長トナリテ敵前近ク侵入シ、危険ヲ意トセズ潜伏シテ敵ノ動靜ヲ探リ、確實ナル報告ヲ齎ラス等常ニ中隊ノ任務遂行ニ與リテ功アリキ。同月三日歩兵伍長ニ任ゼラレ、十日ヨリ歩兵第八聯隊機關砲隊ニ編入セラレ。

三十八年二月下旬マデ張良堡ノ陣地ニ在リシガ、其ノ間殆ド敵射ノ絶ユルコトナカリシモ、常ニ嚴肅ナル態度ヲ以テ部下ノ教育ニ任ジ、又陣地ノ構築ニ努力シ、其ノ勤務ニ熱心ナル他ノ模範ト稱セラレタリ。次イデ三月一日ヨリ十

日マデ奉天附近ノ會戰ニ參加シ、機關砲隊ガ所屬聯隊ニ從ツテ二日ヨリ攻撃前進ヲ起スヤ、砲車長トシテ部下ノ砲手ヲ指揮シテ困難ナル運動ヲ爲シ、敏活ニ一ノ地點ヲ占領スルヤ、部下ヲ督勵シテ直チニ陣地ヲ構成シ、以テ敵ノ逆襲ニ備ヘタリ。五日溫盛堡ヲ占領セントスルヤ、前方漢城堡ヨリ其ノ北方一帯ノ鐵道線路ニ據レル多數ノ敵兵俄然逆襲シ來リシカバ、所屬隊ハ機關砲ヲ以テ應射防戰シ、滿多三ハ部下砲手ヲ指揮シテ猛射ヲ加ヘ、敵ヲシテ殆ド全滅ノ状態ヲ以テ退却スルニ至ラシメタリ。六日、歩兵第八聯隊ハ須永旅團ノ令下ニ在リテ漢城堡ノ側面ニ進出セントセシモ、敵ハ前日ヨリモ砲兵ヲ増加シテ盛ニ我ガ進路ヲ砲撃セシカバ、所屬機關砲隊ハ歩兵ノ進路ヲ開カントシテ砲兵隊ト協同シテ終日攻撃援助ノ射撃ヲ爲スヤ滿多三ハ適切ニ部下ヲ督勵シ、七日敵ノ退却スル大縱隊ヲ攻撃スルニ當リ、猛射ヲ加ヘテ多大ノ損害ヲ與ヘ、八日ヨリ追撃ニ移リ、困難ナル機關砲ノ運動ヲシテ毫モ支障ヲカラシメ、九日ハ暴風沙塵ヲ卷キ咫尺辨ゼズ、砲車ノ運動困難ナリシモ銳意奮勵シテ遺憾ナク任務

ヲ盡シ、十日奉天ハ遂ニ我ガ占領スル所トナリシガ、大阪師團ノ功與リテ甚ダ大ナリキ。四月十三日歩兵軍曹ニ任ゼラル。六月第七中隊ニ編入セラレ、爾來五ヶ月間昌圖府三裸樹ニ於テ分隊長トシテ第一線勤務ノ任ニ當リ、其ノ間同地ニ於ル半永久的防禦工事ノ構築ニ、及ビ軍路ノ開設ニ從事シ、終始一貫其ノ職務ニ盡瘁セリ。十二月五日鐵嶺ヲ發シ、八日柳樹屯ヲ出帆シテ、十三日和田岬ニ上陸シ、十五日大阪ニ凱旋シ、十八日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級木村實平

木村實平ハ、廣島縣豐田郡忠海町ノ人、實平ノ男ニシテ、明治十年十一月生ル。父歿シテ其ノ名ヲ襲ゲリ。母ヲしげト云フ。後、大阪市東區森ノ宮西町ニ

移轉シ、現時福岡縣筑紫郡堅粕村大字松園ニ住ス。家ハ仕立物販賣ヲ業トシ、妻シナトノ間ニ一女アリ。

十八年四月豊田尋常小學校ニ入學シ、二十二年三月卒業シ、四月豊田高等小學校ニ入り、二十四年三月三學年ヲ修業シテ退校シ、爾後家業ニ從事セリ。三十年十二月歩兵第十一聯隊ニ入隊シ、三十一年十二月歩兵一等卒ヲ歴テ上等兵ニ進ム。三十三年七月歩兵伍長ニ任ゼラレ、十一月善行證書ヲ附與セラレテ滿期除隊トナレリ。三十四年十一月北清事變ノ戰功ニ依リ勳七等ニ叙シ、青色桐葉章並ビニ金二百二十圓ヲ授ケ賜ハリタリ。

三十七年四月二十二日、充員召集ニ應ジ、歩兵第十一聯隊第五中隊附ヲ命ゼラレ、五月十八日、宇品港ヨリ乗船シテ、二十二日清國遼東半島ニ上陸シ、六月四日ヨリ十四日マデ第二軍豫備隊ニ在テ服務セリ。十五日得利寺ノ戰闘ニ參加シ、十六日得利寺西南方高地ノ守備ニ服シ、七月五日歩兵軍曹ニ任ゼラレ、六日蓋平ノ攻撃ヲ歴テ、二十三日ヨリ二十五日ニ亙リ大石橋附近ニ轉戰セシ

ガ、其ノ部下ヲ指導スルヤ最モ適切ニシテ所屬中隊ノ戰闘動作ニ裨益スル所尠カラズ、殊ニ太平嶺西方高地ハ地勢峻嶮ナルガ敵ハ之ヲ利用シテ三個ノ堅固ナル堡壘ヲ構築シ、重層配備ト障碍物トヲ以テ嚴重ニ守備セルヲ以テ容易ニ攻撃ノ目的ヲ達スルヲ得ザリシガ、所屬中隊ハ第二回突撃ヲ續行セシ後、搜兵ヲ出シ、遂ニ其ノ堡壘ニ突入スルニ當リ、敵ノ猛烈ナル十字火ヲ蒙リ、死傷者相踵ギ光景慘憺タリシモ毫モ屈セズ、部下ヲ叱咤激勵シテ勇猛ニ前進シ、敵彈ノ爲ニ負傷シタルモ、屈セズシテ遂ニ堡壘ニ突入シ、同高地ノ占領ヲ全ウセシメタリ。斯クテ野戰病院ニ收容セラレ、次イデ内地ニ後送セラル。越エテ十一月十日全治退院シ、歩兵第十一聯隊補充大隊第一中隊附トナリ、十二月八日補充大隊本部附ニ轉ジ、炊事掛ノ分課ヲ命ゼラル。當時人員ノ出入頻繁ヲ加ヘ特設部隊ノ動員アリテ、糧食委員ノ職務繁劇複雑ヲ極メ、殊ニ三十八年二月以來戰況ノ進捗ト共ニ人員ノ出入益々頻繁トナリシカバ、實平ハ晝夜兼行殆ド寢食ヲ忘レテ糧食委員ヲ補佐シ、其ノ任務遂行上ニ遺憾ナカラシメ、顯著ナル

功績ヲ舉ゲタリ。同年五月二十九日、歩兵第十一聯隊補充大隊第三中隊附トナリ、同大隊炊事係助手ヲ命ゼラレ、七月十九日、歩兵第六十三聯隊第一大隊本部附ニ轉入シ、炊事係ノ分課ヲ命ゼラレ、八月十七日宇品港ヲ出帆シテ再ビ出征シ、二十日大連灣ニ上陸シ、日夜淬勵其ノ職務ヲ竭セシガ、特ニ第四軍總豫備隊トシテ鐵嶺附近ニ駐軍中、晴雨ニ拘ラズ野外ニ於テ副食物ノ調辨ニ努メ殊ニ遠隔セル場處ヨリ日々糧秣燃料等ヲ受領スルノ任ニ當リ、熱心事ニ從ヒテ些ノ支障ナカラシメタリ。十月九日牛家屯ニ著シ、營口ノ守備ニ任ジ、三十九年二月八日營口ヲ發シ、九日大連ニ著シテ其ノ守備ニ任ジ、四月二十二日大連灣ヨリ乘船シテ、二十九日宇品港ニ上陸シ、病ニ由リテ廣島豫備病院ニ入り二十八日退院シ、歩兵第十一聯隊第五中隊附ヲ命ゼラレ、同日解散トナレリ。戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓ヲ授ケラレタリ。

陸軍歩兵軍曹勳八等功七級岩田鹿之助

岩田鹿之助ハ、京都府南桑田郡篠村字篠ノ人、重助ノ次男ニシテ、明治十四年九月生ル。母ヲあいつ曰フ。後、大阪市東區高麗橋詰町ニ移轉シ、現時滿洲奉天大東門裡大街ニ住居シ、雜貨貿易商ヲ業トセリ。妻はる子トノ間ニ一女ヲ舉グ。

三十四年十二月歩兵第二十聯隊ニ入隊シ、三十五年十二月歩兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十六年十二月下士勤務ヲ命ゼラレタリ。

三十七年四月十六日動員令下リ、歩兵第二十聯隊第五中隊ニ編入セラレ、五月五日、福知山衛戍地ヲ發シ、九日神戸港ヨリ乘船シテ、十九日清國遼東半島ニ上陸シ、即日先進部隊ニ屬シテ大孤山ノ占領ニ參與シ、引續キ三十一日ニ至ルマデ所屬中隊ガ師團ト第一軍トノ連絡線保護ノ任ニ當ルヤ、勇敢ニ動作シテ其ノ任務ヲ完ウシ、次イデ六月七日ヨリ八日ニ至ル岫巖ノ攻撃ニ參加シ、同

地占領後、所屬中隊ノ新店方面ニ對シ前哨ノ任ニ當ルヤ、步哨及ビ斥候ノ勤務ニ服シ、克ク其ノ職責ヲ竭セリ。越エテ七月二十二日盤嶺通路附近及ビ二十四日小嶺附近ノ戰鬪ニ參加シ、殊ニ盤嶺通路ノ戰鬪ニ於テハ所屬中隊ノ第一線トナリテ前進シ、激戰數時間ニ亙リシガ、毫モ屈セズシテ奮闘大ニ努メタリ。同月三十日ヨリ八月一日ニ亙リ柘木城附近ニ戰ヒ、其ノ占領後、第一線部隊トナリ、所屬中隊ノ白石寨附近ニ於テ前哨ニ服スルヤ、克ク其ノ勤務ニ勉勵シ、二十五日ヨリ遼陽附近ノ戰鬪ニ參加シ、終始勇敢ニ動作セシガ、就中三十日「ウイジャゴウ」附近ノ戰鬪ニ於テハ衆ニ抽ンデ、奮闘シ、敵彈ノ爲ニ左大腿軟部ニ貫通銃創ヲ受ケ、野戰病院ニ收容セラレ、九月十日歩兵伍長ニ任ゼラル。後、内地ニ後送セラレ廣島豫備病院ニ入りシガ、所屬中隊長歩兵大尉寺尾左喜馬ハ其ノ負傷當日ノ戰功ヲ稱シテ「當時此ノ勇敢ナリシ動作ハ沮喪セル士氣ヲ振起シ大ニ全隊ニ利益ヲ與ヘタリ」ト云ヘリ。十二月三日治癒退院シ、四日歩兵第二十聯隊補充大隊附ヲ命ゼラレ、十月十六日平和克復ニ至ルマデ終始一

日ノ如ク勤務ニ勉勵セシガ、就中七月二十六日給養係ヲ命ゼラル、ヤ熱心ニ其ノ繁雜ナル業務ニ鞅掌シ、良好ナル成績ヲ舉ゲタリ。十二月六日、第十師團兵站基地司令部神戸支部ニ轉勤セリ。三十八年四月七日歩兵軍曹ニ任ゼラレ、三十九年二月二十八日滿期除隊トナレリ。戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級青木鹿藏

青木鹿藏ハ、奈良縣磯城郡多村字新口ノ人、甚五郎ノ長男ニシテ、明治十五年五月生ル。二十二年七月分家シ、後、大阪市東區和泉町ニ移轉ス。二十三年四月多尋常小學校ニ入學シ、二十七年三月卒業シ、次イデ田原本高等小學校ニ入り、三十一年三月卒業セリ。後、妻つぎヲ娶リ、三男ヲ舉グ。夙ニ湯葉製造販

賣業ニ従事シ、雇人數名ヲ使用シテ熱心ニ業務ヲ營メリ。

三十五年十二月大阪歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十六年十二月歩兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ム。



三十七年三月六日動員令下リ、同聯隊第三中隊ニ編入セラレ、四月二十三日征途ニ就キ、五月十日清國遼東半島ニ上陸シ、爾後長途ノ行軍ヲ

爲セシガ、其ノ間屢々斥候ニ派遣セラレ、常ニ勇敢敏活ナル行動ヲ以テ敵情ヲ偵察シ、有利ナル報告ヲ齎ラシ、又駐軍中ハ警戒勤務ニ服シ、奮勵克ク其ノ任務ヲ完ウセリ。同月二十五日金州城ノ夜襲ヲ歷テ、二十六日南山ノ攻撃ニ參加シ、散兵線ニ在ツテ勇敢ニ動作シ、敵銃砲彈ノ掃射スル平坦開豁地ヲ進ミ、漸次敵壘ニ近接スルニ隨ヒ、敵ノ抵抗頑強ニシテ銃砲彈愈々猛烈ヲ加ヘ、我が死

傷者頻々トシテ生ジ、前進頗ル困難ナリシモ、益々勇ヲ鼓シ他兵ヲ勵マシテ闘ヒシガ、其ノ模範的行動ハ中隊ノ士氣ヲ鼓舞スル少カラザリシモ、最後ノ突撃ニ移ルヤ、奮撃突戰シテ終ニ敵彈ノ爲ニ負傷シ、後方野戰病院ニ收容セラレタリ。次イデ内地ニ後送セラレ、九月二十日全治退院シ、其ノ日歩兵第八聯隊補充大隊ニ入隊セリ。

三十八年四月二十一日、歩兵第五十三聯隊第二中隊ニ編入セラレ、七月二十四日、大阪港ヲ出帆シテ、再ビ征途ニ上リ、二十八日大連灣ニ上陸シ、第三軍戰鬥序列ニ入り、三十一日法庫門方向ニ前進シ、八月十日大興屯ニ到着シ、爾來將校斥候ニ從ツテ八大馬窩堡ニ到リ、率先各所ヲ搜索シテ敵情ヲ審カニシ、大ニ斥候長ヲ輔佐セリ。又屢々遞歩哨長トナリテ旅團司令部ト所屬聯隊本部トノ通信遞送及ビ電話線護衛ノ任務ニ當リ、或ハ警戒ノ任ニ當リ、其ノ他諸種ノ勤務ニ服セシガ、終始勇敢ニ動作シテ他兵ノ模範トナレリ。十一月一日第三軍戰鬥序列ヲ脱シ、關東總督隷下ニ屬ス。

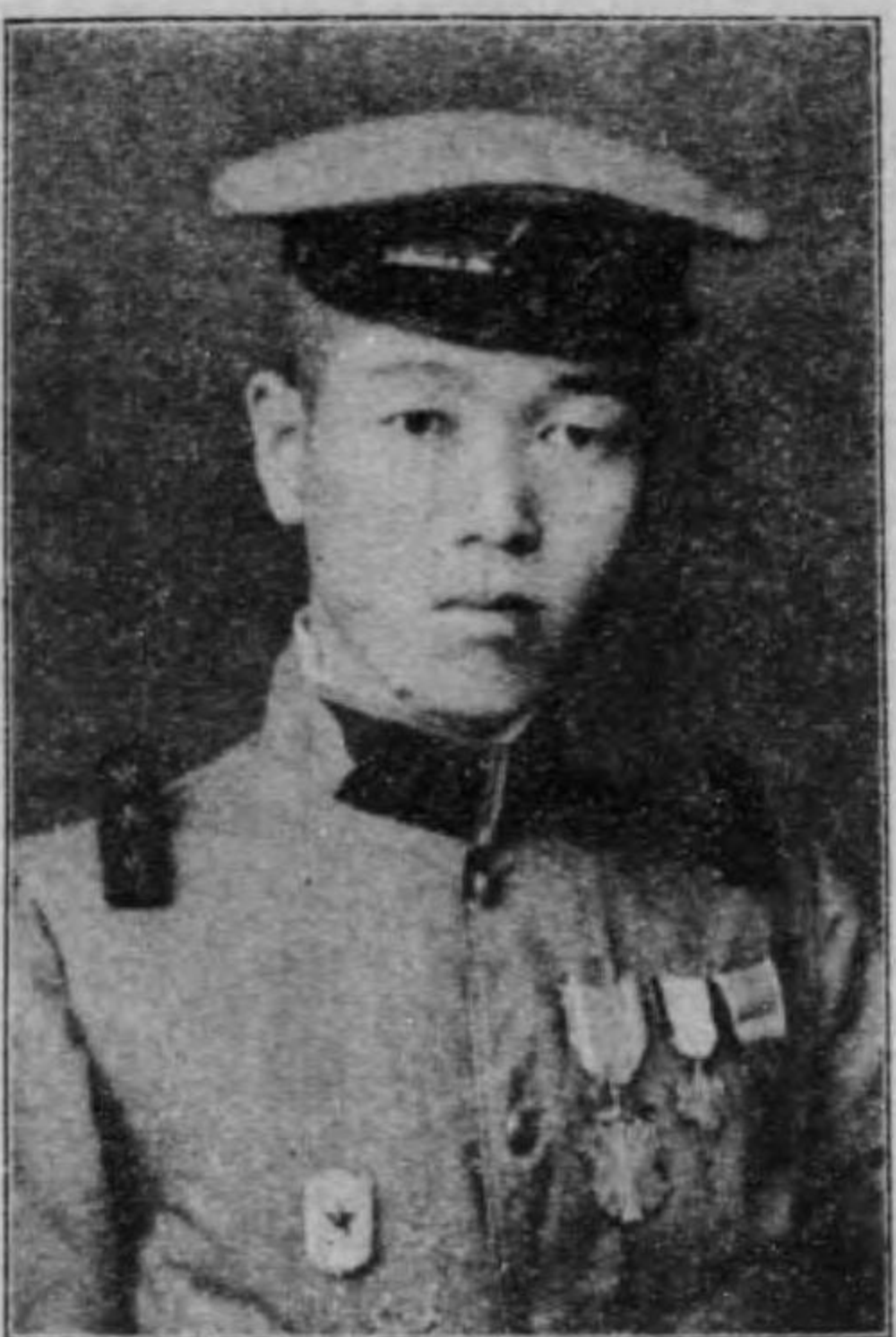
三十九年一月六日大興屯ヲ發シ法庫門、大孤家子、石獅寺ヲ經テ、十一日奉天門外ニ著シ、同所ニ滞在シ、十五日同所ヲ發シ、十六日安東縣ニ著シ、同地ニ滞在ノ後、大連灣ヨリ乗船シテ、四月一日和田岬ニ上陸シ、大阪ニ歸營シ、四日滿期除隊トナレリ。後歩兵伍長ニ任ゼラル。戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ、

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級今井寅之助

今井寅之助ハ、明治十一年五月兵庫縣印南郡大鹽村ニ生ル。同村今井とくノ養子トナレリ。

三十一年十二月姫路歩兵第十聯隊ニ入隊シ、三十三年十二月歩兵一等卒ニ進ミ、三十四年十月歸休除隊トナレリ。同年妻いしヲ娶リ、三女ヲ舉グ。大阪

市東區東平野町八丁目ニ移轉シ、櫛職ヲ業トセリ。



三十七年四月二十一日、充員召集ニ應ジ、姫路歩兵第十聯隊補充大隊ニ入隊シ、六月十七日、後備歩兵第十聯隊第六中隊ニ編入セラレ、二十九日出征ノ爲神戸港ヨリ乗船シテ、七月三日、清國遼東半島ニ上陸シ、同月下旬ヨリ羊拉峪及ビ柞木城附近ノ戰鬥ニ參加シ、三十日午前一時、下房身北方標高二百米突ノ險要ニ據レル敵ヲ攻撃スルヤ、靜肅ニ前進シテ敵ニ接近シ、號令ニ從ツテ奮戰最モ力メ、克ク戰線ノ火力ヲ支ヘ、其ノ夜宮本軍曹ニ從ヒテ下房身南方高地ノ獨立下士哨ノ步哨トナリ、敵ハ屢々我ヲ狙撃シ危險名狀スベカラザリシモ、終始沈著ニ敵ヲ監視シ、警戒ノ任ヲ遂行セリ。八月下旬ヨリ鞍山站及ビ遼陽附近ニ轉戰シ終始勇敢ニ動作セシガ、殊ニ九月二日

午前、我が軍遼陽ヲ占領スル目的ヲ以テ運動ヲ起スヤ、所屬中隊ハ前兵トナリ輕裝シテ除家屯北方二百米突ニ進出セシガ、此ノ時玉皇廟南端ヨリ西方ニ互リ敵ハ堅固ナル防禦工事ヲ施シ、銃砲火ト機關砲火トヲ亂射シ、最モ頑強ニ抵抗セリ。此ノ時中隊ハ死傷ヲ減ズルノ目的ヲ以テ掩體ヲ築設セシニ、寅之助ハ敏速ニ工具ヲ執リテ簡單ナル小掩體ヲ作り、再ビ銃ヲ執リテ奮戦セリ。中隊ハ此ノ簡單ナル小掩體ヲ楯トシテ激烈ナル戦ヒヲ交ヘシガ、夜十一時半頃、敵ハ襲撃シ來リシモ、奮戦シテ之ヲ撃攘シ、翌二日再ビ猛烈ナル戦鬪トナリ、敵ハ頑強ニ抵抗シテ動カズ、激戦終日ニ及ビ、所屬中隊長戦死シ、將校准士官悉ク戦死シ又ハ負傷シ、下士以下殞ル、者頻々トシテ生ジ、悲惨ノ光景名狀スベカラザリシモ、寅之助ハ小隊長代理ノ下ニ在ツテ能ク射撃軍紀ヲ守リ勇敢ニ戦ヘリ。次イデ突撃ノ命下ルヤ散兵壕ヲ躍リ出デ奮進シテ敵壘ニ接近シ、偶々敵ノ地雷ヲ發見セシカバ、危険ヲ意トセズ劍ヲ以テ其ノ線ヲ切斷シ、總突撃隊ノ爲ニ一大危険ヲ免ル、ヲ得セシメタリ。越エテ十月十日ヨリ沙河ノ會戦ニ參

加シ、十二日ヨリ十四日ニ互リ大窪ニ進出シ、楊城塞ヲ攻撃シ、團山寺南方高地ヲ占領ス。敵ハ何レモ天然ノ險要ニ據リ、堅固ナル工事ヲ施シテ防守ニ力メシカバ、戰鬪晝夜ニ互リシモ寅之助ハ毫モ屈撓セズシテ勇敢ニ戦ヘリ。又三塊石山南方ニ於テ所屬大隊ノ集合地偵察斥候トナリシガ、此ノ附近ニハ敵ノ敗殘兵潜伏シテ甚ダ危険ナリシモ、敢テ怖ル、色ナク敵情ノ偵察ヲ遂ゲ、之レガ復命ヲ命ゼラル、ヤ、急行シテ詳細明確ニ報告セリ。又十四日楠田伍長ニ從ヒ下士哨トシテ岩山西北方ニ至リ、夜間歩哨勤務ニ服シ、十五日午前七時其ノ任ヲ完ウシテ歸隊セリ。次イデ十六日午後九時斥候トシテ青木上等兵ニ從ヒ、三道崗子ノ西北方約二千米突ニアル森林ヲ搜索シ、同夜十時歸隊シタリ。次イデ沙河對陣トナリ、長嶺子ノ守備中、北長嶺子ニ於テ下士哨ノ任務ニ當ルコトニ回ニ及ビ、能ク其ノ職責ヲ完ウシ、後選拔セラレテ中隊長ノ從卒トナリタリ。三十八年一月二十五日ヨリ二十九日ニ互ル黑溝臺附近ノ會戦ニ參加シ、次イデ牛居對敵守備勤務ニ服シ、又渾河左岸ニ前哨トナリ、嚴寒肌ヲ劈クガ如キ

モ更ニ意トセズ、常ニ勇敢ニ動作シテ中隊長身邊ノ用務ヲ辨ジ、勉勵至ラザル所ナク他兵ノ模範トナレリ。二月下旬ヨリ三月十日ニ亙ル奉天附近ノ會戰中、尙中隊長ノ從卒トシテ其ノ傍ニ在リ、敵彈雨注ノ間ヲ往來シテ傳令ノ任務ヲ遂行シ、殊ニ渾河右岸ノ戰鬪中ハ中隊長ト大隊長トノ間ヲ往復シ、口頭ヲ以テ中隊長ノ報告ヲ明確迅速ニ傳達スル等其ノ勇敢機敏ナル行動ハ我が軍ノ攻撃動作ヲシテ進捗セシムルニ力アリタリ。七月三十一日ヨリ十月十六日平和克復ニ至ル間、開原城ノ守備ニ在リシガ、中隊長ノ意圖ヲ服膺シテ守備規程ノ勵行ニ努メ、又能ク分隊長ヲ輔佐シ兵卒ヲ勵マシテ軍紀風紀ヲ嚴守セシメ、又歩哨係トシテ城門ノ警戒ニ任ジ、城内人民ノ生命財產ヲ保護シ、又衛生上ノ注意ヲ土民ニ促シ、流行病ヲ豫防スル等守備勤務ヲ完全ニ盡セリ。其ノ間九月二十二日歩兵上等兵ニ進メラル。十一月二十二日柳樹屯ヲ出帆シテ、二十七日和田岬ニ上陸シ、十二月四日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリ

タリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級奧田清三郎

奧田清三郎ハ、大阪市東區鎗屋町二丁目ノ人、清兵衛ノ次男ニシテ、明治十五年四月生ル。母ヲきぬト曰フ。二十二年四月堺市宿院尋常小學校ニ入學シ、二十三年一月拔擢セラレ第二年級ニ昇級セシガ、十月家事ノ爲ニ退校シ、二十五年五月大阪市會根崎尋常小學校ニ入學シ、二十七年三月退校シ、次イデ北區尋常小學校ニ入り、二十八年三月卒業シ、四月會根崎高等小學校ニ入學シ、六月家事上ノ爲ニ退校セリ。尋常小學校當初ヨリ各級修業毎ニ成績優等ヲ以テ賞ヲ受ケ、又大阪府知事及ビ會根崎町長ヨリ賞品ヲ附與セラレタリ。

三十五年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十六年十二月歩兵一等卒ニ進ミ、新兵教育係助手ヲ命ゼラル。

三十七年三月六日動員令下リ、歩兵第八聯隊第五中隊ニ編入セラレ、四月二十三日、大阪衛戍地ヲ發シ、大阪港ヨリ乗船シテ、五月十日、清國遼東半島ニ上陸シ、二十六日金州南山ノ攻撃ニ參加シ、敵彈雨注ノ間ニ在ツテ勇猛果敢ニ前進シ、他兵ニ模範ヲ示シ、所屬中隊ノ前進ヲ容易ナラシムルニ與リテ力アリキ。特ニ最後ノ突撃ニ當リテハ、中隊ノ先頭ニ立チテ他兵ヲ鼓舞シツ、猛然敵壘ニ突進セリ。越エテ六月二十七日熊岳城附近ノ戰鬪ニ參加シ、七月九日蓋平、二十三日ヨリ二十五日ニ亙リ大石橋附近及ビ五臺山、八月一日ヨリ四日マデ海城附近ニ轉戰シ、二十六日ヨリ九月四日ニ亙リ騰賚堡、首山堡及ビ遼陽ニ轉戰シ、終始勇敢ニ奮闘セシガ、就中九月二日ヨリ三日ニ亙ル遼陽總攻撃ニ於テハ、猛烈ナル敵ノ銃砲火ヲ冒シテ前進シ、危險ヲ顧ミズシテ敵狀ヲ注視シ、之ヲ小隊長ニ報告シ、所屬中隊ノ戰鬪ヲ有利ナラシメタル、其ノ功與リテ妙カラザリキ。十月十日ヨリ沙河ノ會戰ニ參加シ、同日尤家甸子、翌十一日小油虫堡附近ノ戰鬪ニ於テハ衆ニ擢デ、戰ヒ、他兵ノ模範トナリ。殊ニ小油虫堡附近ノ戰

鬪ハ敵彈猛烈ニシテ死傷者續出シ、慘憺タル光景ヲ現出セシモ、自若トシテ勇敢ニ奮戰セシガ、敵彈ノ爲ニ負傷シ、後方野戰病院ニ收容セラレ、次イデ内地ニ後送セラレ、同月二十七日大阪豫備病院天王寺分院ニ入り、十二月八日全治退院シ、同日歩兵第八聯隊補充大隊第三中隊ニ編入セラレ、補充兵及ビ新兵ノ教育助手ヲ命セラレ、熱心勉勵クク其ノ職務ヲ盡セリ。十二月一日歩兵上等兵ニ進ム。

三十八年四月一日歩兵第九聯隊補充大隊ニ轉ジ、二十三日動員令下リ、歩兵第五十三聯隊第二中隊ニ編入セラレ、七月二十四日、再ビ出征ノ爲大阪港ヨリ乗船シテ、二十八日清國大連灣ニ上陸シ、第三軍戰鬪序列ニ入り、三十一日同地ヲ發シテ、八月十日大興屯ニ著シ、同地ニ滞在シ、爾來將校斥候ニ從ツテ八大馬窩堡、蓮花崗ニ至リ、各所ノ敵情ヲ搜索シ、能ク斥候長ヲ輔佐シ、又屢々遞步哨長トナリテ、旅團司令部ト聯隊本部トノ通信遞送及ビ電話線護衛ノ任務ヲ完ウセリ。其ノ他警戒勤務又ハ防禦工事等ニ服シ、常ニ能ク其ノ任務ヲ遂

行シテ他兵ノ模範トナレリ。十二月一日、第三軍戰鬪序列ヲ脱シ、關東總督ノ隷下ニ屬シ、二十九年一月六日同地ヲ發シ、石佛寺、法庫門、奉天ヲ經テ、二十日關東總督ノ隷下ヲ脱シ、所屬師團ニ復歸シ、二十六日安東縣ノ守備トナリ、三月二十八日大連灣ヲ出帆シテ、三十一日和田岬ニ上陸シ、四月一日大阪ニ凱旋シ、四日歩兵第八聯隊第五中隊ニ編入セラレ、同月滿期除隊トナレリ。戰役ノ功ニ依リ、功七級金鵝勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級佐野又之丞

佐野又之丞ハ、滋賀縣栗太郡老上村大字矢橋西出町ノ人、又四郎ノ長男ニシテ、明治八年三月生ル。母ヲこまつト曰フ。家ハ菓子及雜貨小賣ヲ業トセリ。後大阪市東區小橋元町ニ移轉ス。十四年三月矢橋小學校ニ入學シ、十七年三月初



等科二級ヲ卒ヘテ退校シ、一時京都市ニ轉宅中、第十四組小學校ニ入學シ、初等科ヲ卒業シ、二十年三月ヨリ合羽業ニ從事シ、二十五年三月ヨリ大阪砲兵工廠ノ雇トナリ鑄工ニ從事セリ。後、妻しげヲ娶リ、一男ヲ舉グ。

二十八年十二月歩兵第九聯隊補充大隊第四中隊ニ入隊シ、二十九年一月第六中隊ニ編入セラレ、十月八日、臺灣混成第二

旅團守備交代トシテ屯營ヲ發シ、十三日宇品港ヨリ乗船シテ、十七日臺灣基隆港ニ上陸シ、十九日設衛隊トシテ歩兵第十聯隊渡邊中尉ノ指揮ニ屬シ、行軍ニテ二十六日彰化ニ著シ、林圯埔守備歩兵第四聯隊第四中隊ニ編入セラレ、爾來守備ノ勤務ニ服シ、又中隊ノ傳令勤務ニ從事セリ。後、雲林其ノ他各地ニ於テ土匪ノ討伐ニ從事シ、又ハ斥候歩哨其他ノ任務ニ服シテ功アリ、三十年十一月

歩兵一等卒ニ進ミ、三十一年三月林圪埔ヲ發シ、爾來北斗ノ守備ニ服シ、九月守備交代シ、十一月大津屯營ニ歸著シ、滿期除隊トナレリ。在役中、非常演習ニ際シ、整列最モ迅速ナリシヲ以テ賞盃一個ヲ附與セラレ、又銃劍術ニ優レタルヲ以テ中隊長ヨリ賞詞ヲ受領シ、又善行證書ヲ附與セラレタリ。臺灣守備ノ戰功ニ對シテハ金二十五圓ヲ下賜セラレ、殊ニ大坪頂討伐ノ記念トシテ銀盃一個ヲ附與セラレタリ。

三十七年四月十六日、充員召集ニ應ジ、後備歩兵第二十八聯隊第六中隊ニ編入セラレ、七月四日大阪港ヲ出帆シテ、十一日清國柳樹屯ニ上陸シ、同日大房身ニ著ス。同月十三日ヨリ二十四日マデ金州ノ守備ニ服シ、二十五日ヨリ旅順攻圍軍ニ參加シ、前牧城駒、金龍寺溝、太白山等ノ追擊戰ニ參加シ、八月十一日ヨリ十三日ニ亙リ、火石巔子南方旅順街道ニ於テ猛烈ナル敵ノ砲火ヲ冒シツ、工兵ノ作業ヲ援助シ、又對壕作業ニ從事シ勇敢ニ動作セリ。同月二十日ヨリ第一回旅順總攻撃ニ參加シ、翌二十一日所屬旅團ハ第九師團ノ豫備隊トナリテ

楊家屯附近ニ位置シ、第九師團ハ中央師團トシテ二龍山、盤龍山ノ砲臺ニ向ヒ攻撃ヲ實施セシモ、戰鬪意ノ如ク進捗セズシテ夜ニ入り、翌二十二日戰鬪ヲ繼續シ、非常ナル苦戰ノ後、盤龍山ノ小砲臺ヲ占領シタルモ、僅カニ敗殘兵ヲ以テ其ノ死角内ニ固守スルニ過ギズ、爲ニ敵ヨリ屢々逆襲ヲ受ケ、頗ル危險ノ位置ニ在リ、殊ニ楊家屯西端ヨリ盤龍山下ニ向フ攻路體ノモノアリシモ、僅カニ一人宛身ヲ屈シテ通過シ得ルニ過ギザルヲ以テ、此ノ攻路内ニハ死傷者充滿シ、若シ攻路外ニ於テ一兵卒ノ動クアレバ、忽チ東鷄冠山ニ龍山方向ヨリ大小砲火機關砲火ヲ集中セラレ、日中ハ後方部隊トノ連絡全ク絶エ、夜間ハ二龍山及ビ東鷄冠山ヨリ探照燈ヲ以テ照サレ、光彈ヲ發射セラレ、苦境實ニ名狀スベカラズ、斯カル狀況ノ中ニ在テ所屬中隊ハ二十二日盤龍山北麓ニ位置シ、二十三日拂曉盤龍山舊東砲臺ニ在ル友軍ガ敵ノ逆襲ヲ受ケ大ニ困憊ニ陥リシ時、急峻ナル嶮崖ヲ攀テ赴援シ、敵ヲ擊退セシガ、又之丞ハ率先シテ鬪ヒ、其ノ勇敢ナル動作ハ衆ノ模範トナリ、該砲臺ノ占領ヲ確實ナラシムルニ與リテ其

ノ功甚大ナリキ。同月二十八日以後水師營東方高地ニ於テ連夜作業ニ從事スルヤ、常ニ敵火ニ浴シツ、其ノ職務ニ力メ、又屢々斥候トナリテ其ノ任ヲ完ウシ、殊ニ九月六日及七日ノ兩夜、作業中ニ敵ノ逆襲ヲ受ケシガ、勇敢ニ戰ツテ其ノ敵ヲ擊退シ、毫モ工事ニ支障ナカラシメタリ。同月二十四日ヨリ十月七日ニ互リ水師營附近ニ於テ晝夜前哨勤務ニ服シ、屢々敵ノ鐵條網切斷ニ從事シ、同月八日ヨリ二十日ニ互リ夜間敵ノ猛火ヲ冒シ二〇三高地右翼ニ向ツテ攻路ヲ掘開シ、十一月二十七日ヨリ第一師團司令部衛兵トシテ服務中、二〇三高地ノ攻撃戰闘ニ際シ、危險ヲ冒シテ鐵板及ビ爆發藥ノ運搬ニ從事シ、能ク其ノ任務ヲ竭セリ。十二月十八日、第一師團(一部缺)ヲ以テ東鷄冠山北砲臺ニ向ヒ攻撃ヲ實施スルヤ、所屬大隊ハ同時ニ攻撃ヲ開始シ、隣接セル各部隊亦牽制的攻撃ヲ開始シ、敵モ各砲臺ヨリ熾シニ應射シ、大激戰トナリシガ、師團長ヨリ豫備隊タル所屬大隊ニ命ヲ下シテ第三步兵散兵壕ニ進撃セシムルヤ、大隊長ハ掩蓋中ニ在ル師團長ニ面シ、同砲臺ニ突入シテ占領スベキ命ヲ受ケ、先ヅ突入點ヲ偵

察シテ之ヲ報ジ、夫レヨリ爆裂藥二百四十、火繩百二十本ヲ分配シテ前進シ、外壕内ニ突入セシニ、戰闘ハ愈々猛烈ニシテ死屍累積セシモ、一人ノ落伍者ナク、大隊長ノ指示セル攻撃點ニ向ツテ突進シ、辛ウジテ攻界線ニ達シ、其ノ一部ハ内部ニ躍進セシモ、敵砲ノ爲猛烈ニ掃射セラレ、其ノ目的ヲ達セザルノミナラズ、徒ラニ多數ノ死傷者ヲ出スニ過ギザルヲ認メ、大隊長ハ決死隊ヲ募リシニ、忽チニシテ百數十名ヲ得シカバ、即チ一人三人乃至數人ヲ逐次突入セシメ、無事突入シ得タル者百三十餘人ニ達シタル時最後ノ突撃ヲ實施セシガ、此ノ際敵ハ東鷄冠山及ビ望臺方向ヨリ絶エズ猛烈ナル銃砲彈ヲ集中シ、危險極マリナシ。仍テ大隊長ハ將校斥候ヲ編成シ、又之丞ハ志願シテ其ノ斥候隊ニ加ハリ、猛烈ナル敵ノ銃砲火及ビ機關砲火ヲ冒シテ敵ノ退却路並ビニ望臺下支那圍壁附近ニ於ケル敵情ノ搜索ニ從事シ、大膽ニモ敵ノ防禦線前約三四十米突ニ接近シ、敵ノ發見ヲ避ル爲、匍匐シテ敵ノ兵力ノ配置及ビ機關砲ノ位置等ヲ審カニシ、有利ナル報告ヲ呈シ、將校斥候ノ任務達成ニ與リテ大ニ力アリタ

リ。十二月十五日歩兵上等兵ニ進ム、
 三十八年一月二日旅順開城トナルヤ、五日ヨリ旅順黄金山砲臺及ビ舊市街
 ノ守備ニ服シ、十二日遼東守備軍ニ編入セラレ、二十二日ヨリ海城附近ニ於テ
 鐵道及ビ電信線ノ守備ニ服シ、殊ニ敵騎ノ遼河左岸ニ侵入スルノ報アルヤ、鐵
 道橋及ビ停車場附近ニ於ケル防禦工事ノ構築ニ從事シ、寒氣酷烈ノ時ナルニ
 拘ラズ晝夜兼行工事ノ速成ニ盡瘁セリ。五月十二日第二軍ニ編入セラレ、六月
 五日鐵嶺附近營盤ニ轉進シ、軍ノ豫備隊トナリ、二十五日ヨリ永安堡ニ、八月
 八日東廣寧ニ移轉シ、其ノ間軍道構築其ノ他ノ勤務ニ從事シ常ニ敏活ニ動作
 セリ。十月一日、所屬中隊戰死者ノ遺骨收容ノ爲旅順ニ出張シ、十一日東廣寧
 ニ歸隊シ、十一月二日同地ヲ發シ、十二日柳樹屯ヨリ乘船シテ、十六日和田岬
 ニ上陸シ、二十日京都ニ歸營シ、二十五日解隊トナレリ。
 戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授
 ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵一等卒勳八等功七級小島鐵次郎



小島鐵次郎ハ、岡山縣上道郡御休村大字寺山ノ人、菊藏ノ次男ニシテ、明治
 十四年六月生ル。母チリゆうト云フ。尋常
 小學校卒業後、家業ノ雜穀粉商ニ從事セ
 リ。後、法制大學校ニ入學センコトヲ志望
 シ、京都ニ於テ一ケ年餘代書業ヲ營ミツ
 、私立中學校ニ通學シテ勉強セシガ、病
 ノ爲ニ退學シ、専ラ家業ヲ營ミ、妻しゆん
 ナ娶リテ一男ヲ擧グ。

三十四年十二月姫路歩兵第十聯隊第九中隊ニ編入セラレ、三十五年十月喇
 叭手ヲ卒業ス。又游泳及射撃ニ長ジ、各一等證狀ヲ受ケ、十二月歩兵一等卒ニ
 進ム。

三十七年三月擔架術ヲ卒業ス。四月十六日動員令下リ、五月九日、出征ノ爲
姫路衛戍地ヲ發シ、二十一日神戸港ヲ出帆シテ、二十九日清國遼東半島ニ上陸
シ、爾來新開嶺、仙家峪、上哈達附近ノ戰鬪ニ參加シ、彈丸雨飛ノ下ニ在ツテ危
險ヲ顧ミズ傳令ノ任務ヲ完ウセリ。七月三十一日、大平嶺附近ノ戰鬪ニ際シ、
所屬中隊ハ最前線ニ在ツテ該高地ノ敵ヲ攻撃スルヤ、地形ノ我ニ不利ナルノミ
ナラズ、糧道極メテ險惡ナルヲ以テ、我ガ戰鬪ヲシテ益々困難ナラシメ、加フ
ルニ前面ヨリ二個大隊ノ敵逆襲シ來リ、苦戰惡鬪ヲ重ネテ死傷相踵ギ、所屬中
隊ノ如キハ決死隊トシテ全員中健全ナル者僅カニ十數名ニ過ギザリシモ、鐵
次郎毫モ屈セズシテ他兵ヲ勵マシツ、勇戰大ニ努メ、又彈雨ヲ冒シテ彈藥ヲ
補充シ、大敵ノ逆襲ヲ擊退スルニ與リテ其ノ功多大ナリキ。所屬中隊ハ確實ニ
該高地ヲ占領シテ軍司令官ヨリ感狀ヲ授與セラレタリ。越エテ八月二十五日
ヨリ三十一日ニ亙リ鞍山站及首山堡ニ轉戰シ、九月二日ヨリ三日ニ亙ル遼陽
ノ總攻撃ニ當リ、勇敢ニ動作シテ大ニ散兵線ノ士氣ヲ振作セシメタリ。十月十

日ヨリ沙河ノ會戰ニ參與シ、十一日三塊石山ノ敵ヲ夜襲スルニ當リ、常ニ中隊
長ノ身邊ニ在ツテ彈雨ノ下ニ奮戰シ、又敵火ノ中ヲ奔走シテ中隊長ノ命令ヲ
傳達シ、十四日石廟子附近ノ戰鬪ニ於テハ勇敢ニ動作シテ他兵ノ模範トナレ
リ。同月下旬ヨリ三十八年二月下旬ニ亙ル沙河對陣中終殆勇敢ニ動作シテ諸
勤務ニ服シ、就中紅葉山ノ守備中ハ嚴寒ヲ意トセズ奮勵事ニ從ヘリ。

三十八年二月下旬ヨリ奉天附近ノ會戰ニ參加シ、三月五日、柳匠屯ヲ突擊
スルニ際シ、猛烈ナル敵火ヲ冒シテ命令報告ヲ傳達シ、且深ク敵中ニ進入シ、
將ニ敵陣地ヲ奮取セントシテ敵彈ノ爲貫通銃創ヲ受ケ、大堡戰地定立病院ニ
收容セラレ、ニ至リタルモ、其勇敢ナル動作ハ士氣ヲ鼓舞スルニ與リテ力ア
リタリ。次イデ大連兵站病院ヲ經テ内地ニ後送セラレ、同月二十六日姫路豫備
病院ニ入り、四月四日治癒退院シ、即日歩兵第十聯隊補充大隊第二中隊ニ編入
セラレ、勵精諸勤務ニ從事セリ。七月十七日、歩兵第六十一聯隊第九中隊ニ編
入セラレ、八月十二日、再ビ出征ノ爲姫路衛戍地ヲ發シ、十三日廣島ニ著シ、

第四軍戰鬪序列ニ入り、十五日宇品港ヨリ乗船シテ、十八日清國大連灣ニ上陸シ、二十三日金家寨附近ニ集合シ、十月九日同地ヲ發シ、十一日奉天府老邊ニ著シ其ノ守備ニ服セリ。

三十九年二月二日、馬三家子ヲ發シ、七日牛家屯ニ著シ、其守備勤務ニ服シ二十三日大連灣ヲ出帆シテ、二十六日神戸ニ著シ、次イデ姫路ニ凱旋シ、二十九日善行證書ヲ附與セラレ、現役延期ヲ解止セラレタリ。

戰役ノ功ニ依リ功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵一等卒勳八等功七級寺田音次郎

寺田音次郎ハ、大阪府北河内郡友呂岐村大字木屋ノ人、伊八ノ次男ニシテ、明治十六年一月生ル。母ヲちうト曰フ。二十三年四月門田尋常小學校ニ入學シ

二十五年三月退校シ、四月三井尋常小學校ニ入り、二十七年三月卒業シ、爾後一年間倉橋某ニ就キテ普通學ヲ修メ、後大阪市東區玉堀町ニ住居シ、大阪砲兵工廠ニ通勤シ、彈丸製造職ニ從事セリ。

三十五年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十六年十二月歩兵一等卒ニ進ム。三十七年三月六日動員令下リ、歩兵第八聯隊第九中隊ニ編入セラレ、四月二十三日衛戍地ヲ發シ大阪港ヨリ乗船シテ、五月十日、清國遼東半島ニ上陸シ、二十五日金州城ノ夜襲ヲ歷テ、二十六日南山ノ攻撃ニ參加シ、勇敢ニ敵壘ニ突入セリ。越エテ六月十五日得利寺、七月九日蓋平、二十三日ヨリ二十五日ニ互リ大石橋附近、八月三日海城附近ニ轉戰シ、二十六日ヨリ九月四日ニ互リ鞍山站、首山堡及ビ遼陽ノ諸戰鬪ニ參加シ、能ク困難ニ耐ヘ缺乏ヲ忍ビ、連日ノ激戰ニ屈撓セズ勤務ニ奮勵セシガ、殊ニ大趙家臺、西八里庄ニ在テ終夜警戒ニ從事シ、九月三日、遼陽停車場附近ノ敵ヲ攻撃スルニ當リ、敵彈雨注ノ下ニ在テ克ク射撃軍紀ヲ嚴守シ、勇敢沈著ニ戰ヒシガ、夜半停車場ヲ占領セントスルヤ、猛然

突進シテ敵ノ陣地ヲ襲ヒ、其ノ目的ヲ達スルニ與リテ功アリキ。同月十日歩兵第八聯隊第二中隊ニ轉入シ、十月十日ヨリ十六日マデ沙河ノ會戰ニ參加シ、大油虫堡、北烟臺ノ戰鬪ニ於テハ所屬聯隊ノ傳令トシテ砲烟彈雨ノ間ヲ東奔西走シ、重要ナル命令報告ノ傳達ニ任ジ、敏活確實ニ動作シテ、各隊ノ行動ヲシテ時機ニ適合セシメ、聯隊ノ戰鬪動作ヲシテ遺憾ナカラシメタリ。又張良堡防禦線ニ於テハ護旗兵トシテ軍旗ノ護衛ニ任ジ、能ク其ノ本分ヲ盡セリ。同月十七日ヨリ三十八年二月下旬ニ至ル沙河對陣中、張良堡ニ於テ近ク敵ト相對峙シ、終始勇敢ニ動作シ、或ハ斥候トナリテ危險ヲ冒シ深ク敵地ニ侵入シ、或ハ歩哨トナリテ終日終夜警戒勤務ニ服スル等克ク其ノ任務ヲ完ウセリ。殊ニ二月十一日夜、敵ノ陣地ナル達連屯トノ中間ニ敵兵ノ設置セル副防禦ヲ破壊セントシ、將校ニ率キテ前進スルヤ、敵ハ我が工事ヲ妨害セントシテ頻リニ銃火ヲ注ギ、其ノ距離僅カニ百米突内外ニ過ギザリシモ平然トシテ作業ニ從事シ、遂ニ其ノ目的ヲ達成セシガ、音次郎ガ沈著剛膽ナル動作與リテ其ノ功渺カ

ラザリキ。三月一日ヨリ十日ニ亙ル奉天附近ノ會戰ニ於テハ連日ノ戰鬪ニ加ハリシガ、就中三日瓜加臺ノ戰鬪ニ於テハ砲烟彈雨ノ下ニ在ツテ勇猛果敢ニ戰ヒ衆ノ模範トナリ、五日所屬中隊ハ大隊ノ第一線トナリテ大蘇家堡ヲ占領セントスルニ當リ、敵ハ逆襲ヲ企テ、其ノ一部ハ我が機先ヲ制セントシテ既ニ大蘇家堡ニ進入シ來リ、前進スル我兵ニ向ツテ急射撃ヲ加ヘシモ、音次郎等更ニ意トセズ、敵彈ニ暴露シツ、開濶地ヲ奮進シ、遂ニ該村ニ進入シ、敵ヲ驅逐シテ我が前進スベキ道ヲ開キシカバ、大隊ハ遂ニ同地ヲ占領スルヲ得タリ。同月六日以來拉馬勾ニ於テ敵ト對峙中、熱心ニ諸種ノ勤務ニ服セシガ、殊ニ防禦工事ニ力ヲ盡シテ大ナル功績ヲ擧ゲタリ。十二月八日、凱旋ノ爲柳樹屯ヨリ乘船シテ、十一日和田岬ニ上陸シ、十三日大阪ニ歸著シ、十四日復員令下リ、即日除隊トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍輜重兵二等卒勳八等功七級高久保雄策



高久保雄策ハ、大分縣ノ人庄藏ノ三男ニシテ、明治十五年八月生ル。母ヲカ
フト云フ。大分縣宇佐郡安心院尋常小學
校ヲ優等ニテ卒業シ、次イデ高等小學校
ニ入り、第二學年ヲ修業シテ退校セリ。成
績又優等ナリキ。後大阪市東區瓦町四丁
目ニ移轉シ、履物卸商ヲ營ミ、現時同區南
久太郎町ニ住居シ、妻ヲ有ス。間ニ一男
アリ。

三十六年九月輸卒トシテ輜重兵第二大隊ニ入隊シ、十一月滿期除隊トナレ
リ。

三十七年六月十一日、補充召集ニ應ジ、大阪歩兵第八聯隊第二大隊ニ編入セ

ラレ、輜重輸卒トシテ小行李ニ屬シ、七月七日出征ノ爲大阪港ヨリ乗船シテ、
十二日清國柳樹屯ニ上陸シ、次イデ前南關嶺ノ守備ニ服シ、十五日宋家屯ニ著
シ、二十三日ヨリ八月二十日ニ至ル間炎熱ヲ意トセズ風雨ヲ冒シテ糧食補充ノ
任務ニ從事シ、専ラ後方勤務ニ努力セリ。八月二十一日ヨリ二十四日ニ互ル盤
龍山攻撃ノ際、二十三日彈藥補充ノ爲前進中、敵ノ猛烈ナル射撃ヲ受ケテ危険
ニ瀕スルヤ能ク命令ヲ遵守シ身ヲ挺シテ他ノ輸卒ヲ激勵シ、彈藥補充ノ任務
ヲ完ウシ戰線ノ火力ヲ熾ンナラシメタリ。同月二十七日所屬大隊ノ東北溝ニ轉
ゼシ以來大行李ニ屬シ、九月二十七日マデ糧食ノ受領ニ從事シ熱心勉勵セリ。
十月二十八日ヨリ三十八年一月一日ニ至ル白銀山對戰中ハ大孤山麓ニ露營シ
嚴寒ヲ凌ギテ晝夜敵彈ヲ冒シ、大孤山前南方高地ノ本隊所在地ニ彈藥ヲ運搬
シ戰線ヲシテ寸時モ彈藥ノ缺乏ナカラシメタリ。一月十一日北進ノ際、監視人
一名缺員トナリシヲ以テ之レガ代理ヲ爲シ、熱心奮勵監視ニ從事シ、二十五日
大石橋ニ著シ、爾來引續キ監視人代理トシテ専ラ糧秣受領ノ監視ニ任ジ、五月

三十一日北進以來輸卒ヲ以テ各處ニ轉進シ、五月十九日遼東守備軍ノ隸下ヲ脱シ、遼東兵站監部ノ隸下ニ屬シ、二十日第三戰鬥序列ニ入り、二十九日大石橋西方金家屯ヲ發シ、海城、鞍山站、遼陽、奉天、鐵嶺、泉眼溝ヲ經テ、六月十日黃古洞ニ著シ、爾來守備勤務ニ服シ、十六日後備混成第四旅團ニ編入セラレ、八月九日黃古洞ヲ發シ、老邊ヲ經テ同日三臺子ニ著シ、爾來同地ノ守備ニ服セリ。十一月一日、凱旋ノ爲三臺子ヲ發シ、木廠ヨリ鐵嶺ニ著シ、四日汽船輸送ニテ大房身ニ著ス。次イデ柳樹屯ニ著シ、九日同地ヨリ乘船シテ、十五日和田岬ニ上陸シ、十七日大阪ニ凱旋シ、二十一日輜重兵二等卒ニ進ミ、二十八日復員ニ付召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

第六編 大阪市西區殊勳生存者 (二)

陸軍之部

陸軍歩兵特務曹長勳六等功七級川崎和吉

川崎和吉ハ、石川縣江沼郡大聖寺町北片原町ノ平民、喜三郎ノ長男ニシテ、明治五年九月生ル。十一年四月小學校ニ入學シ、卒業ノ後、家業ノ米穀商ニ從事ス。後、大阪市西區幸町通ニ移轉セリ。

二十五年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、二十六年十二月歩兵一等卒ヲ歴テ上等兵ニ進ミ、二十七八年ノ戰役ニ從軍シ、二十八年三月歩兵二等軍曹ニ任ゼラレ、十一月歩兵軍曹ニ進ム。二十九年六月、二十七八年戰役ノ功ニ依リ勳八等ニ叙シ、白色桐葉章ヲ授ケラレ、三十年十一月滿期除隊トナレリ。三十二年一月妻まきヲ娶リ、一男四女ヲ舉グ。

三十七年四月八日、充員召集ニ應ジ、後備歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第八中隊



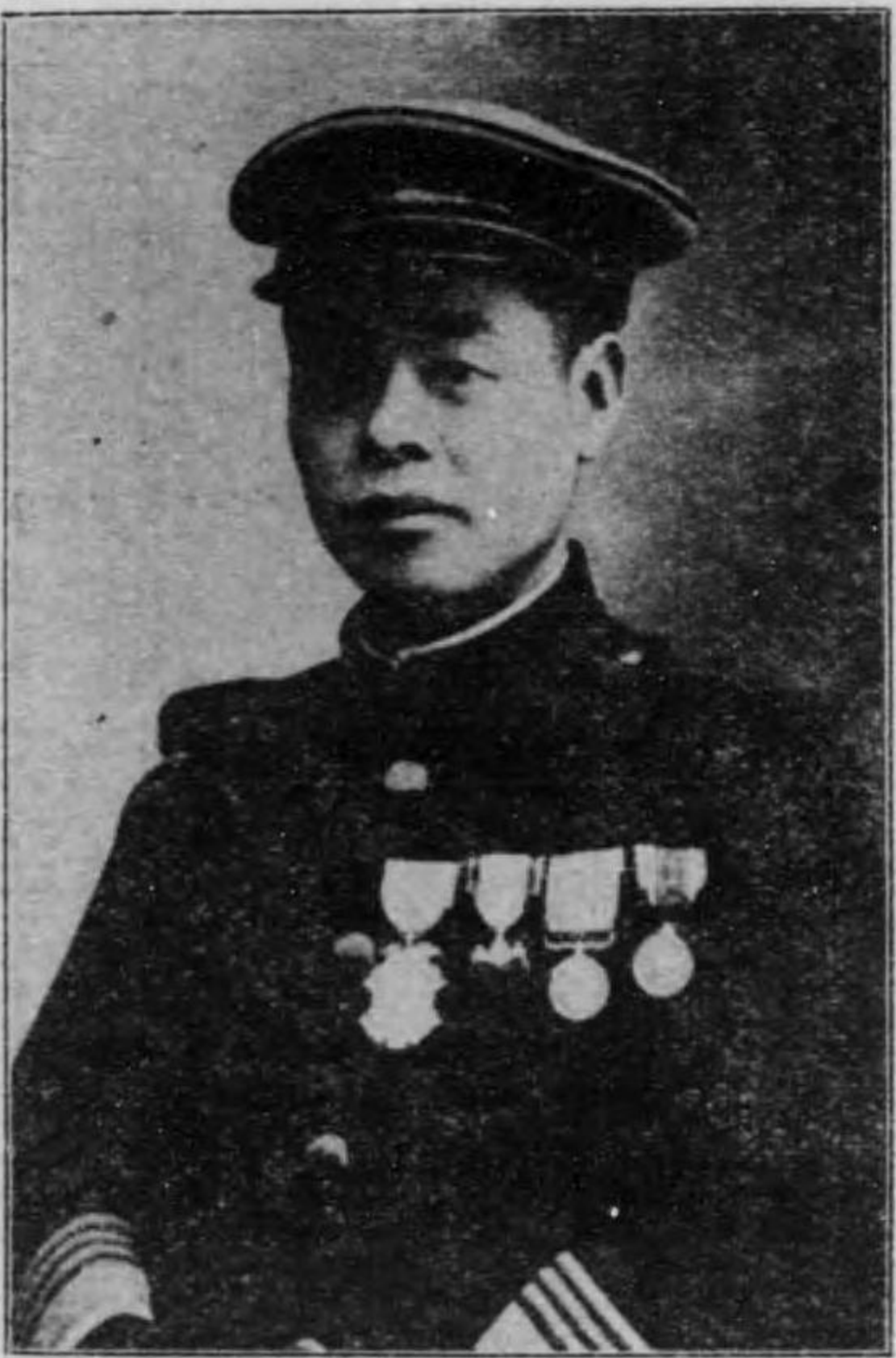
附ヲ命ゼラレ、七月十二日出征ノ爲
大阪衛戍地ヲ發シ、其ノ日大阪港ヨ
リ乗船シテ、十八日清國奉天省柳樹
屯ニ上陸シ、爾來分隊長トシテ其ノ
職務ニ勉勵シ、八月二十一日楊家屯
高地散開ノ際、能ク其ノ部下ヲ鼓舞
シテ奮戰シ、二十二日盤龍山東砲臺

突撃ノ際ハ、猛烈ナル敵ノ銃砲火ヲ冒シ、部下ヲ督勵シテ豪膽沈著砲臺ノ占領
ニ努メ、二十三日盤龍山西砲臺ニ於テ敵ノ逆襲ヲ被リシモ部下ヲ指揮シテ敵
ニ對シ善ク奮闘シ、次イデ二十八日ヨリ九月八日ニ至ル東北溝ニ於ケル對壕
作業ニ從事シ、十月二十七日大孤山前南方高地ニ轉ジ、爾後旅順要塞ノ攻撃ニ
參加シ、白銀山北砲臺ノ敵ニ對シ勇敢ニ部下ヲ督勵シテ奮戰セリ。十一月十三

日歩兵曹長ニ任ゼラレ、第四中隊附ヲ命ゼラレ、同日ヨリ三十八年九月八日マ
デ第四中隊長歩兵大尉宮部賤夫ノ部下ニ屬シ、戰鬥後ノ繁雜ナル事務ヲ整理
シ、且諸種ノ困難ヲ排シテ守備ノ勤務ニ從事シ、忠實ニ勉勵セリ。越エテ三月
十八日捕虜護送ノ任ニ當リ、大連灣(青泥窪)ヨリ乗船シテ字品港ニ至リ、其ノ
任務ヲ果タシ、四月三日戰地ニ歸著シ、九月八日歩兵特務曹長ニ任ゼラレ、第
二中隊附トナリ、十一月三十日勳七等ニ叙シ、瑞寶章ヲ授ケラル。其ノ後凱旋
歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ大阪ニ歸營シ、次イデ召集解除トナレリ。
戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓並ビニ勳六等單光旭日章ヲ授ケ
賜ハリタリ。

陸軍歩兵曹長勳七等功七級谷川三次郎

谷川三次郎ハ、大阪市西區西道頓堀四丁目ノ平民、利三郎ノ五男ニシテ、明



治十二年一月生ル。十八年四月西區高臺尋常高等小學校ニ入學シ、二十三年尋常科ヲ卒業シ、次イデ高等科ニ入り、第三學年ヲ修業シ、後、二年間私塾ニ於テ漢學數學ヲ修メタリ。
三十一年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十二年十二月歩兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十三年歩兵伍長ニ任ゼラレ、三十四年十一月滿期除隊トナレリ。三十五年十一月妻ちかヲ娶リ、一女ヲ舉グ。初メ私立商業學校ノ體操教師トナリ、後、株式仲買店員トナレリ。

三十七年四月十六日充員召集ニ應ジ、歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第一中隊附ヲ命ゼラレ、六月十四日歩兵軍曹ニ任ゼラル。七月十二日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、其ノ日大阪港ヨリ乗船シテ、十八日清國柳樹屯ニ上陸シ、二十六日

王家屯ニ於テ第三軍ノ總豫備隊トナリ、二十七日鳳凰山ニ向ツテ前進シ、其ノ間、行軍ニ駐軍ニ幾多ノ困難ヲ排シテ部下ニ模範ヲ示シ、八月二十二日盤龍山東砲臺ノ攻撃ニ際シ、分隊長トシテ藤田少尉ニ屬シ、砲烟彈雨ノ下ニ在ツテ能ク小隊長ヲ輔佐シ、部下ヲ鼓舞督勵シテ、火力ヲ増大ナラシムルコトニ努力シ砲臺占領ノ進捗上ニ與リテ功アリシガ、竟ニ敵彈ノ爲ニ負傷シ、野戰病院ニ收容ノ後、九月七日青泥窪ヨリ乗船シテ内地ニ後送セラレ、十二日廣島似島病院ニ入り、十九日大阪豫備病院ニ收容セラレ、十一月五日全治退院シ、同日歩兵第八聯隊補充大隊附ヲ命ゼラレ、諸勤務ニ勉勵セリ。

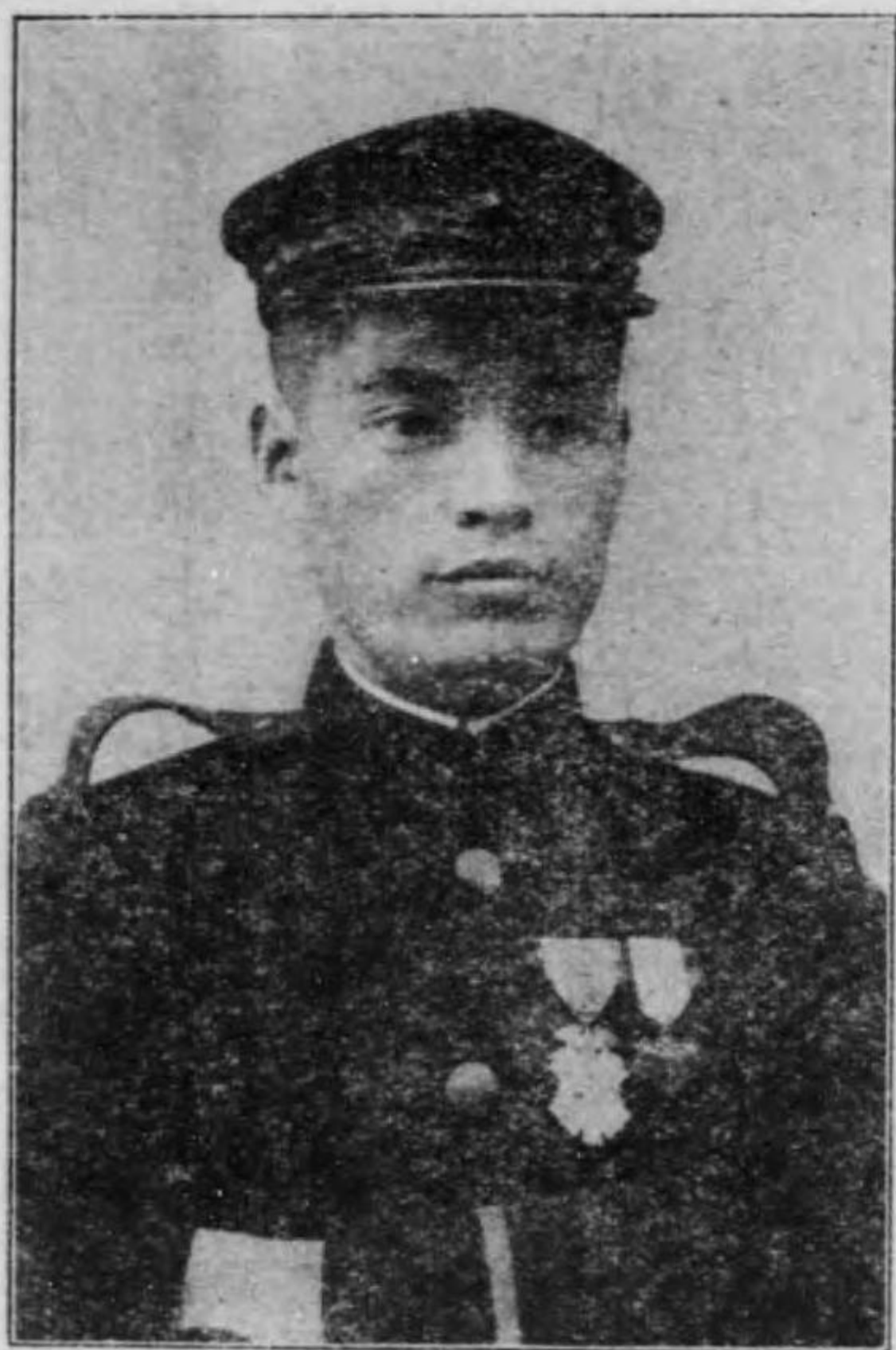
三十八年十月二十九日留守第七旅團書記ヲ命ゼラレ、十一月七日歩兵曹長ニ任ゼラル。

三十九年一月九日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵曹長勳七等功七級服部新次郎

服部新次郎ハ、大阪市西區北堀江通三丁目ノ平民、平助ノ三男ニシテ、明治十四年七月生ル。二十八年三月同區高等小學校ヲ卒業シ、四月大阪府立第一中學校ニ入學シ、二十九年退校シ、家業ノ莫大小商ニ従事ス。後、妻ハ一男一女ヲ擧ゲ、現時同區立賣堀裏町ニ住居セリ。



三十四年十二月由良要塞砲兵聯隊

ニ入隊シ、三十五年十二月砲兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ム。

三十七年二月警急配備令下リ、由良要塞行者嶽砲臺ノ守備ニ就キ、戰備作業ニ従事シ、觀測長トシテ觀測所ノ設備ヲ完成セリ。四月二十日砲兵伍長ニ任ゼ

ラル。五月一日動員令下ルヤ、所屬中隊ノ動員事務ニ従事シ、能ク其ノ任務ヲ全ウセリ。十一日徒歩砲兵第二聯隊第七中隊附ヲ命ゼラレ、六月十二日出征ノ爲由良要塞ヲ發シ、七月四日神戸港ヲ解纜シテ、九日清國青泥窪ニ上陸シ爾來各地ニ轉進シ、八月二日ヨリ旅順要塞攻城準備作業ニ努力シ、十四日ヨリ所屬中隊ノ戰備作業ニ從ヒ敵彈ノ危険ヲ冒シ、連日降雨ノ爲、作業極メテ困難ナルニ拘ラズ率先シテ觀測所ヲ築設シ、十九日旅順要塞第一回總攻撃開始以來常ニ觀測所勤務ニ服シ、九月二十五日砲兵軍曹ニ任ゼラレ、十月三十日第二回總攻撃、十一月二十六日第二回總攻撃及ビ攻撃作業ノ掩護射撃ニ於テ熱心奮勵能ク其ノ職責ヲ竭シ、中隊長ヲシテ遺憾ナク射撃ヲ實施スルコトヲ得セシメ、次イデ十二月二十八日二龍山砲臺ノ攻撃ニ際シテハ、觀測長ヲ補佐シテ最も猛烈ナル射撃ヲ爲シ、絶エズ有效ナル射撃ヲ敵ニ送レリ。後、所屬聯隊ノ軍司令官ヨリ感狀ヲ授與セラレタルガ、新次郎亦與リテ力アリト云フベシ。

三十八年一月二日旅順開城以來、同地ニ於テ兵器受領ニ従事シ、十四日マデ

黄金山砲臺ニ宿營シ、十七日第七中隊附ヲ免ゼラレ、第二大隊本部附トナリ、書記トシテ大隊ノ事務ニ從事シ、専心一意能ク其ノ職責ヲ竭シ、大隊長並ビニ大隊副官ヲシテ事務上ニ就キ聊モ顧慮スル所アラシメザリキ。二月九日北進ノ途ニ上リ、五里街ヲ經テ十二日秀祥屯ニ著シ宿營ス。越エテ十六日ヨリ戰鬪準備作業ニ從事シ、三月一日ヨリ奉天附近ノ會戰ニ參與シ、殊ニ三日四日ノ如キ猛烈ナル敵火ノ下ニ在ツテ大隊觀測所勤務ニ服シ、大隊長並ビニ副官ヲシテ有效ナル射撃指揮ヲ爲スヲ得セシメ、富岡支隊ヲシテ容易ニ敵ヲ破リ前進スルコトヲ得セシメタルニ與リテ大ニ力アリタリ。二十二日北紅綾堡ヲ發シ、古城子、鐵嶺ヲ經テ、七月二十三日山頭堡ニ著シ宿營ス。十月二十七日砲兵曹長ニ任ゼラレタリ。

三十九年二月七日山頭堡ヲ發シ、十三日、凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十六日和田岬ニ上陸シ、十七日由良要塞ニ歸著シ、十九日善行證書ヲ附與セラレ、同日復員下令、二十二日滿期除隊トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵曹長勳七等功七級吉田力藏

吉田力藏ハ、大阪市西區松島町一丁目ノ平民、常吉ノ長男ニシテ、明治十二年一月生ル。後、同區南堀江下通四丁目ニ移轉セリ。二十二年四月尋常小學校ニ入學シ、二十六年三月卒業シ、初メ木工ヲ業トシ、後、製綿器ノ製造ニ從事セリ。

三十一年十二月砲兵第四聯隊ニ入隊シ、三十二年十一月野戰砲兵第十四聯隊ニ轉入シ、十二月砲兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十四年六月清國駐屯軍砲兵大隊ヘ派遣ヲ命ゼラレ、九月病ニ由リ廣島衛戍病院ニ入り、十月二十五日退院シテ、二十八日大阪ニ歸營シ、十一月滿期除隊トナレリ。三十五年十二月

砲兵伍長ニ任ゼラル。三十七年二月妻よねヲ娶リ、後、二男一女ヲ擧グ。



三月八日、充員召集ニ應ジ野戰砲兵第四聯隊段列附ヲ命ゼラレ、四月二十六日砲兵軍曹ニ任ゼラル。五月一日出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、十四日宇品港ヨリ乗船シテ、十七日清國奉天省張家屯ニ上陸ス。斯クテ南山ノ戰鬪前、所屬小隊ハ全部上陸ニ

先キダチ急行ヲ命ゼラレ、大行李ヲ附屬セズ、力藏ハ分隊長トシテ途次炊爨ノ設備ヲ擔任セシニ、土地言語等不明ニシテ且物資乏シク艱苦一方ナラザリシモ、敏活ナル動作ヲ以テ此ノ難局ニ處シ、小隊ノ給養上些ノ遺憾ナカラシメタリ。次イデ同月二十六日南山ノ攻撃ニ際シテハ行進ノ道路砂地ニシテ運動頗ル困難ニ、且上陸以來人馬ノ疲勞甚シカリシモ、力藏ハ銳意指揮督勵シテ其ノ

任務ヲ完ウセリ。越エテ六月十五日ヨリ十六日ニ互リ得利寺、七月九日蓋平ノ戰鬪ヲ歷テ、二十三日及ビ二十四日大石橋附近ニ轉戰シ、或ハ猛烈ナル敵彈ヲ冒シ、或ハ十字砲火ヲ潜リツ、段列長ノ指揮ノ下ニ部下ヲ督勵シテ彈藥ノ補充ヲ迅速ナラシメ、殊ニ二十四日第三回補充ノ時ニ於テハ敵兵ノ狙撃ヲ受ケ、人馬ノ死傷續出シ、馬匹ハ漸次疲勞シテ輓曳力ヲ失ハントスルノ窮境ニ陥リタルモ、毫モ屈セズシテ馬匹運動ノ緩急ヲ顧慮シ、部下ヲ督勵シテ沈著ニ動作セシカバ、大ニ士氣ヲ振作セシメ所屬段列ノ行動ニ多大ノ利益ヲ與ヘタリ。八月一日ヨリ四日ニ亙ル海城附近ノ戰鬪ヲ歷テ、二十六日ヨリ九月四日ニ亙リ鞍山站、首山堡及遼陽ノ諸戰鬪ニ參與セシガ、連日降雨ノ爲道路泥濘車軸ヲ沒シ、行動極メテ困難ナリシモ、連續二晝夜ノ間、馬匹ノ使用ニ注意シ、少シク間隙ヲ得レバ部下ヲ督シテ馬匹ノ四肢軀幹ヲ摩擦セシメ、愛撫周到馬力ヲ保全シ、或ハ至難ノ道路ニ於テ輓曳全ク不可能ナルニ當リテハ、直チニ積載セル彈藥ヲ抽出シ、腕力ヲ以テ之ヲ搬バシメ、激戰中ナル各中隊ニ分配シテ戰鬪ニ支障ナカ

テシメ、敵彈雨飛ノ中ニ於テ沈著ニ部下ヲ指導シ、各隊ノ運動ニ少シモ澁滞ナカラシメタリ。次イデ十月十日ヨリ十九日マデ沙河ノ會戰ニ參與シ、連日勇敢ナル動作ヲ以テ部下ヲ督勵シ、殊ニ二十四日張良堡ノ放列陣地ヘ彈藥ヲ補充スベキ任ニ當ルヤ、敵彈前後ニ爆發シテ輓馬三頭即死シ、運動力ヲ失ヒシカバ、自餘ノ馬匹ヲ射線外ニ避ケシメ、部下ヲ指揮督勵シツ、彈藥ヲ肩ニシテ之ヲ放列ニ搬致セシメントシタルニ、其ノ途中藥筒日光ニ反射シタルガ爲ニ敵ノ發覺スル所トナリ、猛烈ナル狙撃ヲ受ケ、肩上ノ彈匣ヲ破壊セラル、者サヘ有ルニ至リシカバ、更ニ注意シテ上衣ヲ脱シ、藥筒ヲ掩ハシメ、敵ノ視線ヲ巧ミニ避ケテ完全ニ彈藥ノ補充ヲ爲サシメタリ。

三十八年一月二十五日ヨリ二十九日ニ亙ル黑溝臺附近ノ會戰ヲ歷テ、二月二十六日ヨリ三月十日ニ至ル奉天附近ノ會戰ニ參加シ、連日敵彈雨注ノ下ニ在テ彈藥補充ノ任ニ當レリ。就中三月四日燒鍋附近ノ戰鬪ニ於テ敵ハ頻リニ我段列ノ所在ニ砲火ヲ集中シ、爲ニ死傷相踵ギ士氣沮喪セントス。此ノ時力藏

ハ自若トシテ部下ヲ指揮シ、所屬段列ノ行動ニ遺憾ナキヲ得セシメタリ。

奉天會戰後、武器係ヲ兼務シ、武器ノ受領分配保管修理等ニ盡瘁シ、敏活周到遺憾ナク其ノ職責ヲ竭セリ。又各地ノ守備ニ服セシガ、能ク其ノ任務ニ勵精シテ成績良好ナリキ。十二月十二日、凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヨリ乗船シテ、十五日和田岬ニ上陸シ、次イデ大阪ニ歸著シ、二十三日召集解除トナレリ。

大正四年陸軍砲兵曹長ニ任ゼラル。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵曹長勳七等功七級織田文治

織田文治ハ、南河内郡圓南村大字今井ノ平民、和田吉藏ノ次男ニシテ、明治十年十二月生ル。二十六年三月同郡黒山村高等小學校ヲ卒業シ、家業ノ空堀商

ニ從事セリ。

三十年十二月由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ 三十一年十二月砲兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十二年十二月砲兵伍長ニ任ゼラレ、三十三年十一月滿期除隊トナレリ。

三十七年五月一日充員召集ニ應ジ、由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、十一日徒歩砲兵第二聯隊第五中隊附ヲ命ゼラレ、其ノ日、出征ノ爲由良要塞ヲ發シ、七月四日神戸港ヨリ乗船シテ、九日清國青泥窪ニ上陸シ、三十日同地ヲ發シ、金州旅順街道ヲ經テ大孤山北方砲兵陣地ニ著ス。是レヨリ先、六月十五日砲兵軍曹ニ任ゼラル。斯クテ八月二日ヨリ十日マデ輕便鐵道ノ敷設及ビ交通道路ノ改築ニ從事シ、十一日ヨリ十八日マデ大孤山北東方ニ於テ砲臺ノ構築及ビ火砲材料彈藥ノ運搬ニ努力シ、敵彈ノ下、危險ヲ意トセズ、勇敢ニ作業ノ進捗ヲ謀リ、十九日旅順要塞第一回總攻撃ヨリ三十八年一月二日旅順開城ニ至ルマデ砲車長トシテ參與シ、長期間常ニ勇敢ニ動作シテ部下ヲ督勵シ、猛烈ナル敵火

ノ下ニ在ツテ沈著豪膽加フルニ周密ナル注意ヲ以テ砲車ヲ指揮シ、多數ノ有效彈ヲ出シテ敵ニ多大ノ損害ヲ與ヘ、軍ノ攻撃前進ヲ容易ナラシムルニ與リテ大ニ力アリタリ。

三十八年一月十三日旅順ヲ發シテ北進シ、金州大石橋ヲ經テ五里街ニ著シ、十六日ヨリ沙河南岸拉木屯ニ於テ砲臺ヲ構築シ、火砲材料彈藥ノ運搬ヲ爲スニ當リ、敵彈ノ下、部下ヲ指揮督勵シテ其ノ任務ヲ竭シ、豫定ノ如ク作業ヲ完成スルヲ得セシメタリ。同月二十七日ヨリ奉天附近ノ會戰ニ參與シ、第一砲車長トシテ連日ノ戰鬪ニ加ハラザル無ク、猛烈ナル彈雨ノ下ニ在ツテ部下ヲ指揮シテ其ノ職責ヲ竭シ、殊ニ三月七日漢城堡ノ攻撃ニ際シテハ、敵ノ銃砲彈頻々トシテ我が砲側ニ落下飛散シ、光景甚ダ悽慘ヲ極メタルモ、沈著豪膽身ヲ挺シテ部下ヲ指揮シ、其ノ勇氣ヲ鼓舞シ、適切ナル時機ヲ失セズシテ確實ニ射撃ヲ續行シ、多數ノ命中彈ヲ出シテ敵ニ多大ノ損害ヲ與ヘ、所屬中隊ハ漢城堡攻略ノ功ニ依リ軍司令官ヨリ感狀ヲ授與セラレタリ。同月八日砲兵陣地撤退以

來待命中、火砲材料ノ整理ニ努力シ、又部下ノ監督、教育及ビ衛生ニ注意シ、其ノ結果頗ル良好ノ成績ヲ示セリ。九月十七日砲兵曹長ニ任ゼラル。

三十九年二月七日舍營地山頭堡ヲ發シ、十四日凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十八日和田岬ニ上陸シ、十九日由良ニ歸著シ、二十一日復員下令、二十二日召集解除トナリテ歸郷ス。後大阪市西區北堀江通六丁目平民織田庄七ノ養子トナリ、其女まつト結婚シ、四男ヲ擧グ。

戰役ノ功ニヨリ功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級加藤昇太郎

加藤昇太郎ハ、大阪市南區阪町ノ平民、哲道ノ長男ニシテ、明治十三年八月生ル。後、西區九條北通三丁目ニ移轉シ、現時同區梅本町ニ住居セリ。二十五

年三月北區盈進高等小學校第二學年ヲ修業シ、爾後紹介業ニ從事セリ。

三十三年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十四年十二月歩兵一等卒ヲ歴テ上等兵ニ進ミ、三十五年十二月歩兵伍長ニ任ゼラレ、三十六年十一月滿期除隊トナレリ。

三十七年三月八日、充員召集ニ應ジ、歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第十二中隊附ヲ命ゼラレ、四月二十三日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、其ノ日大阪港ヲ解纜シテ、五月十一日清國奉天省孫家咀子ニ上陸シ、十八日ヨリ三晝夜間劉家屯南方高地ニ在ツテ前哨服務中、斥候長トシテ金州附近ノ敵情ヲ偵察シ、歸途敵騎五名ニ遭遇シタルモ、遂ニ之ヲ擊攘シ、歸來具サニ偵察ノ結果ヲ報告セリ。越エテ二十五日所屬大隊ノ金州城内ノ敵ヲ攻撃センガ爲ニ、拂曉龍王廟高地ニ前進スルヤ、城壁ヨリ敵ノ猛射ヲ受ケ、交戰終日ニ互リシガ、此ノ間敏捷ニ敵ノ動靜ヲ觀察シテ小隊長ヲ輔佐シタリ。翌二十六日拂曉戰機正ニ熟シ、金州城ノ敵ヲ擊退シテ南山ニ向フヤ、敵ノ銃砲火ハ猛烈ヲ極メ、須臾ニシテ死傷者數十名

ノ多キニ及ビシガ、毫モ屈セズ率先衆ヲ勵マシテ突撃陣地ニ進入シ、迅速ニ掩堡ヲ構築シ、夫レヨリ戰フコト五時間ノ長キニ及ビ、午後五時頃ヨリ極力敵ノ鐵條網破壊ニ從事スベキ命下リ、何レモ匍匐潛行シテ其ノ任ニ當リシガ、往ク者殆ド敵彈ノ爲ニ斃レザルナカリシモ、昇太郎ハ毫モ意トセズ著々潛行シテ竟ニ鐵線ヲ切斷シ、一條ノ進路ヲ開キタリ。次イデ最後ノ突撃ニ當リテハ勇猛果敢ニ奮進シテ堡壘ニ突入シ、南山占領ノ功ニ與リタリ。翌二十七日ヨリ北進ノ途ニ就キ普蘭店ヲ經テ、六月十四日後二十里堡ニ著シ復州街道ノ偵察ニ任ジ、十五日得利寺附近ノ戰鬪ニ參加シ、次イデ熊岳城ヲ經テ北進シ、七月九日蓋平附近ノ戰鬪ニ參與シ、新開嶺北方高地ヲ占領スルヤ、敵ノ砲火激烈ニシテ忽チ數名ノ死傷者ヲ出シタルモ、勇敢ニ部下ヲ指揮督勵シテ敵ニ當リ、殊ニ飛彈ノ紛々タルヲ意トセズ、奮然山頂ニ登リ、前方ヲ展望シテ逐一敵ノ動靜ヲ報告シタルヲ以テ、所屬中隊ハ有利ノ陣地ニ就クノ便宜ヲ得タリキ。同月二十三日ヨリ二十五日ニ亙ル大石橋附近ノ戰鬪ニ於テ、所屬中隊ガ旅團長ノ命ニ由リ

五臺山北方高地ヲ占領スルニ當リ、選バレテ斥候長トナリ、敵彈ヲ冒シツ、部下ヲ指揮督勵シテ前方約五米突ノ地區ニ前進シ、中隊ノ陣地占領ヲ掩護シ、其ノ任務ヲ遂行セリ。八月一日ヨリ四日ニ亙リ海城附近ノ戰鬪ヲ經テ、二十六日ヨリ三十一日ニ亙リ鞍山站及ビ首山堡ニ轉戰シ、屢々斥候長又ハ下士哨長トナリテ能ク其ノ任務ヲ遂行セリ。九月一日ヨリ遼陽附近ニ戰ヒ、三日遼陽停車場附近ニ占據セル敵ヲ攻撃セシガ、敵ハ堅固ナル防禦物ニヨリテ死守シ、火勢猛烈ニシテ多クノ死傷者ヲ出セシモ、毫モ屈セズシテ奮進シ、遂ニ突撃陣地ニ侵入シテ速カニ掩堡工事ノ完成ニ努力シ、交戰約十二時ノ長キニ及ビ、翌四日拂曉遂ニ突撃ヲ實行スルニ當リ、率先敵壘ニ突入セントシ、敵彈ニ中ツテ負傷シ竟ニ第一野戰病院ニ收容セラレ、次イデ内地ニ後送セラレ、廣島豫備病院ヲ經テ大阪豫備病院天王寺分院ニ入り、十月八日全治退院シ、歩兵第八聯隊補充大隊附トナリ、爾來補充兵ノ教育ヲ擔任シ、日夜勉勵シテ成績良好ナリキ。又武器係ヲ兼務シテ諸般ノ庶務ヲ鞅掌シ、整理ノ功尠カラザリキ。

三十八年四月二十一日、歩兵第五十三聯隊第一中隊附ヲ命ゼラレ、次イデ再
ビ出征ノ爲奈良衛戍地ヲ發シ、七月二十四日大阪港ヨリ乗船シテ、二十八日清
國大連灣(青泥窪)ニ上陸シ、爾來分隊長トシテ小隊長ヲ輔佐シ、第三軍戰鬪序
列ニ入り、法庫門方面ニ前進シ、其ノ間諸種ノ困難ヲ排シテ斥候其他ノ任務ニ
當リ、勇敢ニ動作シテ部下ヲ督勵セリ。十一月一日、第三軍戰鬪序列ヲ脱シテ
關東總督ノ隷下ニ屬シ、爾來鳳凰城其ノ他各地ノ守備ニ任ゼリ。

三十九年三月二十八日、大連灣ヲ出帆シテ、四月一日和田岬ニ上陸シ、四日
大阪ニ歸著シ、召集解除トナレリ。後、妻ことヲ娶リ二男ヲ舉グ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授
ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級小間井次作

小間井次作ハ、石川縣金澤市八幡町ノ平民、市三郎ノ長男ニシテ、明治十五
年三月生ル。後、大阪市西區阿波堀通三丁目ニ移轉セリ。二十二年四月西區明
治尋常小學校ニ入學シ、二十六年三月卒業シ、爾後二年間私塾ニ就キ普通學ヲ
修業シ、建築業ニ從事セリ。

三十五年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十六年十二月歩兵一等卒ニ進ム。
三十七年三月六日動員令下リ、歩兵第八聯隊第五中隊ニ編入セラレ、四月二
十三日出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、其ノ日大阪港ヨリ乗船シテ、五月十日清國
奉天省孫家咀子ニ上陸シ、二十五日ヨリ二十六日ニ亙リ、金州南山ノ攻撃戰鬪
ニ參加シ、終始中隊長ノ傳令トシテ彈雨ノ間ヲ往復シ、危險ヲ意トセズ迅速確
實ニ諸般ノ命令報告ヲ傳達シ、其ノ任務ヲ完ウセリ。同月三十一日歩兵上等兵
ニ進メラル。六月二十七日熊岳城附近ニ前進シ、屢々斥候長トシテ敵情ヲ搜索

シ、有利ノ報告ヲ齎ラシ、七月九日蓋平、二十三日ヨリ二十五日ニ亙リ大石橋附近ニ轉戦シ勇敢ニ動作セシガ、二十八日ヨリ病ニ由リ第一野戦病院ニ入り、次イデ各地病院ヲ經テ内地ニ後送セラレ、廣島豫備病院ニ入り、十月十日全治退院ス。十一月十九日歩兵伍長ニ任ゼラレ、歩兵第八聯隊補充大隊附トナリ、補充兵教育助教ヲ分擔シテ日夜奮勵シテ成績良好ナリキ。

三十八年三月一日歩兵軍曹ニ任ゼラル。四月二十一日歩兵第五十三聯隊第一中隊附ヲ命ゼラレ、七月二十四日再ビ出征ノ爲大阪港ヨリ乗船シテ、二十八日清國大連灣(青泥窪)ニ上陸シ、第三軍戰鬪序列ニ入り、分隊長トシテ能ク小隊長ヲ輔佐シツ、法庫門ニ向ツテ前進ス。此ノ間道路險惡非常ノ困苦ヲ嘗メシモ、勇敢ニ動作シテ其ノ本分ヲ盡セリ。又屢々斥候長トシテ敵情ヲ搜索シ、或ハ防禦工事ニ從ヒ、部下ヲ督勵シテ其ノ完成ニ努力セリ。十一月一日第三軍戰鬪序列ヲ脱シ關東總督ノ隷下ニ屬シ、爾來各地ノ守備ニ服シタリ。

三十九年三月二十八日、凱旋歸還ノ爲大連灣ヲ出帆シテ、三十一日和田岬

ニ上陸シ、四月一日大阪ニ歸著シ、四日延期現役滿期除隊トナレリ。翌年妻ていヲ娶リ二女ヲ舉グ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級佐治眞六郎

佐治眞六郎ハ、大阪市東區寺山町ノ平民、公雄ノ六男ニシテ、明治十四年三月生ル。二十一年四月尋常小學校ニ入學シ、二十五年三月卒業シ、次イデ高等小學校ニ入り、二十九年三月卒業ノ後、大阪高等商業學校ニ入り、三十一年三月第二學年ヲ修業シテ退學シ、銀行員トナレリ。後分家シテ西區三條通四丁目ニ移轉ス。

三十四年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十五年十二月歩兵一等卒ヲ經テ

上等兵ニ進ム。

三十七年三月六日動員令下リ、四月六日歩兵伍長ニ任ゼラレ、二十三日出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、其ノ日大阪港ヨリ乗船シテ、五月十日清國奉天省孫家咀子ニ上陸ス。其ノ分隊長トシテ部下ヲ指導スルヤ謹直嚴正能ク命ニ從ツテ活動セシメタリ。十七日旅團右翼警戒ノ爲京極小隊長ノ遠ク前石灰窖子ニ派遣セラル、ヤ、下士展望哨トシテ能ク其ノ任務ヲ盡シ、二十六日金州南山ノ戰鬪ニ於テハ部下ヲ激勵シ小隊長ヲ輔佐シテ勇往邁進シ、激戰長時間ニ亘ルモ毫モ屈セズ、部下ノ勇氣ヲ作興スルニ努メ、次イデ突撃ニ移ルヤ身ヲ挺シテ進ミ、軍旗ト共ニ敵壘ニ突入セリ。越エテ六月十三日騎兵支援隊トシテ李官屯附近ニ前進スルヤ、部下ヲ勵マシツ、敵狀ノ搜索ニ努メ、騎兵ノ運動ヲ容易ナラシメ、七月九日蓋平附近ノ戰鬪ニ參加シ勇戰奮闘セシガ、次イデ同月下旬病ニ罹リ、八月平癒シテ、二十六日ヨリ九月四日ニ亘ル鞍山站、首山堡及ビ遼陽ノ諸戰鬪ニ參與シ、能ク小隊長ヲ輔佐シ、部下ヲ督勸シテ彈雨ノ下ニ連日

激戰ヲ續ケ、殊ニ八月三十日夜半、騰鷲堡ヲ占領スルヤ、連日ノ疲勞ヲモ意トセズ左翼警戒ノ斥候ニ任ジ、奮勵能ク其ノ任務ヲ完ウシ、續イテ大趙家臺、西八里庄ニ終夜警戒ノ任ニ當リ、殊ニ九月三日總攻撃ノ際遼陽停車場附近ニ占據セル頑強ナル敵ニ對シ銃火ヲ交ユルヤ、周到ナル注意ヲ以テ散兵ノ配布射撃及ビ彈藥消費等ヲ監視シ、夜半敵陣ヲ占領セシガ、眞六郎ガ功與リテ大ナリキ。同月二十五日歩兵軍曹ニ任ゼラレ、大隊書記トシテ其ノ職務ニ勉勵シ、十月十日ヨリ沙河ノ會戰ニ參加シ、十一日三家子占領ノ際ノ如キハ、敵ノ砲彈連續頭上ニ破裂スルモ、毫モ意ニ介セズシテ東奔西走シ、十二日小臺ヲ攻撃シテ之ヲ占領セシ後、俄ニ大逆襲ヲ受ケシモ、其ノ砲煙彈雨ノ下ニ在ツテ沈著ニ諸般ノ命令報告ヲ記載シ、確實ニ傳達シテ其ノ任務ヲ遂行シ、大隊ノ戰鬪ヲシテ遺憾ナカラシムルヲ得タリ。次イデ同月中旬ヨリ沙河對陣中、張良堡ニ於テ屢々第一線勤務ニ服シ、常ニ敵ノ銃砲火ノ集中スル所トナリタルモ、從容トシテ其ノ任務ニ盡瘁シ功績尠カラザリキ。

三十八年一月二十五日ヨリ二十九日ニ亙ル黑溝臺附近ノ會戰ヲ經テ、二月二十七日ヨリ三月十日ニ亙ル奉天附近ノ會戰ニ參加シ、連日勇敢ニ動作セリ。就中三月五日ヨリ七日拂曉ニ至ルマデ漢城堡附近鐵道線路ニ據レル頑強ナル敵ヲ攻撃中、常ニ平坦開濶ノ地ニ在ツテ、敵ノ銃砲彈類々トシテ落下シ、死傷續出セシモ、泰然自若トシテ能ク其ノ任務ヲ盡シ、屢々重要ナル命令報告ヲ傳達シ大隊ノ戰鬪ヲシテ遺憾ナカラシメタリ。翌八日大隊ノ蘇家屯ニ至ルヤ、尙ホ敵敗殘兵ノ暗夜ヲ徘徊スルアルモ毫モ怖ル、色ナク其間ヲ潛行シテ、遠ク後方溫盛堡ニ在ル聯隊ニ到リ、重要ナル命令ヲ受取り其ノ任務ヲ完ウセリ。十日渾河右岸ニ進出シ、奉天ヲ占領スルニ至ルマデ屢々重要ナル命令報告ヲ傳達シ、終始勇敢事ニ從ヒ、大隊ノ戰鬪ヲシテ遺憾ナカラシメ、奉天會戰後ハ各地ニ轉進シテ常ニ職務ニ勵精シ、大隊ニ貢獻スル所多大ナリキ。十二月十一日凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十五日和田岬ニ上陸シ、次イデ大阪ニ歸營シ、十六日復員下令後ハ步兵第八聯隊ニ於テ勤務シ、三十九年一月十二日延期現

役滿期除隊トナリ、妻しづヲ娶ル。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級木谷勉次

木谷勉次ハ、南河内郡三日市村ノ平民、孫七ノ次男ニシテ、明治七年十一月生ル。十六年四月尋常小學校ニ入學シ、卒業シテ高等小學校ニ入り、二十四年三月卒業シ、次イデ中學校ニ入り、二十六年三月退學シ、海魚商ニ從事ス。後、大阪市西區江戸堀五丁目ニ移轉シ、妻しづヲ娶レリ。

二十七年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、二十八年五月歩兵一等卒ニ、二十九年六月二十七八年戰役ノ功ニ依リ、勳八等ニ叙シ、瑞寶章並ビニ金三十五圓ヲ賜ハリタリ。十一月歩兵上等兵ニ進ミ、十二月歩兵二等軍曹ニ任ゼラレ、三十

年十一月善行證書ヲ附與セラレテ、滿期除隊トナレリ。

三十七年四月十六日、充員召集ニ應ジ步兵第八聯隊ニ入隊シ、第三中隊ニ編入セラレ、六月十四日歩兵軍曹ニ任ゼラル。七月十二日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、同日大阪港ヨリ乗船シテ、十八日清國奉天省柳樹屯ニ上陸シ、爾來勇隊長トシテ熱心勵精一日モ缺勤セズ、服務確實ニシテ他ノ模範トナルモノ多カリキ。七月二十九日營城子北方高地偵察ニ際シ、有利ノ報告ヲ齎ラセリ。三十一日鳳凰山麓ニ著シ、八月三日ヨリ十八日マデ石灰窪子海岸監視隊トシテ分遣セラレ、最モ忠實ニ其ノ職務ヲ盡セリ。二十一日楊家屯高地展開ノ際、部下ヲ督勵シテ勇戰シ、二十二日左翼師團ト連繫ヲ保タンガ爲ニ分遣中、斥候トナリ、猛烈ナル敵彈ヲ冒シテ各部隊ノ位置ヲ搜索シ、屢々有利ナル報告ヲ爲セリ。二十三日拂曉及ビ夜間盤龍山西砲臺ニ於テ敵襲ノ際、部下ヲ叱咤激勵シテ勇戰奮闘シ、二十四日盤龍山西砲臺南方ノ砲壘ヲ守備スル第九聯隊ヘ増援ノ爲、派遣セラレ、大ニ奮戰シ敵彈ノ爲ニ負傷セシモ堅忍不撓ク其ノ任務ヲ完

ウセシガ、同日野戰病院ニ收容ノ後、各地病院ヲ經テ、八月二十九日青泥窪兵站病院ニ入り、九月六日青泥窪ヲ出帆シテ、大阪港ニ上陸シ、大阪豫備病院ニ收容セラレタリ。三十八年二月七日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳七等功七級平松秀吉

平松秀吉ハ、堺市車之町ノ平民、伊都仁兵衛ノ次男ニシテ、明治十四年八月生ル。二十四年同市尋常小學校ヲ卒業シ、後、大阪市ニ於テ私塾ニ入り、英、漢、數學及ビ簿記ヲ修業スルコト四年ニ及ベリ。後、大阪市西區北堀江一番町ノ平民平松藤次郎ノ養子トナリ、其ノ女リウト結婚シ、雜貨品製造商ニ從事セリ。妻リウトノ間ニ三女ヲ舉グ。

三十四年十二月步兵第八聯隊ニ入隊シ、三十五年十二月步兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ム。

三十七年三月六日動員令下リ、步兵第八聯隊ニ於テ第四中隊ニ編入セラレ。四月六日歩兵伍長ニ任ゼラレ、二十三日出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、其ノ日大阪港ヨリ乗船シテ、五月十日清國奉天省孫家咀子ニ上陸シ、所屬中隊ニ從ツテ前進シ、屢々警戒及ビ搜索ノ勤務ニ服シ、二十六日金州南山ノ攻撃ニ參加シ、潮水胸ニ達スル海中ヲ前進シ、殊ニ蘇家屯東北附近ノ敵歩兵及ビ南韓嶺附近ノ敵砲兵ヨリ側射ヲ受ケ、運動頗ル困難ナリシモ、分隊長トシテ沈著能ク部下ヲ掌握シ、長時間勇敢ニ戰鬥ヲ持續シ、次イデ突撃ニ當リテハ、彈丸雨注ノ下、部下ヲ督勵シテ勇猛果敢ニ奮進シ、遂ニ敵壘ヲ奪取スルノ功ニ與レリ。翌二十七日ヨリ八月二十五日マデ中隊ノ北進ニ從ヒ、屢々警戒搜索ノ任ニ當リシガ、就中六月二十二日中隊ガ旅團ノ左側衛トシテ揚家屯ヲ占領セントセシ時、選バレテ斥候長トナリ、兵卒八名ヲ率キテ大房身ニ至リ、熊岳城方向ニ對シテ警

戒ノ任ニ當リ、中隊ノ任務遂行ヲ容易ナラシメタリ。七月九日蓋平ノ攻撃ニ當リテハ旅團ノ豫備隊トナリ、二十四日大石橋附近ノ戰鬥ニハ師團ノ豫備隊トシテ參與セリ。八月二日及ビ三日海城附近ノ戰鬥ヲ歷テ、二十六日ヨリ九月四日マデ遼陽方面ノ戰鬥ニ參加シ、「シヤツジャタイ」、大趙家屯及ビ大王屯等ニ進出シテ首山堡ノ敵ト對峙シ、九月三日拂曉遼陽ノ陣地ニ肉薄スルヤ、敵ハ堅固ナル防禦工事ニ據リテ猛烈ニ射撃セシモ秀吉ハ沈著豪膽克ク部下ヲ掌握シ、所要ノ地點ニ位置シテ之ヲ固守ス。斯クテ午後ニ至リ彈藥補充ノ爲兵卒二十五名ヲ率キ敵前二百米突ノ地點ヨリ彈丸ノ雨飛スル開濶地ヲ往復シ、小行李ノ位置ヨリ頻リニ彈藥ヲ運搬セリ。翌三日遼陽ノ總攻撃ニ際シ、敵彈ノ掃射スル畑地ニテ危険ヲ意トセズ部下ヲ指揮督勵シテ之ヲ有利ニ誘導シ、長時間勇敢ナル戰鬥ヲ持續シ、夜半ニ至リ我が兵遂ニ遼陽停車場ヲ占領セシガ、秀吉ガ功亦與リテ大ナリキ。同月五日ヨリ中隊ノ北進ニ從ヒ、屢々警戒搜索ノ任ニ當リ能ク其ノ任務ヲ竭シ、二十五日歩兵軍曹ニ任ゼラル。十月十日沙河ノ會戰ニ

方リ、中隊ガ前兵トナリテ大黃屯ヲ占領スルニ際シ、大東山堡ノ敵ト對峙シテ之ヲ擊退スルノ功ニ與リ、十一日中隊ノ大油虫堡ヲ占領スルヤ、敵ノ乘馬歩兵約一聯隊我が左側ニ迫ラントスルアリ、即チ邀ヘ撃ツテ之ヲ退ケ、更ニ大油虫堡及ビ小臺ノ敵ト相對峙スルニ當リ、部下ヲ督勵シテ猛烈ナル十字火ノ下ニ奮戰シ、十二日北烟臺ノ攻撃ニ於テハ平坦開濶ナル畑地ニ於テ敵彈ニ暴露シツ、能ク部下ヲ掌握シテ有利ノ戰鬪ヲ繼續シ、次イデ突撃ニ移ルヤ率先猛進シテ鬪ヒ、十四日中隊ガ砲兵掩護ノ任ニ當リ大張良堡東北無名部落ヲ占領スルヤ、敵ハ官林堡及ビ孤家子ヨリ猛烈ナル十字火ヲ浴セ、同時ニ歩兵約一大隊ヲ以テ前後二回我が砲兵陣地ニ迫ラントス。此ノ時秀吉ハ沈著ニ部下ヲ指揮シテ其ノ射撃效力ヲ發揚セシムルニ努メ、堅忍不拔所要ノ地點ヲ固守シ、遂ニ敵ヲ潰亂ニ陥ラシメタルガ、其ノ功與リテ大ナリキ。同月十七日ヨリ三十八年二月二十四日ニ至ルマデ張良堡ニ於テ敵ト近ク相對峙シ、其ノ間屢々防禦陣地ノ構築ニ從事シ、或ハ警戒ノ任務ニ服セシガ、殊ニ一月十五日夜、有力ナル敵

ノ斥候我が陣地前ニ突入シ來リ、下士哨及ビ守備線ニ向ヒ射撃ヲ加ヘタルニ、秀吉ハ斥候長トシテ部下ヲ率キ、逆撃シテ此ノ敵ヲ驅逐シ我が位置ヲ安全ナラシメタリ。次イデ二十五日ヨリ二十九日ニ互ル黒溝臺附近ノ會戰ニ參加シ、二月二十五日ヨリ前進シテ奉天附近ノ會戰ニ參加シ、三月二日金山臺ノ攻撃ニ當リ、雪中平坦開濶地ヲ前進シ、包相屯ヨリスル敵ノ砲撃ト一臺子ヨリスル敵ノ側射トノ爲我が運動頗ル困難ナリシモ、分隊長トシテ部下ヲ指揮督勵シ、有利ニ指導シテ敵火ノ滅殺ヲ圖リ、遂ニ金山臺ヲ占領スルニ至レリ。翌三日小房身ノ攻撃ニ於テハ敵銃砲彈ノ集中スル地點ニ於テ、該村南方ニ連ナル堡壘ノ敵ト對戰セシガ、地形上ノ關係ニ於テ小隊長ハ部下全分隊ノ射撃指揮ヲ執ル能ハザル爲、秀吉ハ挺身其ノ一部ヲ掌握シテ之ヲ指導シ、有效ナル射撃ヲ以テ敵ヲ壓迫セシガ、敵彈ノ爲ニ負傷シ戰線ヲ退クノ已ムヲ得ザルニ至リ、野戰病院ニ收容ノ後、各地病院ヲ經テ内地ニ後送セラレ、十七日大阪豫備病院天王寺分院ニ入り、四月十七日全治退院シ、十八日歩兵第八聯隊補充大隊第二中隊

附テ命ゼラレ、爾來補充兵教育係助手トシテ熱心勉勵シ、良好ナル成績ヲ舉ゲタリ。三十九年十一月延期現役滿期除隊トナレリ。
 戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵軍曹勳七等功七級河原國藏

河原國藏ハ、大阪市西區南堀江通五丁目ノ平民、仁兵衛ノ次男ニシテ、明治十二年五月生ル。十九年四月尋常小學校ニ入學シ、二十三年三月卒業シ、鐵工業ニ從事セリ。

三十二年十二月由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、三十三年十二月砲兵一等卒ヲ經テ上等兵ニ進ミ、三十四年十二月砲兵伍長ニ任ゼラレ、三十五年十一月滿期除隊トナレリ。後、妻千里ヲ娶ル。



三十七年五月四日、充員召集ニ應ジ、由良要塞砲兵隊ニ入り、六月十二日徒歩砲兵第二聯隊附ヲ命ゼラル。七月十二日砲兵軍曹ニ任ゼラレ、二十八日出征ノ爲屯營ヲ發シ、八月七日宇品港ヨリ乗船シテ、十三日清國青泥窪ニ上陸シ、十七日ヨリ徒歩砲兵第二聯隊第四中隊附トシテ、旅順要塞攻撃準備ノ爲、部下ヲ督勵シテ彈藥

ノ運搬ニ從事シ、引續キ十九日ヨリ十五珊米臼砲々車長トシテ旅順要塞第一回總攻撃ニ參與シ、精密ナル照準ト確實ナル裝填トヲ以テ最モ有效ナル射撃ヲ續行シ、東鷄冠山及ビ同北砲臺ノ兵備ヲ擊破シ、敵ノ砲火ヲ制壓スルニ於テ最モ功多カリキ。十月十日ヨリ砲兵陣地ヲ東北溝ニ移轉スルニ當リ、砲臺ノ構築及ビ火砲材料彈藥等ノ運搬ニ從事シ、彈丸雨注ノ下從容トシテ其ノ任務ヲ遂行

シ、短時日ヲ以テ遺憾ナク射撃準備ヲ完成シ、豫定期日ニ射撃ヲ開始スルヲ得セシメタルガ、其ノ功與リテ大ナリキ。同月十六日ヨリ所屬中隊ハ姜家屯二十八珊米榴彈砲使用ノ任ニ當ルヤ、砲車長トシテ屢々陸正面各砲臺攻撃ノ援助射撃ニ從事シ、頻リニ有效ナル射撃ヲ行ヒ、敵ノ砲火ヲ鎮壓シ、大ニ我が大口徑火砲ノ威力ヲ發揚シ、殊ニ二月八日及ビ九日旅順港内ノ敵艦ヲ砲撃スルニ當リ第一砲車長トシテ敵艦「バーヤン」號ヲ目標トシ、正確ナル照準ヲ以テ猛射ヲ行ヒ、十四發ノ命中彈ヲ得テ、遂ニ其ノ航海力及ビ戰鬥力ヲ失フニ至ラシメタリ。又同月二十八日ニハ第一小隊ニ屬シテ二龍山堡壘ニ參與セシガ、敵火ノ猛烈ナル集中ヲ被リ、或ハ掩蓋ヲ破壊セラレ、砲手續々死傷セシモ國藏ハ毅然トシテ動カズ、豫備砲手ヲ指揮シテ共ニ砲側ノ損害セル箇所ヲ修繕シ、滯ナク射撃ヲ續行セシメタル其ノ功尠少ナラザリキ。

三十八年一月二日旅順開城ノ後、北進ノ爲火砲材料ノ整備ニ從事シ、二月十四日旅順ヲ發シテ前進シ、十七日ヨリ蛇山子ニ陣地ヲ設ケ、二十八珊榴彈砲ヲ

使用スルヤ之レガ第一砲車長ヲ命ゼラレ、三月一日ヨリ前田軍曹トニ番交代ヲ以テ柳匠屯、萬寶山、海鼠山、三道崗子及ビ沙河堡等攻略ノ援助射撃ヲ行ヒ、常ニ精密ナル裝填ヲ以テ有效ナル射彈ヲ送り、堅固ナル敵ノ陣地ヲ破壊シテ、友軍ノ攻撃運動ニ至大ノ援助ヲ與へ、竟ニ敵ヲシテ潰走ニ至ラシメタル、其ノ功與リテ大ニ力アリタリ。爾後各地ニ轉進シテ守備其他ノ勤務ニ服シ、熱心勉勵セリ。

三十九年二月六日山頭堡ヲ發シ、十二日凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十六日和田岬ニ上陸シ、次イデ由良ニ歸著シ、二十二日召集解除トナリ歸郷ス。戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵軍曹勳七等功七級田中鶴松

田中鶴松ハ、大阪市西區阿波堀通二丁目ノ平民、文右衛門ノ長男ニシテ、明治十年三月生ル。十八年四月尋常小學校ニ入學シ、二十二年三月卒業後藥種商ニ従事ス。

三十年十二月由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、三十一年十二月砲兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十三年十一月滿期除隊トナレリ。後、同區南堀江通二丁目ニ移轉シ、妻せいトノ間ニ二男ヲ擧グ。

三十七年五月四日、充員召集ニ應ジ由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、十一日徒歩砲兵第二聯隊第五中隊ニ編入セラレ、次イデ出征ノ爲、由良要塞ヲ發シ、七月四日神戸港ヨリ乗船シテ、十三日清國奉天省青泥窪ニ上陸シ、三十日所屬中隊ノ前進ニ際シ、火砲材料汽車輸送監視ノ爲同地ニ殘留シ、八月十一日長嶺子ニ赴キ、火砲材料ノ手入、汽車積載卸下等ニ従事シ、成績良好ナリキ。十三日ヨ

リ大孤山北方砲兵陣地ニ於テ砲臺ノ構築作業及ビ火砲材料、彈藥ノ運搬ニ従事シ、敵彈ノ危険ヲ顧ミズ、且連日降雨ノ爲、作業最モ困難ナリシモ、晝夜兼行率先奮勵シ、所屬中隊ノ戰鬪準備完成上ニ多大ノ效果ヲ與ヘタリ。十八日準備作業全ク成ルヤ、十九日ヨリ旅順要塞第一回總攻撃ニ參與シ、一番砲手トシテ能ク勇敢ニ動作シ、十一月十五日砲兵伍長ニ任ゼラレ、同日以降第三砲車長トシテ攻撃ニ參與シ、三十八年一月二日旅順開城ニ至ルマデ毎回ノ旅順要塞攻撃及ビ攻撃作業ノ掩護射撃ニ參加シ、雨下スル敵彈ノ下ニ在ツテ、常ニ沈著ニ動作シ、綿密ナル注意ヲ拂ヒテ射撃ノ爲ニ發生セントスル故障ヲ排除シ、終始有效ナル射撃ヲ繼續シ、其ノ目的ヲ達スルニ於テ大ニ力アリキ。

三十八年二月十三日北進シ、十五日長興甸ニ著シ、翌十四日ヨリ沙河左岸拉木屯ニ於テ戰備作業ヲ爲スニ當リ、連日敵火ノ下ニ率先シテ部下ヲ督勵シ、作業ノ完成ヲ容易ナラシムルニ努メタリ。二十七日ヨリ第三砲車長トシテ奉天附近ノ會戰ニ參與シ、連日確實ニ部下ヲ指揮シ、終始有效ナル射撃ヲ敵ニ送

リ、殊ニ三月七日漢城堡附近ノ攻撃ニ際シテハ、猛烈ナル敵ノ銃砲火ヲ冒シテ沈著ニ部下ヲ督勵シ、砲臺長ノ意圖ノ如ク適切ナル時期ヲ失セズ最モ有效ナル射撃ヲ繼續シテ多大ノ損害ヲ與ヘ、砲臺射撃ノ成果ヲ良好ナラシメタリ。此ノ戰ニ於テ所屬中隊ハ軍司令官ヨリ感狀ヲ授與セラレタルガ鶴松ノ功其ノ多キニ居ル。同月九日陣地撤去セラレテヨリ各地ノ守備ニ服シ、七月十六日前進シテ、二十一日山頭堡ニ著シ待命ス。此ノ間火砲材料ノ運搬ニ從事シ、又常ニ部下ノ訓練ニ努メ能ク其ノ職責ヲ竭セリ。

三十九年二月十三日、凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十七日由良要塞ニ歸著シ、十九日復員下令、二十二日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵軍曹勳七等功七級中川平七

中川平七ハ、大阪市西區江ノ子島東ノ町ノ平民、熊野重次郎ノ次男ニシテ、明治十二年四月生ル。二十一年五月同區本田町通三丁目ノ平民、中川文吉ノ養子トナレリ。二十五年三月高等小學校ヲ卒業シ、次イデ私塾ニ就キ二年間國語漢學ヲ修業セリ。

三十二年十二月由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、三十三年十二月砲兵一等卒ヲ歴テ上等兵ニ進ミ、三十四年十二月砲兵伍長ニ任ゼラレ、三十五年十一月滿期除隊トナレリ。爾後運送業ニ従事ス。三十六年二月文吉ノ女リノト結婚シ、一男二女ヲ擧グ。

三十七年五月五日充員召集ニ應ジ、由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、十一月徒歩砲兵第二聯隊ニ入隊シ、第六中隊附ヲ命ゼラレ、六月十二日出征ノ爲由良ヲ發シ、七月九日神戸港ヨリ乗船シテ、十三日清國青泥窪ニ上陸シ、爾後各地ニ轉

進シテ露營シ、八月十三日ヨリ旅順陸正面大孤山北方ニ所屬中隊ノ陣地ヲ構築スルニ當リ、砲車長トシテ猛烈ナル敵ノ銃砲火ヲ冒シ、勇敢率先部下ヲ督勵シ、迅速ニ工事作業ヲ遂行シテ射撃準備ヲ完成セリ。越エテ同月十九日ヨリ二十五日マデ旅順本防禦線第一總攻撃ニ參加シ、九月十日砲兵軍曹ニ任ゼラル。越エテ十月三十日第二回總攻撃、十一月二十六日ヨリ第三回總攻撃、二十七日ヨリ二〇三高地攻撃掩護砲撃、十二月十八日東鷄冠山北砲臺攻撃ニ參與シ、常ニ猛烈ナル敵火ヲ冒シ、部下ヲ督勵シテ砲車ヲ指揮シ、奮戰最モ努メ、又屢々生ズル砲車ノ故障ヲ排除シテ有效ナル射撃ヲ行ヒ、或ハ中隊觀測所ノ勤務ニ服シ、勇敢奮勵常ニ能ク中隊長ヲ輔佐シ、中隊砲戰ノ威力ヲ發揚セシメタリ。殊ニ十二月二十八日二龍山砲臺ノ攻略ニ當リ、砲車長トシテ敵ノ猛火ヲ冒シ、勇敢ニ動作シテ部下ヲ指揮激勵シ、正確ナル射撃ヲ續行セシガ、所屬聯隊ハ該戰鬪ニ於ケル砲戰ノ效果偉大ナリシヲ以テ軍司令官ヨリ感狀ヲ授與セラレタリ。三十一日ヨリ松樹山ノ攻撃ニ參加シ勇戰奮闘セリ。

三十八年一月二日旅順開城後火砲材料整理ニ從事シ、二月六日陣地ヲ發シテ北進ノ途ニ就キ、各地ヲ經テ大儲貴堡ニ著シ、十六日ヨリ砲車長トシテ奉天附近會戰ノ運動ニ參與シ、敵ノ猛火ヲ冒シ部下ヲ督勵シテ、北部樹林子ニ於ケル陣地ノ構成ヲ迅速ニ遂行シ、二十七日及ビ二十八日同陣地ニ於ケル砲戰ニ從事シ、殊ニ二十八日夜ハ危險ト困難トヲ排シテ率先部下ヲ勵マシ、拉木屯東北へ陣地ノ變換ヲ完成セリ。三月一日ヨリ七日マデ新陣地ニ於テ日夜激烈ナル敵ノ銃砲火ヲ冒シ、勇敢沈著ニ動作シ、砲側ニ生ズル悲惨ノ狀況ヲ意トセズ部下ヲ激勵シテ正確ナル射撃ヲ續行シ、中隊砲戰ノ威力ヲ發揚セシメ、殊ニ七日漢城堡附近ノ攻撃ニ際シテハ、中隊ノ砲戰效果著大ナリシヲ以テ、中隊ハ軍司令官ヨリ感狀ヲ授與セラレタリ。爾來平七ハ砲車長トシテ各地ニ轉進シ、七月十九日山頭堡ニ著シ宿營セリ。

三十九年二月十三日、凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヨリ乘船シテ、十七日由良ニ歸著シ、二十二日復員ニ付召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵軍曹勳八等功七級横山愛之助

横山愛之助ハ、和歌山縣有田郡糸我村大字西ノ平民、宮井利兵衛ノ七男ニシテ、明治十年二月生ル。十八年四月尋常小學校ニ入學シ、卒業シテ高等小學校ニ入り、二十六年三月卒業シ、後、船員トナレリ。

三十年十二月歩兵第三十七聯隊ニ入隊シ、三十一年十二月歩兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十二年十一月歸休除隊トナレリ。三十六年十二月大阪市西區九條通三丁目ノ平民、横山新三郎ノ養子トナリ、其ノ女さくと結婚シ、一男一女ヲ舉グ。

三十七年四月十六日、充員召集ニ應ジ歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第三中隊ニ編

入セラレ、七月十二日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、其ノ日大阪港ヲ出帆シテ



十八日清國奉天省柳樹屯ニ上陸シ、爾來諸勤務ニ勉勵シ、八月三日以降石灰窪子ニ於テ勤務中、毎日本隊ヨリ中隊ノ糧食運搬ニ從事シ、途中敵ノ砲撃ヲ受ケ頗ル危険ナリシモ、勇敢ク其ノ任務ヲ盡シテ毫モ遺漏ナカリキ。同月二十一日及ビ二十二日

旅順要塞盤龍山ノ攻撃ニ參加シ、激烈ナル敵ノ銃砲火ヲ冒シ、勇往邁進シテ士卒ニ模範ヲ示シ、續イテ同砲臺ニ進入後、數回ノ敵襲ニ遇ヒ、死傷續出頗ル危険ノ時ニ際シ、勇敢ニ奮闘シ、敵ノ襲撃ヲ沮止スルニ與リテ力アリキ。二十七日ヨリ東北溝ニ於テ龍眼方面ノ敵ト對峙シ對壕作業ニ從事シ、九月八日下土哨トシテ壕中ニ殘留シ、十六日ヨリ二十五日マデ青泥窪ニ於テ衛兵勤務ニ服

シ、此ノ間歩兵伍長ニ任ゼラレ、職務ニ勉勵セシガ、脚氣病ニ罹リ、内地ニ後送セラレ、二十九日大阪豫備病院ニ入り、十月二十五日全治退院シ、歩兵第八聯隊補充大隊第二中隊附ヲ命ゼラレ、十一月第九中隊附ニ轉ジ、十二月一日ヨリ三ヶ月間新兵教育助教トシテ熱心事ニ從ヒ、三十八年三月第七中隊附、八月第六中隊附ヲ命ゼラレ、九月二日歩兵軍曹ニ任ゼラル。十二月十五日復員下令、二十二日召集解除トナレリ。
戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵伍長勳八等功七級樋口光太郎

樋口光太郎ハ、大阪市北區上福島町二丁目ノ平民、友吉ノ長男ニシテ、明治十三年九月生ル。後、西區泉尾町ニ移轉セリ。二十一年四月三軒家尋常小學校

ニ入學シ、二十六年三月退校セリ。



三十三年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十四年十二月歩兵一等卒ニ三十五年十二月上等兵ニ進ミ、武器係ヲ命ゼラレ、三十六年十一月善行證書ヲ附與セラレテ歸休除隊トナレリ。後、妻まよヲ娶リ、一男ヲ擧ゲ、土木建築請負業ニ従事セリ。

三十七年三月八日、充員召集ニ應ジ、歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第十一中隊ニ編入セラレ、四月二十三日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、其ノ日大阪港ヨリ乗船シテ、五月十一日清國奉天省孫家咀子ニ上陸シ、十七日乾家屯ニ著ス。十八日第一師團長ノ指揮下ニ入り、劉家屯西南方高地ニ在ッテ前哨勤務中、屢々斥候長トナリ、幾多ノ困難ヲ排シテ敵情ヲ搜索シ、他隊トノ連絡ヲ保持セリ。二十

四日第四師團長ノ指揮下ニ復シ、二十五日金州西北方高地ノ占領ニ際シ、敵ノ銃砲彈及ビ機關砲彈類々トシテ我ガ散兵線ニ落下シ、危險名狀スベカラザル間ニ在ツテ傳令使ノ任ニ當リ、勇敢機敏ニ其ノ任務ヲ遂行シ、且散兵線ニ列シテ彈雨ノ下ニ奮闘セシガ、竟ニ敵彈ノ爲ニ負傷シ、野戰病院ニ收容セラレ、漸次後送セラレテ大阪豫備病院ニ入り、九月二十六日全治退院シ、歩兵第八聯隊補充大隊第三中隊ニ轉入シ、爾來補充兵及ビ新兵ノ教育助教トシテ能ク教官ヲ補佐シ、日夜勉勵其ノ職務ヲ竭シ、旁ラ衛兵其ノ他ノ勤務ニ服シ、奮勵事ニ從ヒテ功績尠カラザリキ。

三十八年七月二十一日、歩兵第六十一聯隊第一中隊ニ編入セラレ、八月十三日再ビ出征シテ、十六日清國大連灣ニ上陸シ、十八日同地ヲ發シテ、二十日趙家溝ニ著シ、九月二十三日歩兵伍長ニ任セラレ、軍ノ總豫備隊トナリテ同地ニ滞在シ、二十六日師團衛兵トシテ鐵嶺ニ派遣セラレ、十月八日交代歸隊シ、九日趙家屯ヲ發シ、十日奉天ニ著シ、同地ノ守備ニ服シ、常ニ勉勵能ク其ノ職責

ヲ竭セリ。十一月一日關東總督ノ隷下ニ入り、爾來衛兵員兼武器係ヲ命ゼラレ、終始一日ノ如ク熱心勵精シ、其ノ功績尠カラザリキ。

三十九年二月四日奉天ヲ發シ、同日瓦房店ニ著シ、其ノ地ノ守備ニ服シテ能ク職責ヲ竭セリ。其ノ間所屬聯隊第一大隊長歩兵少佐阿久津秀夫ヨリ「從軍中ノ勤勞ヲ表彰ス」トノ褒狀ヲ附與セラレタリ。三月二十日歩兵第八聯隊附トナリ瓦房店ヲ發シ、二十三日凱旋歸還ノ爲大連灣ヲ出帆シテ、二十六日和田岬ニ上陸シ、二十七日大阪ニ歸著シ、三十日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵伍長勳八等功七級西見岩吉

西見岩吉ハ、西成郡難波村ノ平民、龜吉ノ長男ニシテ、明治十五年十一月生

ル。後、大阪市西區新町南通二丁目ニ移轉セリ。二十四年四月尋常小學校ニ入學シ、卒業シテ高等小學校ニ入り、第三學年ヲ修業シ、爾後料理業ヲ營ミ、妻靜トノ間ニ二男ヲ擧グ。

三十五年十二月由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、三十六年十二月砲兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ム。

三十七年二月五日警急配備令下リ、六日鳴門地區司令部通信勤務ヲ命ゼラレ、五月六日動員令下リ、十一日徒歩砲兵第二聯隊第八中隊ニ編入セラレ、六月十二日、出征ノ爲由良要塞ヲ發シ、七月四日神戸港ヨリ乗船シテ、十三日清國青泥窪ニ上陸シ、八月二日ヨリ十日ニ至ルマデ敵火ノ危険ヲ冒シテ道路ノ改修攻城準備材料ノ運搬、攻城廠中間廠ノ火藥庫築設並ビニ輕便鐵道ノ敷設ニ從事シ、奮勵シテ攻城準備作業ノ完成ヲ輔ケ、次イデ十一月ヨリ十八日ニ至ル間、大孤山北東方ニ於テ、彈雨ノ下、各種ノ困難ヲ排シテ銳意通信網ノ架設及ビ通信所ノ構築ニ從事シ、部下ヲ督勵シテ中隊ノ戰鬥準備作業ノ完了ニ

努メ、十九日ヨリ三十八年一月二日旅順開城ニ至ルマデ旅順陸正面ノ攻撃戰鬪ニ參與シテ通信勤務ニ服シ、射擊指揮命令報告ノ傳達ヲ確實ニシ、殊ニ敵彈ノ爲、通信網ノ切斷頻々タルモ、迅速ニ檢線補修ヲ爲シ、有效ナル射擊ヲ繼續セシメ、東鷄冠山砲臺白銀山北砲臺等ノ各砲臺射擊動作ノ妨碍及ビ東鷄冠山砲臺北方散兵壕同鐵條網ノ破壞ニ任ジ、我ガ攻撃歩兵ノ前進ヲ容易ナラシムルニ與リテ大ニ力アリタリ。

三十八年二月十六日ヨリ二十八日ニ至ル迄奉天附近ノ會戰ニ參與シ、萬家園子ニ於テ敵火ノ下ニ幾多ノ困難ヲ排シ、部下ヲ督勵シテ通信網ノ架設及ビ通信所ノ構築ニ從事シ、中隊ノ戰鬥準備作業ノ完了ニ努力シ、三月一日ヨリ三日ニ至ルマデ通信手トシテ大武鎮營、行家臺子、三家子、黑林屯ノ砲擊ニ參與シ射擊指揮命令報告ノ傳達ヲ圓滑ナラシメタリ。八月十日砲兵伍長ニ任ゼラレ、爾來各地ノ守備ニ服シ、能ク其ノ職責ヲ竭セリ。

三十九年二月十四日、凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十八日由良要塞ニ歸

著シ、二十一日滿期除隊トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵伍長勳七等功七級中本喜三郎

中本喜三郎ハ、京都市下京區籠町ノ平民、林佐助ノ三男ニシテ、明治十五年一月生ル。三十年三月、同區格致高等小學校ヲ卒業シ、次イデ私塾ニ入り二ケ年間英學及ビ數學ヲ修業シ、家事ノ時計商ニ從事セリ。後、大阪市西區北堀江上通二丁目ニ移轉ス。

三十四年十二月要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、三十五年十二月砲兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十六年十一月善行證書ヲ附與セラレテ歸休除隊トナレリ。後大阪市西區北堀江通二丁目ノ平民、中本房吉ノ養子トナリ、其ノ女つるト結婚

ス。

三十七年五月五日、充員召集ニ應ジ、由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、十一日徒歩砲兵第二聯隊第二中隊ニ編入セラレ、六月十八日出征ノ爲由良要塞ヲ發シ、七月二日神戸港ヨリ乗船シテ、八日清國青泥窪ニ上陸シ、八月三日ヨリ旅順要塞攻城準備作業ニ從事シ、白銀山、鷄冠山、大孤山等ヨリ行フ敵ノ砲火ヲ冒シツ、龍頭陣地ニ於テ砲臺ノ築設及ビ火砲材料ノ運搬ニ從事シ、連日連夜降雨泥濘ヲ排シテ奮勵努力シ、十九日ヨリ二十五日ニ至ル旅順要塞第一回總攻撃ニ當リ砲手トシテ參加セシガ、其ノ勇敢ナル動作ノ結果トシテ多數ノ有效彈ヲ出シ、攻撃砲火ノ威力ヲ發揚セシムルニ與リテ力アリキ。越エテ十月八日ヨリ陣地ノ東北溝ニ移轉セラル、ニ當リ、鷄冠山諸砲臺ヨリスル敵ノ砲火ヲ冒シツ、連日徹霄シテ火砲材料ノ運搬ニ從事シ、二十五日ヨリ三十日ニ至ル第二回總攻撃及ビ十一月二十六日第三回總攻撃並ビニ大小數十回ノ制壓掩護射撃ニ當リ、東北溝陣地ニ於テ常ニ砲手トシテ參加シ、椅子山、案子山、松樹山

及ビ二龍山ノ各砲臺ヨリ行フ敵ノ猛火ヲ冒シ沈著ニ動作シテ、多數ノ有效彈ヲ出スニ努メ、又屢々彈藥ノ補充及ビ砲臺ノ補習工事ニ參與シタリ。次イデ十二月二十八日二龍山ノ攻撃ヨリ三十八年一月二日旅順開城ニ至ルマデ同陣地ニ在リテ、椅子山、案子山、松樹山等ノ諸砲臺ヨリスル敵彈ノ下ニ砲手トシテ奮戰シ、其ノ精確迅速ナル動作ノ結果トシテ多數ノ有效彈ヲ生ゼシメ、友軍ノ運動ヲ容易ナラシメタルガ、殊ニ二龍山ノ攻略ニ際シテ最モ勇敢ニ努力セシガ、所屬聯隊ハ此ノ攻略ニ於テ滿洲軍總司令官ヨリ感狀ヲ授與セラレタリ。

三十八年一月十五日砲兵伍長ニ任ゼラル。二月八日東北溝露營地ヲ發シテ、北進ノ途ニ就キ、臨時編成ニ係ル第四砲臺要員トシテ唐家堡陣地ニ到リ、萬寶山、海鼠山一帶ノ陣地ヨリ行フ敵ノ猛火ノ下ニ在テ勇敢ニ戰備作業ニ從事シ、次イデ二十七日ヨリ三月九日ニ亙ル奉天附近ノ會戰ニ於テ砲車長ノ任ニ當リ、殊ニ三月一日二日及ビ三日ノ激戰ニ際シテハ敵ノ亂射セル大小砲彈宛テ雨霰ノ如クナリシモ沈著敏捷ニ動作シテ我が砲臺ノ威力ヲ發揚セシメタリ。爾來

各地ヲ經テ、七月中旬山頭堡ニ著シ、同地ニ舍營セリ。

三十九年二月十一日、凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十六日由良ニ歸著シ、

二十二日延期現役滿期除隊トナリテ歸郷セリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳七等青色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級岩野巳之助

岩野巳之助ハ、大阪市西區八幡屋町ノ平民、重五郎ノ次男ニシテ、明治十四年九月生ル。二十一年四月同區市岡尋常小學校ニ入學シ、二十三年第二學年ヲ修業ス。家ハ從前農ヲ業トセシモ、後仲仕業ニ轉ゼリ。

三十四年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十五年十二月歩兵一等卒ニ進ミ、三十六年十一月善行證書ヲ附與セラレテ歸休除隊トナレリ。後、妻いわヲ娶リ

一男ヲ舉ゲタリ。



三十七年三月八日、充員召集ニ應ジ、歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第五中隊ニ編入セラレ、四月二十三日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、同日大阪港ヨリ乗船シテ、五月十日清國奉天省孫家咀子ニ上陸シ、十四日ヨリ二十四日ニ亙リ金州城攻圍ニ際シ、十三里臺、韓山臺附近ニ於テ警戒ニ努メ、二十五日ヨリ二十六日ニ亙リ金州城及ビ南山ノ攻撃ニ參加シテ常ニ勇敢ニ動作シ、殊ニ二十六日ハ砲烟彈雨ヲ突イテ三千米突ノ平坦地ヲ前進セシガ、巳之助毫モ逡巡スル色ナク勇往邁進シテ熱心ニ射撃ヲ爲シ、衆兵之ニ勵マサレテ旺ニ敵ヲ射撃セシガ、次イデ突撃ノ命下ルヤ衆ニ擢ンデ、奮進シ、中隊ノ先頭ニ立チテ敵壘ニ突入ス。其ノ勇猛ナル動作ハ吾ガ攻撃ノ目的ヲ達成

スルニ與リテ大ニ力アリタリ。越エテ六月十五日得利寺ノ戰鬪ニ參加シ、所屬中隊ノ紅家屯東方高地ニ於テ砲兵ノ掩護ニ任ズルヤ、巳之助亦勇敢ニ動作シ、二十一日ヨリ熊嶽城附近ニ前進シテ警戒勤務ニ服セシニ、二十七日及ビ七月五日優勢ナル敵騎ノ來襲ヲ受ケ、熊嶽城北方ナル散兵線ニ出デ、之ヲ邀ヘ撃チ奮闘シテ遂ニ撃退セリ。九日蓋平ノ攻撃ニ際シテハ終始第一線ニ在ッテ勇敢ニ活動シ、二十三日ヨリ二十五日マデ大石橋附近ニ轉戦シ、敵彈ノ集中スル下ニ在ッテ敏活ニ動作シ功績尠カラザリキ。越エテ同月二十六日ヨリ九月四日ニ彌ル鞍山站、首山堡及ビ遼陽ノ戰鬪ニ參與シ常ニ勇敢ニ動作セシガ、殊ニ九月二日ヨリ四日ニ亙リ遼陽停車場ヲ攻撃セシ際、敵火ヲ冒シテ奮勵工事ニ從ヒ、猛烈ナル敵ノ銃砲火ニ對シテ堅固ニ陣地ヲ維持スルコトヲ得セシメタリ。又二日夜將校斥候淺野中尉ニ從ッテ突撃進路ノ偵察ニ從事シ、間斷ナキ亂射ヲ冒シテ敵ノ半永久的築城ニ接近シ、副防禦ノ狀況ヲ視察シ、三日攻撃前進ニ當リ屢々小隊長ノ命令ヲ分隊ニ傳達ス。斯クテ中隊ハ敵ニ接近シテ約三百

米突ノ地ニ達シ突撃時機ヲ待チシニ、其ノ間敵ノ狙撃頻リニシテ勢猛烈ヲ極メ、中隊ハ之ニ應ゼントセシガ彈藥缺乏ヲ告ゲシカバ、巳之助ハ戰線及ビ前進地帯ニ往復シテ死傷者ノ彈藥ヲ收集シ、之ヲ散兵ニ分配スル等其ノ功績拔群ナリキ。越エテ十月十日ヨリ十六日ニ亙ル沙河ノ會戰ニ參與シ常ニ勇敢ニ動作セシガ、就中十一日ハ小油虫堡附近ニ於テ中隊長ノ傳令トシテ報告ノ任ニ當リシガ、大油虫堡及ビ大平庄方向ヨリ優勢ナル敵ノ逆襲ヲ受クルニ及ビ、所屬小隊ハ最左翼ニ在リシヲ以テ敵火ノ集中殊ニ甚ダシク、死傷相踵イデ轉々悲慘ノ光景ヲ現出シ、小隊長モ亦負傷スルニ至リシガ、此ノ時巳之助ハ身ヲ以テ小隊長ヲ蔽ヒ、殊死シテ戰鬪ヲ持續シ、銳意敵ノ攻撃ヲ拒止シ、以テ數時間ノ後來著スベキ増援隊第十二中隊ノ來ル迄、聯隊ノ最左翼タル敵ノ陣地ヲ固守スルニ力メタリ。既ニシテ夕刻ニ及ビ稍ヤ閑ナルニ至ルヤ、負傷セル小隊長ヲ擁護シテ假纒帶所ニ送り、直チニ引返ヘシテ戰線ニ復歸セリ。翌十二日北烟臺ノ攻撃ニ當リ、中隊長ノ傳令トシテ屢々彈雨ノ間ヲ往復シ、命令及ビ報告ノ

傳達ニ任ジ、次イデ突撃ニ際シテハ勇躍シテ中隊ノ先頭ニ立チ、村落ニ突入シテ敵ノ掩堡ノ一端ヲ占領シ、以テ該村落占領ノ端緒ヲ開キタリ。十四日中隊小張良堡ノ陣地ニ於テ優勢ナル敵ノ逆襲ヲ受クルヤ、中隊ノ位置ハ恰モ孤立ノ狀況ニ在リ、而テ敵ノ掃射猛烈ニシテ慘憺ヲ極メタルガ、巳之助ハ奮然トシテ平坦開豁地ヲ往復スルコト數回、中隊長ノ重要ナル報告ヲ大隊長ニ進達セリ。然ルニ敵ハ益々接近シ來リシカバ勇奮散兵線ニ加ハリテ之レヲ猛射シ、彈藥ノ缺乏ヲ告グルニ至ルヤ、危險極マル地區ヲ奔馳シテ決死之レガ補充ニ任ジ、衆亦勇ヲ鼓シテ鬪ヒ、敵ニ多大ノ損害ヲ與ヘテ遂ニ之ヲ撃退セリ。同月十七日ヨリ三十八年二月二十五日ニ至ル沙河對陣中、屢々將校斥候ニ從ヒ重要ナル偵察ニ從事シ、又ハ防禦工事ニ服シ克ク其ノ任ヲ完ウシ、其ノ間(十一月十日)歩兵上等兵ニ進ム。次イデ三十八年三月一日ヨリ十日ニ亙ル奉天附近ノ會戰中二日金山臺、三日瓜加臺附近、四日小芽嶺子、五日及ビ六日溫盛堡ノ各戰鬪ニ參與シ、常ニ沈著勇敢ナリシガ、殊ニ四日小芽嶺子ノ攻撃ニ際シテハ衆ニ擢デ

、壯烈ナル動作ヲ爲シ、他兵ノ勇氣ヲ鼓舞シ、次イデ突撃ノ命下ルヤ蹶然奮進シテ中隊ノ最先頭ニ立チテ敵陣ニ突入シ、六日溫盛堡ニ於テ夜間停止斥候トシテ陣地前ニ服務シ、歸還後、敵狀ニ關シテ中隊長ニ報告中、飛來セル敵彈ノ爲ニ頭部ニ負傷シ、野戰病院ニ收容ノ後、遼陽兵站病院ニ入り、同月八日大連灣(青泥窪)ヨリ乗船シテ、十一日大阪港ニ上陸シ、大阪豫備病院天王寺分院ニ入り、九月二十一日全治退院シ、歩兵第八聯隊補充大隊ニ入隊シ、爾來諸勤務ニ勵精シ、十二月二十六日復員下令、滿期除隊トナレリ。
戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級川下清市

川下清市ハ、徳島縣麻植郡學島村大字學村ノ平民、伊平ノ四男ニシテ、明治十

一年六月生ル。十九年四月學島村尋常小學校ニ入學シ、二十五年三月六ケ年ノ

學科ヲ修業シテ退校セリ。



岡町ニ移轉シ、妻こんとノ間ニ一男二女ヲ學グ。

三十七年六月十五日、充員召集ニ應ジ、歩兵第三十九聯隊ニ入隊シ、第八中隊ニ編入セラレ、六月二十七日喇叭手トシテ出征ノ爲姫路衛戍地ヲ發シ、二十九日神戸港ヨリ乗船シテ、七月七日清國奉天省南尖澳ニ著シ、八日同地ヲ發シテ十日安東縣ニ上陸シ、次イデ同地ヲ發シ、十三日ヨリ十四日マデ康家堡子ノ

兵站守備ニ服シ、二十三日ヨリ三十一日マデ新開嶺ノ守備ニ任ジ、八月一日ヨリ六日マデ東方流河及ビ七日ヨリ九月十六日マデ甜水ノ各兵站部守備ニ服シ、就中甜水兵站部守備中ハ、軍需品運搬監視等ノ爲晝夜連續シテ其ノ任務ニ勉勵シ、殊ニ八月十八日ヨリ二日間、庄野少尉ニ隨ツテ步哨線前數里ナル貨郎溝ニ至リ、敵ノ猛射ヲ受ケタルモ屈セズシテ車輛及ビ物資ノ徵發ニ從事シ、且此ノ際斥候トシテ敵中ニ派遣セラレシガ、毫モ恐ル、色ナク深ク敵地ニ入りテ其ノ狀況ヲ審カニシ、徵發隊ノ動作ヲ安全ナラシメ、翌十九日ハ徵發物資後送ノ任ニ當リ、其ノ處置機宜ニ適シ、二里餘ノ敵中ヲ無事ニ後送セシメタリ。九月十九日新城ニ著シ、十月四日ヨリ七日マデ軍路改築ニ從事シ、八日ヨリ沙河ノ會戰ニ參與シ、十一日張海屯及見刀ニ到リテ戰ヲ交ヘ、十二日朱家庄附近ニ於テ戰鬪ニ參加セシガ、我が砲兵陣地前面ノ高地ニ據レル敵ノ敗殘兵ヲ擊攘シテ該高地ヲ占領スルニ與リ、翌十三日三家子及ビ二寶勾ニ於テ、十四日燒達勾附近ニ於テ對戰後、暗夜降雨ヲ冒シテ和僧溝ニ至リ徹夜對敵工事作業ニ從事シ、

十六日歪頭山東方小拂峪附近ニ前進シ、同地西方高地ニ於テ防禦工事ニ從事シ、十七日同地ニ於テ終日交戰シ、其ノ夜大雨ヲ冒シテ歪頭村ノ敵ヲ襲ヒ、十八日歪頭山ノ敵ハ却ツテ我ヲ夜襲シ來リシガ、德市奮然トシテ鬪ヒ之ヲ擊退シ、更ニ附近ノ高地ヲ占領スルニ與リテ功アリキ。十九日ヨリ二十一日マデ同陣地ヲ固守シ、二十七日ヨリ二十九日マデ歪頭山附近ノ陣地ニ於テ對戰シ、三十日歪頭山西麓ニ至リ徹宵防禦工事ニ從事シ、引續キ十二月二十一日マデ前哨勤務ニ服セシガ、屢々敵ノ來襲ヲ受ケシモ悉ク之レヲ擊退シ、又斥候連絡等ノ任ニ當ルヤ、敵彈ノ下ヲ往復シテ克ク其ノ任務ヲ遂行セリ。此ノ間ニ於テ歩兵上等兵ニ進メラレタリ。同月二十三日ヨリ三十八年三月十三日ニ至ル間、牛心臺附近ニ在ツテ騎兵支援隊トナリ前哨勤務ニ服シ、二十四日ヨリ奉天附近ノ會戰ニ參加シ、其ノ日前哨勤務中、家河子附近ニ在ツテ戰ヲ交ヘ、同地ノ占領ニ參與シ、次イデ狄仗ニ進ミ小哨ニ服ス。二十六日西孤嶺ニ於テ戰鬪ニ參加シ、二十七日「カオツ」山上ニ於テ小哨トナリ、敵ノ夜襲ヲ受ケタルモ之

ヲ擊退シ、三月二日ヨリ六日マデ王富嶺附近ニ於テ戰鬪ニ參加セシガ、此ノ地タルヤ我が陣地中殊ニ敵方ニ突出シタル爲三方面ヨリ敵ノ猛射ヲ受ケ、四日夜ヨリ五日ニ互リテハ三面ノ敵襲ニ遭遇シタルモ、奮闘最モ力メ、之ヲ擊退スルニ與リテ力アリタリ。翌六日斥候及ビ連絡ノ爲敵彈ヲ冒シテ營盤ヨリ敵前ニ進ミ、勇敢機敏ニ動作シテ克ク其ノ任務ヲ完ウシ、八日北大嶺ノ敵ヲ夜襲シ、後、敵ヲ追撃シテ大瓢屯ニ至リ、十日ヨリ大瓢屯四白山ノ間ニ在ツテ第二師團大行李ノ護衛ニ從事シ、十四日ヨリ大隊ニ復歸シテ敵ヲ追撃シ、十五日熊官屯ノ戰ニ於テ范家溝北方高地ノ敵敗殘兵ヲ擊退シ、次イデ同地ノ前哨勤務ニ服セリ。越エテ五月十一日ヨリ六月十八日マデ馬家塞兵站守備ニ服務シ、七月八日後備歩兵第十三旅團ニ編入セラレ、爾來前哨及ビ偵察等ノ諸勤務ニ服シ、殊ニ八月二十七日偵察トシテ某地點ニ派遣セラレシ時、優勢ナル敵襲ヲ受ケタルモ、巧ミニ之ヲ支ヘツ、尙馬一嶺附近ニ於テ徹宵警戒ノ任ニ當レリ。十一月九日鐵嶺ヲ發シ、十六日凱旋歸還ノ爲大連灣(青泥窪)ヨリ乘船シ、二十四

日姫路ニ歸著シ、二十八日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級竹山繁次郎

竹山繁次郎ハ、大阪市西區江戸堀下通一丁目ノ平民、伊助ノ三男ニシテ、明治十五年四月生ル。後、同區靱上通二丁目ニ移轉ス。家ハ從前吳服商ヲ營ミシガ、後、雜貨商ニ轉業セリ。二十一年四月北濱愛日尋常小學校ニ入學シ、二十五年三月卒業シ、次イデ東區高等小學校ニ入り、二十八年三月第三學年ヲ修業シ、爾後家業ニ從事シ、妻きぬヲ娶リテ一男一女ヲ擧ゲタリ。

三十五年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第八中隊ニ編入セラレ、三十六年十二月歩兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ昇級セリ。

三十七年三月六日動員令下り、四月二十三日、出征ノ爲、大阪港ヨリ乗船シテ、五月十一日、清國奉天省孫家咀子ニ上陸シ、十五日復州街道ニ出デ、十三里臺ニ進ミシガ、斥候又ハ歩哨トシテ能ク勤務ニ勉勵セリ。越エテ二十六日金州南山ノ攻撃ニ當リ、彈雨ノ間ニ立チテ沈著ニ敵ヲ射撃シ、次イデ前進ニ當リテハ率先シテ他兵ニ模範ヲ示シ、戰鬪愈々激烈ニシテ死傷續出スルモ毫モ躊躇スル色ナク益々勇ヲ奮ツテ戰ヒ、其ノ分隊長ヲ失フヤ直チニ代リテ分隊ノ指揮ヲ執リ、殊ニ突撃ノ際ハ危險ヲ冒シテ敵壘ニ先登シ、尙退却スル敵ニ追撃射撃ヲ行ヒ、全隊ノ突撃ヲ容易ナラシムルニ與リテ力アリタリ。六月一日普蘭店ニ向ツテ前進シ、十三日王家屯ヲ發シ、十四日及ビ十五日得利寺附近ノ激戰ニ參加シ、二十日ヨリ先進支隊ニ屬シテ熊岳城附近ニ至リ、警戒勤務ニ服ス。二十七日敵騎ノ來襲ヲ受ケシモ奮戰シテ之ヲ擊攘シ、同日火石山ヲ占領ノ後、陣地ノ警戒ニ任ジ能ク其ノ職ヲ竭セリ。越エテ七月九日蓋平ノ攻撃ニ當リ、第一線トナリテ勇猛奮進シ、新開嶺ニ先登シ、進ンデ設溝ヲ占領セリ。次イデ二

十三日ヨリ二十五日ニ彌リ大石橋附近ノ戰鬪ニ參加シ、八月一日苑家屯附近ニ於テ敵騎ヲ擊攘シ、同月二十六日ヨリ三十日ニ彌ル鞍山站首山堡ノ戰鬪ノ際、大趙家臺ニ在リシガ、九月一日進ンデ北部尤家趙子ニ至リ第一線トナリ、二日進ンデ「ワソツヤシユアンシユツイ」東側ニ在ツテ散兵トナリ、遼陽停車場南方堡壘ノ敵ト對戰ス。此ノ時敵ノ機關砲頗ル猛烈ニシテ我が位置ハ危險トナリシモ、從容自若トシテ銃火ヲ交ヘ、殊ニ翌三日攻撃ノ際、敵ノ一部ハ我が右翼ニ迫リ來リ所屬中隊ハ三面ヨリ敵ノ集中射撃ヲ受ケ、幹部ノ多クハ死傷シ、頗ル苦戰ニ陥リタリシガ、繁次郎ハ分隊長ニ代リテ指揮ヲ執リ、泰然自若トシテ我が火力ノ増大ニ努メタルガ、其ノ勇敢ナル動作ハ衆ノ模範トナリ、竟ニ有利ノ戰果ヲ結ブニ與リテ大ニ力アリタリ。遼陽陷落後八家子ニ在ツテ警戒勤務ニ服シ、十月十日ヨリ沙河ノ會戰ニ參加シ、十一日油虫堡ノ攻撃ニ參加シ、十二日北烟臺ノ攻撃ニ當リ、散兵線ニ在ツテ彈雨ノ間ニ勇戰奮闘シ、殊ニ突撃實行ニ移ルヤ敵彈愈々猛烈ニシテ、小隊長以下幹部ノ多數ヲ失ヒ、狀況悲慘ヲ極メ

タルモ毫モ屈セズ、率先シテ勇敢ニ闘ヒシカバ、大ニ列兵ノ勇氣ヲ旺ンナラシメ、遂ニ敵ヲ擊退スルニ至レリ。此ノ突撃ノ際、繁次郎ハ敵彈ノ爲ニ負傷シ、第四野戰病院ニ入り、逐次後送セラレテ、二十四日廣島豫備病院ニ入り、十一月一日大阪豫備病院ニ轉送セラレ、二十四日治癒退院シ、同日歩兵第八聯隊補充大隊第四中隊ニ轉入トナリ、四月十七日第四十四回動員令下リ、二十一日歩兵第五十三聯隊ヘ轉出シ、同日第二中隊ニ編入セラレ、二十日歩兵第八聯隊補充大隊ニ轉出シ、十二月十五日復員下令、二十二日下士適任證書並ビニ善行證書ヲ附與セラレテ滿期除隊トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級岡田篤次

岡田篤次ハ、廣島縣深安郡福山町字西町ノ人、篤實ノ長男ニシテ、明治九年十一月生ル。十五年四月初メテ福山東町尋常小學校ニ入學シ、二十一年三月高等第二學年ヲ修業シテ退學セリ。後大阪市西區北堀江御池通一丁目ニ移轉ス。



二十九 年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十年十二月歩兵一等卒ニ進ミ、三十一年五月韓國釜山守備隊ニ派遣ヲ命ゼラレ、三十二年五月韓國守備交代シ、十一月滿期除隊トナレリ。後、妻はるヲ娶リ、家業ノ洋服商ニ從事ス。

三十七年四月十六日、充員召集ニ應ジ歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第八中隊ニ編

入セラレ、七月十二日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、即日大阪港ヨリ乗船シテ十八日清國青泥窪ニ上陸シ、二十七日前牧城駒ニ於テ軍ノ豫備隊トナレリ。八月二十一日楊家屯ニ於テ旅順攻圍第一線ニ入り、二十二日盤龍山東砲臺ノ突撃ニ參加シテハ、勇猛奮進聯隊ノ最先頭ニ攀登シ、敵ヲ左翼堡壘外ニ撃退セシガ、敵ハ我が兵ノ十數名ナルヲ見テ屢々逆襲セントス。然レドモ篤次等ハ其ノ高地ニ在ツテ徹夜怠リナク敵情ヲ視察シ報告セリ。翌二十三日ニ至リ敵ハ猛然逆襲シ來リシカバ勇敢ニ射撃シテ遂ニ之ヲ撃退シ、薄暮ヨリ盤龍山砲臺ニ轉ジ、徹夜同所ノ守備ニ服シ、二十八日ヨリ九月八日マデ水師營南方角面堡砲臺ニ對シ、對壕作業ニ從事セリ。十二日病ニ由リ病院ニ入り、十九日内地ニ後送セラレ各地病院ヲ經テ、十月一日大阪豫備病院ニ收容セラレ、十一月十八日退院シ、同日歩兵第八聯隊補充大隊第四中隊ニ入隊シ、十二月一日ヨリ新兵並ビニ補充兵ノ教育助手トシテ勉勵セリ。

三十八年八月二十五日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級岡茂三郎

岡茂三郎ハ、大阪市西區江戸堀南通五丁目ノ平民、茂平ノ長男ニシテ、明治十三年十月生ル。家ハ廻漕業ヲ營ミ、家計裕カナリ。二十二年四月ヨリ私塾ニ就キ、八ケ年間學業ヲ修メ、中學程度ノ學力ヲ有シ、爾後家業ニ勉勵シ、妻ウタトノ間ニ一男三女ヲ舉グ。

三十三年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十四年十一月歩兵一等卒ヲ歷テ上等兵ニ進ミ、三十六年十一月滿期除隊トナレリ。

三十七年八月五日補充召集ニ應ジ、歩兵第八聯隊補充大隊第一中隊ニ入隊シ、二十五日野戰隊補充トシテ大阪衛戍地ヲ發シ、二十八日宇品港ヨリ乗船

シテ、九月五日清國奉天省營口ニ上陸シ、十日歩兵第八聯隊第四中隊ニ編入セラレ、所屬中隊ノ北進ニ從ヒ、屢々警戒勤務ニ服シ、十月十日ヨリ沙河ノ會戰ニ參加セリ。其ノ第一日中隊ハ前兵トナリテ大黃屯ヲ占領セシガ、此ノ際、大東山堡ノ敵ト對戰シテ之ヲ擊退スルニ與リテ功アリキ。翌十一日中隊ノ小油虫堡ヲ占領スルヤ、敵ノ乘馬歩兵約一聯隊我ガ左側ニ迫ラントスルヲ擊退シテ大油虫堡及ビ小臺ノ敵ト相對シ、十字火ノ下ニ勇戰奮闘シ、十二日北烟臺ノ攻撃ニ當リ、彈雨ヲ冒シテ平坦ナル畑地ニ長時間戰闘ヲ繼續シ、勇敢ニ邁進シテ遂ニ敵ノ陣地ヲ占領スルニ與リ、越エテ十四日中隊ノ砲兵掩護トシテ、大張良堡東北無名部落ヲ占領スルヤ、孤家子及ビ官林堡ヨリスル猛烈ナル敵ノ砲撃ト共ニ歩兵約一大隊前後ニ回攻撃シ來リ、我ガ砲兵陣地ニ迫ラントス、此ノ時、中隊長ノ傳令トシテ猛烈ナル敵火ノ間ヲ往來シ、頻繁ナル命令告令報ヲ迅速確實ニ傳達シ、爲ニ中隊ヲシテ有利ノ戰闘ヲ繼續スルヲ得セシメ、遂ニ敵ヲ潰走セシムルノ功ヲ奏スルニ至レリ。同月十七日ヨリ三十八年二月二

十四日マデ張良堡ヲ守備シ、又小隊長ノ傳令トシテ、嚴冬祁寒晝夜ノ別ナク其ノ任務ニ勉勵シ、又將校斥候ニ隨ツテ、傳令トナリ、屢々危險ヲ冒シテ敵ニ接近シ、斥候長ノ任務遂行ヲ援助シテ力アリキ。二月二十五日ヨリ引續キ小隊長ノ傳令トシテ前進シ、三月一日ヨリ十日ニ彌ル奉天附近ノ會戰ニ參加シ、毎ニ彈雨ノ間ニ奔馳シテ、命令報告ノ傳達ニ任ジ、殊ニ五日所屬大隊ノ大蘇家堡ニ突入シテ、間モ無ク敵ノ歩兵約一個聯隊砲兵約五個中隊ノ逆襲ヲ受ケシ時、北達子營、大貴興堡及ビ其ノ東ヨリスル敵銃砲彈ノ十字火ノ下ニ在ツテ、最モ勇敢ニ傳令ノ任務ヲ竭シ、其ノ傳達悉ク好機ニ投ジ、小隊ノ射撃威力ヲ發揚セシメ有利ノ戰闘ヲ繼續セシメ、遂ニ敵ヲ潰走セシムルニ與リテ大ニ力アリキ。越エテ十日奉天陷落ノ後、分隊長ヲ輔佐シテ勇敢ニ動作シ、十二日ヨリ四月三日マデ奉天停車場ノ守備ニ服シ、戰利品ノ監視及ビ整理ニ從事シ、爾後第一線ニ前進シ、拉馬勾附近ニ於テ防禦陣地ノ構築ニ從事シ、又ハ警戒勤務ニ服シ、常ニ忠實ニ勉勵シテ克ク任務ヲ完ウセリ。十二月八日、凱旋歸還ノ爲柳樹

屯ヲ出帆シテ、十一日和田岬ニ上陸シ、十三日大阪ニ凱旋歸著シ、十七日召集解除トナリテ歸郷シ、爾來家業ニ從事セリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級奧西喜之助

奧西喜之助ハ、大阪市東區備後町四丁目ノ平民、喜助ノ長男ニシテ、明治七年十一月生ル。高等小學校ヲ卒業シ、爾後三年間私塾ニ就キ、漢學ヲ修ム。後、西區京町堀通四丁目ニ移轉セリ。

二十八年四月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、二十九年七月歩兵一等卒ニ進ミ、三十年二月現役ヲ免除セラレ退營ス。家業ハ漆器商ナルガ入營前ハ魚商ノ雇人トナリ、後大阪商船株式會社ノ社員トナリ、妻ふさとノ間ニ一女ヲ擧グ。

三十七年四月六日、充員召集ニ應ジ歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第一中隊ニ編入セラレ、給養係助手トシテ能ク其ノ本分ヲ盡シ、七月十二日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、同日大阪港ヲ解纜シテ、十八日清國奉天省柳樹屯ニ上陸シ、二十四日同地ヲ發シ、八月十六日營城子ヲ經テ鳳凰山麓ニ著シ、旅順攻圍軍ニ屬ス。同月二十二日盤龍山東砲臺ノ攻撃ニ當リ、敵銃砲火ノ猛烈ナル掃射ノ間ニ奮闘シ、後、西砲臺ニ轉ジテ守備中、前後三回優勢ナル敵襲ニ遭遇セシモ、毎回衆ニ抽ンデ、勇敢ニ防戰セリ。二十八日ヨリ九月八日マデ東北溝ニ於テ對壕作業ニ從事シ、敵彈ノ下ニ在ツテ率先盡瘁シ、連日劇務ニ屈セズ、能ク其ノ任務ヲ完ウシ、他兵ノ模範トナレリ。其ノ間八月三十日歩兵上等兵ニ進メラル。九月十六日青泥窪ノ守備隊ニ到著以來、終始曹長及ビ給養係ノ助手トシテ熱心事ニ從ヒ、能ク其ノ職責ヲ竭セリ。殊ニ戰鬪後ハ晝夜兼行庶務ノ整理ニ從事シ、成績頗ル良好ナリキ。

三十八年五月二十二日第二軍戰鬪序列ニ入り、大連(青泥窪)ヲ發シ、爾後菓

子園、腰堡、三臺子等ノ各所ニ轉進シ、常ニ中隊ノ陣中諸物品ノ整理ニ當リ、熱心其ノ職責ヲ完ウセリ。十一月一日三臺子ヲ發シ、十一日凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十六日和田岬ニ上陸シ、次イデ大阪ニ歸營シ、二十七日下士適任證書ヲ附與セラレテ召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級五島米藏

五島米藏ハ、大阪市西區市岡町ノ平民、吉助ノ次男ニシテ、明治十三年十一月生ル。二十年四月市岡尋常小學校ニ入學シ、二十四年三月卒業シ、後、酒及煙草商ヲ營メリ。

三十三年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十四年十二月歩兵一等卒ニ進ミ、

三十六年十一月歸休除隊トナレリ。此ノ歳、妻いちヲ娶リ、三男ヲ擧ゲタリ。

三十七年三月八日、充員召集ニ應ジ、歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第九中隊ニ編入セラレ、四月二十三日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、大阪港ヨリ乗船シテ、五月十四日、清國奉天省孫家咀子ニ上陸シ、爾來諸勤務ニ勉勵シ、屢々傳令又ハ斥候トナリ、常ニ其ノ任ヲ完ウセリ。同月二十六日金州南山ノ攻撃ニ參加シ、敵彈猛烈ニ雨下スル間ニ在ツテ、絶エズ傳令勤務ニ服シ、重要ナル命令報告ノ傳達ヲ爲シ、中隊長ト小隊長トノ連繫ヲ保チ、其ノ攻撃動作ヲシテ敏活ナラシメ、次イデ突撃ニ移ルヤ、最モ勇敢ニ突進セリ。越エテ六月十三日所屬隊ノ騎兵支援隊トシテ復州街道ヲ前進スルヤ、米藏ハ能ク命令ヲ恪守シ騎兵ノ運動ヲ掩護セリ。翌十四日及ビ十五日得利寺附近ノ戰鬥ヲ經テ、七月九日蓋平附近、二十三日ヨリ二十五日マデ大石橋附近ニ轉戰シ、越エテ八月二十六日ヨリ九月四日ニ彌リ鞍山站、首山堡及ビ遼陽ノ各戰鬥ニ參加シ、毎戰敵彈雨注ノ下ニ在ツテ勇敢ニ奮闘シ克ク其ノ本分ヲ竭シ、就中九月三日遼陽停車場附近ノ攻撃ニ際

シ、猛烈ナル敵彈ヲ冒シテ傳令ノ任ニ當リ、克ク其ノ任務ヲ遂行シ、夜半中隊ハ敵陣ヲ突イテ之ヲ占領セシガ、米藏亦之ニ與リテ功アリタリ。遼陽陷落後十月十日ヨリ沙河ノ會戰ニ參與シ、青堆子、小臺、荒地ニ轉戰シ、每戰傳令トシテ、危険ヲ冒シテ克ク命令報告ヲ傳達シ、殊ニ十二日小臺ニ於テ優勢ナル敵ノ攻撃ヲ受クルヤ、勇敢傳令ノ任ヲ遂行シ、防戰最モ力メ、他兵ニ好模範ヲ示セリ。斯クテ沙河會戰後、荒地及ビ張良堡第一線ニ在ツテ敵ト近ク對陣スルコト約五ヶ月ノ長キ、沍寒ニ耐ヘ、諸種ノ困難ヲ排シテ軍務ニ服セリ。其ノ間敵ノ狙撃ノ殆ド絶ユル日ナク、又野砲重砲ノ亂射頗ル猛烈ナリシガ、米藏ハ常ニ中隊ノ傳令トシテ砲火ノ間ヲ往來シテ其命令報告ノ傳達ヲ遂行シ、又三十八年一月二十五日ヨリ二十九日ニ彌ル黑溝臺附近ノ會戰ニ參加セシガ、其ノ勇敢ナル動作ハ他兵ノ模範トセラレタリ。斯クテ二月下旬ヨリ奉天附近ノ會戰ニ參與シ、連日勇敢ニ闘ヒシガ、敵ノ一隊ハ漢城堡及ビ其ノ附近鐵道線路ニ據リテ頑強ニ抵抗シ、我が前進ヲ拒止セントスルアリ、所屬隊ハ三月五日ヨリ七日ニ

彌リ此ノ敵ヲ攻撃セシガ、米藏ハ率先勇敢ニ邁進シ猛烈ナル敵彈ノ下ニ在ツテ奮闘最モ力メタリ。爾後平和克復ニ至ルマデ五里家、後家塔子、西土城子附近ニ於テ對陣シ、殊ニ六月十日ヨリ九月十一日ニ彌リ三裸樹附近ノ線ニ於テ防禦工事ニ從事シ、熱心奮勵克ク工事ノ進捗ヲ助ケテ功アリタリ。是ヨリ先、八月二十五日歩兵上等兵ニ進メラル。十二月二日宿營地ヲ發シ、六日鐵嶺ヨリ汽車ニ乗ジ、七日金州ニ下車シ、同日柳樹屯ニ著シ、十日柳樹屯ヨリ乘船シ、十三日和田岬ニ上陸シ、十五日大阪ニ凱旋歸營シ、十六日復員下令、十九日召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級柴崎喜三郎

柴崎喜三郎ハ、大阪市西區靱北通二丁目ノ平民、濱田喜代吉ノ三男ニシテ、明治十四年十一月生ル。後、母ヤチ生家柴崎ニ復籍スルニ及ビ喜三郎隨ヒテ其ノ姓ヲ冒ス。同區北堀江二番町ニ住居シ、家業ハ琴三味線販賣商ヲ營メリ。二十二年四月尋常小學校ニ入學シ、二十六年三月卒業セリ。後、妻そのヲ娶ル。三十四年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十六年二月歩兵一等卒ニ進ミ、十一月歸休除隊トナレリ。

三十七年三月八日、充員召集ニ應ジ歩兵第八聯隊ニ入隊シ、第四中隊ニ編入セラレ、四月二十三日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、同日大阪港ヲ出帆シテ、五月十日清國奉天省孫家咀子ニ上陸シ、爾來所屬中隊ノ北進ニ從ヒ、二十六日金州南山ノ攻撃ニ參加シ、潮水胸ニ達スル海中、殊ニ蘇家屯附近ノ敵ヨリ斜射ヲ受クル聯隊ノ最右翼ニ在リテ、勇敢能ク他兵ノ模範トナリテ奮戰シ、翌二十

七日ヨリ八月二十五日マデ中隊ノ北進ニ從ヒ、屢々警戒勤務ニ服シ、就中七月七日中隊ノ孫家屯ヨリ沙崗臺ニ向ヒ前進スルニ際シ、斥候長軍曹池田實市ニ從ヒ、左側ノ高地ヲ搜索シテ、中隊ノ前進ヲ容易ナラシメ、九日蓋平ノ攻撃ニ當リ旅團ノ豫備隊トナリ、二十四日大石橋附近ノ戰鬪ニハ師團ノ豫備隊トナレリ。次イデ八月三日海城附近ノ戰鬪ヲ經テ、二十六日ヨリ九月四日マデ中隊ノ北進ニ從ヒ、屢々警戒勤務ニ服シ、就中九月二日遼陽夜襲ノ際ハ、堅固ナル敵ノ守備線ニ肉薄シ、突然敵ノ猛射ヲ被リタルモ、能ク沈著ニ動作シテ他兵ノ模範トナリ、翌三日遼陽總攻撃ニ當リ、彈丸雨注ノ間ニ在ツテ長時間勇敢ニ戰鬪ヲ持續シ、遂ニ遼陽停車場ヲ占領スルニ與リテ大ニ功アリキ。十月十日ヨリ沙河ノ會戰ニ參加シ、其ノ所屬中隊ガ前兵トナリテ大東山堡ニ向ヒ前進ノ際、斥候長上等兵小谷松太郎ニ從ヒ、先頭大黃屯ニ進入シ、第一著ニ大東山堡ノ敵ヲ發見シ、中隊ヲシテ有利ニ展開スルヲ得セシメ、後、中隊ニ合シテ前面ノ敵ヲ擊退シ、翌十一日所屬大隊ノ小油虫堡ニ進入セントスルヤ、斥候長伍長森田

卯之助ニ從ヒ、大隊ノ右側警戒及ビ第六師團トノ連絡ニ任ジ、勇敢確實ニ其ノ任務ヲ達成シ、續イテ中隊ノ小油虫堡ヲ占領スルヤ、敵ノ乘馬歩兵約一個聯隊我ガ左側ニ迫ラントスルヲ擊退スルニ與リテ功アリ、翌十二日北烟臺ノ攻撃ニ際シ、彈雨ヲ冒シテ平坦地ニ奮闘シ他兵ノ模範ト稱セラル。越エテ十四日中隊ガ砲兵掩護トシテ大張良堡東北端無名部落ヲ占領スルヤ、敵ノ歩兵約一個大隊前後二回攻撃シ來リテ我ガ砲兵陣地ニ迫ラントスル時、沈著ニ應戰シテ能ク射撃威力ヲ發揚シ、猛烈ナル銃砲火ノ下ニ奮戰シ、遂ニ敵ヲ潰走セシムルニ與リテ力アリキ。同月十七日ヨリ三十八年二月二十四日マデ張良堡ニ在ツテ守備ニ服シ、嚴寒ヲ意トセズ、防禦陣地ノ構築並ビニ警戒勤務ニ服シテ最モ勵精シ、其ノ間、一月二十五日ヨリ二十九日ニ彌ル黒溝臺附近ノ戰鬪ニ參加セリ。二月二十日歩兵上等兵ニ進ミ、二十五日ヨリ中隊ノ北進ニ從ヒ、三月一日ヨリ奉天附近ノ會戰ニ參加シ、二日金山臺ノ敵ヲ攻撃スルニ當リ、敵彈雨注スル畑地ニ在ツテ、他兵ノ模範トナリテ勇敢ニ戰鬪ヲ繼續シ、次イデ中隊ノ突擊陣地ニ

達スルヤ敵ノ副防禦ヲ破壞スルノ命ヲ受ケ、猛烈ナル敵ノ射撃ヲ冒シテ、所命ノ地點ニ侵入シ、迅速ニ其ノ作業ヲ完成シ、中隊ヲシテ該村突入ヲ成功セシメタリ。翌三日小房身ノ攻撃ニ與リ、敵ノ銃砲彈集中ノ地域ニ勇戰シ、五日大蘇家堡ヲ占領スルヤ、猛烈ナル敵ノ砲撃ト共ニ歩兵約一聯隊ノ逆襲ヲ受ケシガ、此ノ際、沈著ニ防戰シテ射撃威力ヲ發揚シ、有利ノ戰鬪ヲ繼續シテ敵ニ多大ノ損害ヲ與ヘ、遂ニ潰走ニ陥ラシムルニ與リテ大ニ力アリ、日没後溫盛堡ニ至リ鐵道線路ニ據ル敵ト對戰シ、日夜間斷ナキ敵火ノ間ニ在ツテ勇敢ニ其ノ任務ヲ完ウシ、九日北進シテ奉天ノ占領ニ與リ、大ニ功アリキ。爾來四月三日マデ奉天停車場ノ守備ニ服シ、次イデ北進シテ拉馬勾附近ニ防禦陣地ノ構築ニ從事シ、又警戒勤務ニ服シ、常ニ勵精能ク其ノ任務ヲ完ウセリ。十二月八日凱旋歸還ノ爲、柳樹屯ヲ出帆シテ、十一日和田岬ニ上陸シ、十三日大阪ニ歸著シ、召集解除トナレリ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授

ケ賜ハリタリ。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級平田信太郎

平田信太郎ハ、大阪市西區本田町二丁目ノ平民、一柳常信ノ三男ニシテ、明治十四年十二月生ル。十九年十二月同區新炭屋町ノ平民平田吉兵衛ノ養子トナレリ。二十二年四月九條尋常小學校ニ入學シ、第三學年ヲ修業シテ退校シ、實業補習學校ニ入り、三年間修業シ、材木商ニ従事セリ。後、吉兵衛ノ女よしト結婚シ、現時兵庫縣武庫郡須磨村ニ住居ス。

三十四年十二月歩兵第八聯隊ニ入隊シ、三十五年十二月歩兵一等卒ニ進ム。三十七年二月六日歩兵第八聯隊第四中隊ニ屬シ、三月四日マデ警急配備ノ爲由良附近ニ出張シ、熱心ニ勤務ニ服セリ。同月六日動員令下リ、四月二十三日、大阪港ヨリ乗船シテ、五月十日清國奉天省孫家咀子ニ上陸シ、二十五日ヨ

リ二十六日ニ互リ金州城及ビ南山ノ攻撃戰鬪ニ參加シ、第一線ニ進ミシガ、敵彈猛烈ニシテ加フルニ海潮腰ニ達シ、運動困難ヲ極ムルニ拘ラズ勇猛果敢ニ奮戰シテ敵壘ニ突入シ、我が軍遂ニ砲臺ヲ占領セシガ、信太郎ノ勇猛壯烈ナル動作ハ大ニ他兵ノ勇氣ヲ鼓舞シ、兵卒ノ龜鑑ト稱セラレタリ。六月十五日、得利寺ノ戰鬪以來選バレテ護旗兵トナリ、漸次北進シテ、七月九日蓋平、二十三日ヨリ二十五日マデ大石橋附近ニ轉戦シ、屢々傳令トシテ彈雨ノ下ヲ馳驅シ其ノ任務ヲ完ウセリ。越エテ八月二十六日ヨリ九月四日マデ鞍山站、首山堡及ビ遼陽ノ諸戰鬪ニ參與シ連日勇戰奮闘セシガ、殊ニ九月三日遼陽停車場ノ攻撃ニ當リテハ、各大隊ト聯隊トノ連絡ヲ確實ナラシムル爲、重要ナル傳令ノ任務ヲ命ゼラレシガ、此ノ日戰鬪猛烈ヲ極メ、敵彈雨飛シテ殆ド寸隙ナク光景慘憺タリシモ、信太郎ハ意氣昂然トシテ其ノ間ヲ往返セリ。次イデ十月十日ヨリ沙河ノ會戰ニ參加シ、十一日小油虫堡ニ於テ優勢ナル敵ノ攻撃ヲ受ケシモ、我が兵之ヲ拒止シテ遂ニ擊退セシガ、此ノ際信太郎ハ、儼然トシテ軍旗ヲ擁護シ我

ガ士氣ヲ鼓舞セリ。翌十二日北畑臺ノ攻撃ニ當リ、敵ハ銃砲彈ヲ以テ前面ノ開濶地ヲ掃射シ危險甚シカリモ、信太郎ハ屢々其ノ間ヲ往復シテ命令報告ヲ傳達セリ。十四日張良堡ニ於テ優勢ナル敵ノ攻撃ヲ受ケシ際、猛烈ナル敵彈ノ下ニ軍旗ヲ擁護シ自若トシテ動ゼズ、其ノ豪膽ナル態度ハ大ニ兵卒ノ勇ヲ鼓舞シタリ。爾後張良堡ニ於テ近ク敵ト相對峙シ、常ニ勇敢ニ動作シテ其ノ職務ニ勵精セリ。十一月三日歩兵上等兵ニ進メラレ、原中隊ニ復歸シ、約五ヶ月ノ冬營中屢々斥候長トシテ近ク戰線ニ進出シ、詳密ニ敵狀ヲ搜索シ、有利ナル報告ヲ齎ラシ、又困難ナル前哨勤務ニ服セリ。

三十八年三月一日ヨリ奉天附近ノ會戰ニ參加シ、終始勇敢ニ動作シテ克ク分隊長ヲ輔佐セリ。殊ニ一日金山臺ノ攻撃ニ際シテハ敵ノ銃砲彈ノ猛烈ニ雨下スル間ニ在リテ勇戰最モ努メ、三日ヨリ四日ニ亙リ瓜加臺及ビ小房身ノ戰鬪ニ於テハ沈著豪膽ナル態度ヲ以テ他兵ニ模範ヲ示シ、七日溫盛堡ニ於ケル激戰中分隊長敵彈ノ爲ニ負傷スルヤ、直チニ代リテ分隊長ノ指揮ヲ執リ、自カ

ラ先頭ニ立チテ有利ニ之ヲ導キ、敵ニ多大ノ損害ヲ與ヘタリ。同月十五日病ニ由リテ病院ニ入り、次イデ内地ニ後送セラレ大阪豫備病院ニ收容セラレ。五月二十五日全治退院シ、歩兵第八聯隊補充大隊ニ入隊シ、繁多ナル勤務ニ執掌シ、又補充兵ノ教育ヲ助ケタリ。六月二十五日同聯隊ノ第六中隊ニ轉入トナリ、七月二十一日歩兵第六十一聯隊第二中隊ニ編入セラレ、八月十三日再ビ出征ス。斯クテ團山子溝ニ在リシガ、燬クガ如キ炎熱ニ抗シ、瘴癘ノ氣ト闘ヒ、幾多ノ艱苦ヲ意トセズ傳令及ビ警戒ノ勤務ニ服シ、十月十日以降奉天守備ノ任ニ就キ常ニ勵精シテ其ノ職責ヲ完ウセリ。

三十九年三月ニ至リ凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、同月下旬大阪ニ歸著シ善行證書並ニ下士適任證書ヲ附與セラレ、次イデ延期現役滿期除隊トナレリ。戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍騎兵上等兵勳八等功七級淡野辰藏

淡野辰藏ハ、大阪市西區松島町二丁目ノ平民、喜三郎ノ次男ニシテ、明治十五年十一月生ル。二十二年四月松島尋常小學校ニ入學シ、二十六年三月卒業シ、四月高等小學校ニ入り、三十六年三月卒業シテ徵兵入營マデ中學校ニ在學セリ。後、同區三軒家上ノ町ニ移轉シ、商業ニ従事セリ。

三十六年十二月騎兵第四聯隊ニ入隊シ、第二中隊ニ編入セラル。

三十七年五月六日動員令下リ、十六日、出征ノ爲大阪衛戍地ヲ發シ、二十日宇品港ヨリ乗船シテ、二十七日清國奉天省張家屯ニ上陸シ、爾來得利寺、蓋平、大石橋、遼陽、沙河、奉天ノ各戰鬪及ビ其ノ追擊戰ニ參與シ、屢々將校斥候ニ從ヒテ其ノ任務ヲ輔佐シ、又自カラ斥候トナリテ敵地ニ入り、或ハ敵彈雨注ノ間傳令ノ任ニ當リ、常ニ勇敢機敏ニ動作シテ克ク其ノ任務ヲ遂行セリ。就中八月二十六日ヨリ九月四日ニ亙ル首山堡附近及ビ遼陽附近ノ諸戰ニ際シテハ、

傳騎トシテ歩兵第十九旅團ニ配屬セラレ、屢々猛烈ナル敵ノ銃砲火ヲ冒シテ砲兵陣地及ビ第一線ニ往復シ、殊ニ三十日夜中川軍曹ニ隨ヒ、歩兵第九聯隊ニ旅團長ノ命令ヲ傳達セシ時ノ如キハ、暗夜降雨甚シク、咫尺モ辨ジ難クシテ行動困難ヲ極メ、且敵ノ銃砲火ハ附近ヲ掃射シ、第九聯隊ノ位置モ亦不明ナリシヲ以テ其ノ任務ヲ達成スルコト容易ナラザリシモ、克ク軍曹ヲ佐ケテ運動シ、遂ニ「アンツヤラオウオ」ニ於テ該聯隊ヲ發見シ、時機ヲ失セズシテ旅團長ノ命令ヲ傳達スルコトヲ得タリ。又十月十日ヨリ沙河ノ會戰ニ當リ、傳騎トシテ歩兵第十九旅團ニ配屬セラレ、屢々彈雨ヲ冒シテ斥候傳令等ノ諸勤務ニ服シ、殊ニ十日該旅團ノ西寶屯ニ位置スルニ當リ、古城子ニ在ル小泉旅團ニ連絡スベキ命ヲ受ケ、猛烈ナル敵ノ銃砲火ヲ冒シテ、迅速ニ其ノ任務ヲ完ウセシノミナラズ、同夜命ヲ受ケ、夜暗道路ヲ失フテ如何トモスル能ハザル旅團大行李ヲ搜索シ、之ヲ誘導シテ該旅團ノ給養ニ支障ナキヲ得セシメタリ。

三十八年一月二十五日ヨリ二十九日ニ亙ル黑溝臺附近ノ會戰ヲ經テ、二月

二十八日ヨリ奉天附近ノ會戰ニ參與シ、十一日ヨリ十九日ニ瓦ル鐵嶺及ビ開原附近ノ追撃戰ヲ經テ、二十二日昌圖ニ前進シ、四月二十日小隊長ニ隨ヒテ昌圖附近ノ敵情偵察ニ從事シ、且ツ咀溝ニ於テ山河堡附近ニ約一師團ノ敵兵アルヲ發見シタルニ由リ、兵二名ヲ率キテ十里臺ニ前進シ、斥候ノ右側ヲ警戒シ併セテ敵情ヲ視察スベキ命ヲ受ケ、終日敵騎ヨリ射撃ヲ受ケシモ、屈セズシテ其ノ任務ヲ續行シ、且ツ東部十里臺ニ敵ノ敗殘兵三名アルヲ發見スルヤ、進ンデ之ヲ捕獲シ以テ敵情ヲ知得スルノ便宜ニ供セリ。十二月十三日凱旋歸還ノ爲柳樹屯ヲ出帆シテ、十七日神戸港ニ上陸シ、十八日大阪ニ歸營シ、二十三日滿期除隊トナレリ。是レヨリ先、騎兵上等兵ニ進メラル。後、妻のぶヲ娶リ四女ヲ舉グ。

戰役ノ功ニ依リ、功七級金鷄勳章、年金百圓、並ビニ勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜ハリタリ。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級川口福藏



川口福藏ハ、大阪市東區平野町一丁目ノ平民、福之助ノ長男ニシテ、明治十五年八月生ル。二十二年四月尋常小學校ニ入學シ、卒業後引續キ高等小學校ニ入り、三十年三月卒業ス。家ハ寒天販賣ヲ業トセシモ、後年ニ至リ父母ト別居シテ味ノ素ノ販賣ニ從事シ、西區京町堀上通四丁目ニ移轉シ、妻ぬいヲ娶リ、一女ヲ舉グ。

三十五年十二月由良要塞砲兵聯隊ニ入隊シ、三十六年十二月砲兵一等卒ニ進ム。

三十七年二月六日警急配備令下リ、四月七日門崎砲臺ノ守備ニ服シ、十三日